ブルーの低音

綾野 琴子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブルーの低音

【Ｎコード】
Ｎ１３１６Ｉ

【作者名】
綾野　琴子

【あらすじ】
様々な理由から少女、少年五人は吹奏楽部に入り、低音楽器に関わる事となった。初心者と経験者、コンクール、仲間、先輩後輩、部長、家族。そして、低音楽器奏者が直面する事。多くの経験をして、彼女達が得たものは……？

0　入学式の日に

入学式の日の空は晴れだった。だが、雲の割合がかなり多い日でもある、中途半端な晴れであった。

体育館の真ん中で校長の話を聞いている相原（あいはら）　真琴（まこと）は今、こんな空のような気分である。高校生になれて嬉しいはずなのに、憂うつなのだ。

別に、不本意入学だから憂うつだというわけではない。むしろ、第一志望の高校に合格したのだ。嬉しくないはずがない。

憂うつな理由は、知らない人々の密集と、入学式特有の堅い雰囲気であった。今まで何度も経験してきたが、いまだに慣れない。ああいう場に居ると、どうも必要以上に緊張してしまう。

「以上で、第１０３回入学式を、終了します」

教頭の声が響く。真琴は、やっと終わった……！という思いで満たされた。思わず顔がほころぶ。隣に座っている女の子が不思議そうに自分を見たが、真琴は喜びの気持ちで胸がいっぱいだったので、特に女の子を気にしなかった。

「礼！」

深くお辞儀し、また元の姿勢に戻る。憂うつな式は終わった、さっさと帰ろう。真琴はそう考えていた。

数分後。担任の女の先生が「三組の皆さん、二列になって移動してください！」と言うのが聞こえた。

真琴はというと、さっきまでの笑顔が嘘のように、再び憂うつそうな顔になっている。入学式後には、それぞれのクラスで長いホームルームをするということを、すっかり忘れていたのだ。

ちらっと左を向くと、隣に座っていた女の子がまた不思議そうに、真琴を見ていた。自分の隣に居る人が、突然喜んだり落ち込んだりしているのだから、不審に思うのは当たり前だろう。

真琴は前を向き直すと、憂うつ顔から真顔に切り替えた。次からは感情が顔に出ないようにしよう、これ以上変に思われたくない……と考えながら。

体育館入口から外に出ると、心地よい風が真琴の頬をかすめた。空を見ると、雲が少なくなっていた。風で雲が流れていったのだろう。

真琴は視線を渡り廊下へと移す。このまま真っ直ぐ渡り廊下を歩くと、校舎北館に戻る。真琴達三組は列を崩さないで、男子から順に渡っていった。

校舎の中に入った後も、三組は黙々と廊下を歩く。が、ふいに沈黙が破れた。

「おい、あれは何だよ？」

真琴の三列前にいる男子生徒が、隣の男子に聞きながら左を向いたのだ。真琴も、男子生徒に釣られて左を向く。

見た瞬間、思わず目を見開いた。

窓越しに見える二階建ての綺麗な建物から、人がどんどん出てくる。何やら楽器らしきものを持っているようだ。

（何これ？　何十人いるの？）

建物から出て来る人数に、真琴は驚きを隠せない。

……何かのオーケストラ。

沢山の人と楽器から連想したのは、せいぜいこんなものであった。音楽や楽器というものに関しては、小中学校の音楽の授業で習った知識しかない。

職員玄関に入った所で右に曲がり、北館から南館への広い渡り廊下を歩く。完全に「オーケストラ」の姿は見えなくなった。

（……わたしには、関係ないか）

部活はやらないつもりだ。やるとしても、あんな大人数の部活には入らない。真琴はもう決め込んでいた。

しかし、四階に上がるときも教室に入るときも、何故か「オーケストラ」の事が心に引っかかる。

（関係ないはずなのに……何で気になるんだろう）

気になる理由を考えようとしたが、ちょうど担任の先生が入ってきたので、止めた。

真琴と「オーケストラ」が出会うのは、これから数十分後の事だ。

1　きっかけ

綺麗な青空だ。

教室の一番廊下側、前から三番目の席に座っている真琴は、顔を窓の方に向け、頬杖を付きながら考えていた。窓際の席ではないのが悔しい。窓際だったら、空がもう少しよく見えるのに。

数分経ったあと、窓から目を離す。窓の方ばかり見ていたら、さすがに先生にバレると思ったからだ。

今度は先生を視界に入れながら、周りの生徒を見渡す。新入生達は綺麗に整えられた紺色のブレザーを着て、真っ白な上履きを履いて教室中にひしめき合っていた。みんな、どこか初々しい雰囲気を漂わせている。

「では、これでホームルームを終わります。起立！」

先生が号令をかけた。新入生は椅子を引いて立ち上がる。少しの間、教室の中が騒がしくなった。

「礼！」

「ありがとうございましたー」

挨拶が終わり、新入生がぞろぞろと教室を出て行く。

（やっと帰れる……）

真琴はため息をついた後、心細そうな表情をしながら、静かに廊下を歩いていった。

四月上旬。横浜市立　虹西（こうせい）高校の入学式。真琴はついさっきまで、来週の予定や高校生になることについての心得等を、担任の先生から聞いていた。

先生の長い話を聞く事は退屈。しかし、そんな事よりも教室に長く居る事の方が、真琴にとっては嫌だった。

虹西高校には、真琴と同じ中学出身の子は一人もいないため、今は知り合いが全くいない。そのことは真琴自身わかっていたはずだ

ったが、一人というのは何かしら不安になるものだ。
（……やっぱり、無理して虹西に行かない方が良かったのかなあ）
そんな事を考えながら階段を下り、玄関南口を出る。暖かい風が吹いていた。外はなんだか騒がしい。
真琴の目の前には玄関北口、東側には、北館と南館をつなぐ渡り廊下が見える。西の方は中庭だ。さらに、このまま中庭を突き進むと駐車場、もとい校庭に出る。
（早く家に帰ろう……！）
真琴は西へ一直線に進もうとした。しかし、色んな看板を持っている人やビラ配りをしている人がたくさんいて、校庭が全く見えない。
「なんなの、これは……？」
思わず声を漏らし、恐る恐る中庭を歩き出す。すると上級生らしき人達が、次々とチラシを渡しながら声をかけていった。
「バドミントン部に入りませんか～！」
「野球部のマネージャー募集中です！」
「茶道部にぜひ来てくださ～い」
なるほど、部活勧誘をしているのかと、真琴は納得した。
虹西高校は部活が盛んだという事は中学の時に度々聞いていた。だが、入学式の日に部活勧誘があるとは思っていなかった。
真琴は、（なんかすごいなぁ……）という感想を抱きながら、少しずつ前に進んでいった。

「やっと出られた……」
結局、中庭を出るのにかなりの時間をかけてしまった。
新しい環境、知らない人達、更に人混み。そのせいで、真琴は体力的にも精神的にも限界が来ている。
「そうだ、早く校庭に行かないと……」
母が首を長くして待っているに違いない。真琴は沢山のチラシを茶色のスクールバッグの中に押し込み、校庭へ向かおうとした……

その時だった。
高音から低音までの様々な楽器が混ざり合った、何とも言えない大きな音が、真琴の耳に入ってきたのだ。真琴は思わず、スクールバッグを落としてしまった。
慌ててバッグを拾い、音が聴こえた右の方を向く。すると真琴の目の前、校舎北館の端に、楽器を持った沢山の人達が見えた。
（あっ、さっきのオーケストラ！）
数十分前に見た団体だった。その人達は、同じ音を一斉に吹いている。音を合わせているのだろうか。
「……何するんだろう？」
真琴の出身中学には、金色や銀色の楽器を使っている部は無かった。だから、この部がどんな演奏をするのか、かなり気になる。せっかくだからと、真琴は演奏を聴くことにした。
音はやがて止んでいった。指揮棒を持った男子生徒が、部員達を見渡す。準備が出来ているか、確認をしているようだ。
見渡し終えると、男子生徒は指揮棒を上げた。部員達は一斉に曲を吹き始める。
（この曲は、『さくらんぼ』だ！）
大塚愛のヒット曲がここで聴けるとは、全然思っていなかった。予想外の事に、真琴はただ目を丸くするばかりだ。
指揮者の男子生徒が楽しそうに、明るい笑顔を部員に向けて棒を振る。指揮を見ながら、タンバリンを持った人達が、気持ちよさそうに叩く。黒い縦笛や銀色の横笛を持った人が、リズムにのって体を動かす。さらに縦笛や横笛の後ろにいた金色の楽器達が、体を反らせて、輝かしい音色を出した。
（多分あの人達、上手いんだろうな……）
音楽にはあまり詳しく無い真琴だが、なんとなくそれはわかった。前を通りかかった人達が、惹きつけられるように立ち止まって、笑顔になっているから。それに、自然とリズムをとっている人がいるから。

いつのまにか、真琴は校庭に行く事を忘れて『さくらんぼ』を聴いていた。思わず演奏に夢中になる。気分が乗ってくる。ここまで楽しい気持ちになるのは、本当に久しぶりであった。
（なんでこんなに楽しいんだろう……もしかして、あの人達が楽しそうに吹いているから？）
そんな疑問を持ちながら、真琴はどんどん演奏に引き込まれていった。

（どうして……？）
三曲もの演奏を聴き終えた後、最初に思ったのはこの一言だった。
目の前にいる人達が、何故誰の目にも明らかな程楽しそうに吹けるのか、全く解らなかった。少なくとも、真琴には。
「……の、……」
どこからか女の人の声が聞こえる。だが、真琴は考え事に夢中になっていて、全く気付かない。
（この部に入れば、なんであんなに楽しいのか、解るようになるのかな）
「す……ませ……」
（それに、この部だったら、自分を……。でも……）
「……あの、すいませーん！」
「はっ……はい！？」
思考はそこで途切れた。
「あ……ごめんね。気になったから声をかけてみたんだけど、全く気付かないもんだからつい……。考え事を邪魔したみたいだね」
女の人が申し訳なさそうな顔をして謝ったので、真琴は何か言おうとして女の人の方を向く。とその時、女の人の髪の毛が目に入った。
長さは背中の真ん中あたりまである。そして、どうやら猫っ毛らしい。柔らかそうなロングヘアーが少量の風に吹かれてふわふわとなびいた。

――髪、伸ばしてみようかな。そんな思いが一瞬、真琴の頭の中に浮かんだ。
「……あの～？」
女の人の言葉を聞いてはっと我に返った。真琴は慌てて「あっ、はい！　大丈夫です！」と返す。体温が一気に上がるのを感じた。
「なら良かった～！　はい、チラシです！」
女の人は安心したのか、急に元気になった。真琴は少々戸惑いつつ、チラシを受け取る。そして緊張しつつ、うつむき気味に女の人に尋ねた。
「……すいません、あの」
「ん？　何？」
女の人は微笑みながら首を傾げる。
「どうして、あの人達はあんなに楽しそうに吹けるんですか？」
「そんなの、決まっているよ～」
女の人はとびっきりの笑顔で答えた。
「とにかく楽しいからだよ！」
彼女の言葉に対して、真琴は「そうですか……」と言うことしか出来なかった。
「ねぇ」
今度は女の人が真琴に尋ねた。
「はい？」
「キミは『吹奏楽』に興味あるの？」
「……『スイソウガク』？」
「だって、すごく楽しそうに聴いていたから！」
確かに、母の事を忘れる程、「スイソウガク」とか言う演奏に聴き入っていた。
「……はい、そうですね。興味、あります」
沢山の人が色んな楽器を楽しそうに演奏しているのを見て、ぼんやりと思い始めていた。
（あの中に、入りたいかも――）

「そっか！　じゃあ、新入生歓迎会でも演奏するから、楽しみにしててね！　あと、来週から仮入部があるから、ぜひ来てみて～。みんな、待っているから！」
女の人は一度真琴に背を向けて歩こうとしたが、思い出したように真琴の方を振り返った。真琴は驚きのあまりビクッとし、目をつぶる。
女の人は真琴に向かってこう言った。
「吹奏楽部は、楽しいよ！」
真琴は顔を上げる。しかし、女の人は既に背を向け、吹奏楽部の中に戻っていくところだった。
女の人を目で見送った後、真琴はつぶやいた。
「……唐突だったなあ」
いきなり現れ、勧誘をし、去る。かなり驚いたが、女の人のおかげではっきりと決心する事が出来た。
「でも、わたし、あの部ならやっていけるかもしれない……」
心地よい北風が吹く。真琴は、肩に掛かる長さのダークブラウンの髪をなびかせながら、再び校庭に向かって歩き始めた。

1　きっかけ（後書き）

小説の更新情報については、作者ページの活動報告を見てください。

2　部活見学

入学式から数日立った、月曜日。今日は大事な日だ。しかし、そんな日にうっかりうたた寝をしている高校生が、一人いた。
「と……。……ことちゃ……。……真琴ちゃん！」
「……うーん？」
目を開け、視線をゆっくりと上に向ける。すると、呆れ気味の表情をした、二つにくくった黒髪の少女が真琴の目に映った。
「あれ……香奈ちゃん？　どうしたの？」
「どうしたもこうしたもないよ～。もう放課後だよ！」
「えっ、うそ」
「本当だよ」
さっきから話しているのは相原真琴と、席が近いということで最近友達になった、青木（あおき）　香奈（かな）。六校時が終わっても真琴はまだうたた寝をしていたため、香奈が起こしにきたのだった。
「全くこの子は……。今日から待ちに待った仮入部期間だっていうのに～」
香奈は口に手を当てて、苦笑いした。
「あ……そうだね！」
仮入部期間。その言葉を聞いたとたん、真琴は目を輝かせはじめた。入学式の時からずっと、仮入部が始まるのを待っていたのだから。そんな真琴の嬉しそうな様子を見て、香奈は笑顔になる。
「眠気が覚めたのなら良かった～。私は合唱部に入りたいから、今から音楽室に行ってくるね。真琴ちゃんはどの部に行くの？」
真琴の答えはもう決まっている。あの時からずっと気になっていた部に。
「わたしは……吹奏楽部に行く！」
言った時、自然に笑みがこぼれるのを感じた。

玄関南口で香奈と別れて、真琴は吹奏楽部の部室へと向かった。
校舎南館から出て東側にある、北館と南館をつなぐ渡り廊下をさらに突き抜ける。渡り廊下を抜けると、右側には車が数台（恐らくここも駐車場なのだろう）、左側には、何であるのか解らないが、庭園があった。目の前には部室らしき建物が見える。真琴は庭園を横目に部室へと向かった。
近くで部室を見ると、薄汚れている石のブロックの壁に、所々キズが入っている黒色のドアが目についた。明らかに年季が入っている。
中からは、何かを叩く音。誰かがいるのだろう。しかし、真琴はドアを開ける勇気がなく、部室の前をしばらくうろうろした。
（案内図を見てまさかとは思ったけど、部室がこんなに目立たない所にあるなんて。しかもやけに古い建物だし……本当にここで合ってるんだよね？）
真琴は、今日の朝に配られた部活案内を取り出す。

「活動場所……虹西高校の吹奏楽部は、音楽室が活動場所ではありません。音楽室は合唱部が使っています。だから吹奏楽部は、部室や教室、『虹館（にじかん）』という広い多目的ホールなど、様々な所で活動しています。見学したい人は、まず裏庭にある部室に来てください！」

そんな文章の下に、部員が書いたのであろう部室への地図が載ってあった。
（……場所は合ってる。じゃあ、早くドアを開けなきゃ……）
その時急に、ドアが「ガチャッ」という音を立て、ゆっくりと開いていった。急な事に真琴はつい、体を硬直させてしまう。
「さっきからずっといるみたいだけど……君、見学？」
背が高い、そして足の長い男の人が、真琴を見下ろしながら尋ねてきた。
（わたし、もしかして窓から見えてたの？　うわ～、恥ずかしい…

…）

頬が熱くなるのを感じて、思わず下を向く。だが、今は恥じている場合ではない。真琴は緊張しつつ、再び顔を上げて返事をした。

「は、はい、そうです！」

「打楽器希望なの？　それとも管楽器？」

（……打楽器？　管楽器？　しまった、楽器までは考えてなかった……）

やりたい楽器のことは全然考えてなかった。そもそも、楽器の名前さえわからないのだ。真琴は黙り込んだ。冷や汗がどんどん出てくる。

男の人は、真琴の様子を見てどうやら事情を察したらしく、提案をしてきた。

「じゃあ、もしよかったら、僕が色々案内するけど？」

真琴は、優しい人だと思った。何も知らない真琴にとって、男の人の気遣いが、とても温かく感じられた。

「あ、ありがとうございます……よろしくお願いします！」

「こちらこそよろしく！　じゃあ、まずは僕の担当の打楽器から行くよ～。まあ、場所はここ、部室なんだけどね」

「だから、中から叩く音がしたんですね……」

こうして、真琴は全部の楽器を、この男の人と一緒に回ることになった。

一時間後、二人は再び部室前に戻ってきた。男の人が話しかける。

「とりあえず、これで一通り回ったかな」

「まさか、こんなに楽器があったなんて……」

「驚いた？　虹西の吹部は人数が多いからね～。だから楽器の種類も多いんだ」

聞くところによると、虹西高校吹奏楽部の部員は、今のところ約七十人いる。楽器も、アルトクラリネットやイングリッシュホルンなど、見たことの無い楽器が結構あった。

人数が多いというのは、その部が人気である証拠。男の人が言うには、毎年多くの新入生が入ってくるらしい。
（高校だから、やっぱり経験者ばっかり入ってくるんだろうな～。初心者、わたしだけしかいなかったりして……。先生や先輩も厳しいかも。……わたし、ついていけるかなぁ。なんか不安になってきた……）
「おーい、大丈夫かぁ？」
「……え？　は、はい！　すみません！」
また、考えすぎてしまった。真琴は考え事に集中すると、つい周りの音が聞こえなくなってしまう。
「そういえば、もう全部の楽器を回りましたか？」
「いや、まだ一つ残ってるんだ」
「えっ！　まだあるんですか？　管楽器って、本当に種類多いんですね……」
「違うよ、管楽器じゃなくて、唯一の弦楽器なんだ」
「管楽器じゃ、ない？」
弦楽器があるとは思わなかった。入学式のときは、弦楽器があったかどうかまではわからなかった。
「じゃあ、最後の楽器のところへ行こう！」

そして着いたのが、部室と同じような感じの壁に、青色のトタンの屋根が付いた倉庫だ。横がかなり長く、扉が四つもある。真琴達は、その中の一番左にある扉の前に立った。
「じゃあ、ちょっと呼んでくるから待ってて！」
男の人は倉庫の中に入っていく。
男の人を見送った後、真琴は改めて倉庫全体を見渡してみた。お世辞にも、綺麗とは言えない建物だ。絶対、昔から建っていたに違いない。何故なら、石のブロックの壁が、部室の壁よりもさらに薄汚れていたからだ。
（何でこんな変な所で練習してるんだろう……？　それに、吹奏楽

なのに「弦楽器」って、一体？）
突っ込みたいことで頭がいっぱいになったが、突然扉が開いて大きな音を立てたので、考え事は中断された。真琴は再び、体を硬直させる。
「キミが、見学希望の子！？」
話しかけてきたのは女の人だった。いかにも柔らかい髪質のショートヘアー。そして、結構背が高い。真琴とは、ざっと十センチくらい差がある。
「はっ……はい、そうです」
とっさに応えると、女の人は真琴をじっと見つめてきた。真琴は緊張しながらも、女の人を見つめ返す。
しばらく見つめ合った後、女の人は急に笑顔になった。真琴はきょとんとする。
「ここに見学しにくる子はあまりいないから嬉しいな～！　ちょっと、先輩も出てきてくださ～い！」
「んー、わかった」
今度はクールそうな男の人が、楽器を抱えながらゆっくりと出てきた。
真琴は楽器を見た瞬間、目を丸くした。出て来た楽器は……「ヴァイオリンのお化け」だったからだ。

3　先輩、そして正体

デカい。楽器の第一印象は、ただこの言葉だけだった。
真琴の身長は約１５５センチ。だが、このヴァイオリンのお化けは、その身長を大きく越えている。１８０センチはあるだろうか。
「今、明らかに『デカい』とか思っただろ？」
クールそうな男の人の言葉を聞いて、一気に心臓が高鳴った。まさに男の人の言った通りだったからだ。
「……図星だな」
男の人はやっぱりか……と言いたげに、苦笑いをした。
「しょうがないですよ、先輩。最初は誰だってそう思いますって！そんなにこの子を困らせないであげてくださいよ～」
ショートヘアーの女の人が、真琴をフォローする。
「まあ、それもそうだな。いや、あまりにも分かりやすい反応だったから、つい」
「えっ……、わたしってそんなに分かりやすいですか？」
真琴は男の人に恐る恐る尋ねた。
「うん、分かりやすい」
男の人は即答する。さらに、こんな事まで言ってきた。
「もしかして、顔に出るタイプ？」
「……そうかも、です」
入学式の時、感情を顔に出さないようにしようと誓ったのに、もうその誓いを破ってしまった。
「なんか、恥ずかしい……」
「そんな、あたしは全然気にしないよ！」
女の人は、真琴に笑顔で話しかけた。そして、クールそうな男の人をじとーっと見つめる。まるで、「この子をこれ以上からかわないでください！」とでも言っているかのようだ。
「あー……、なんか、ゴメンな？」

クールそうな男の人は、女の人の雰囲気を察したのか、謝る。真琴は慌てて「いえ、大丈夫です」と返した。
話はどんどん盛り上がろうとする。しかし、倉庫の中から聞こえてきた声で、話は一気に中断された。
「お～い、僕を忘れないでくれ～……」
三人は一瞬固まった。そして冷や汗を垂らしながら、開いたままの扉の向こうをゆっくりと、同時に見る。
中では、背の高い男の人がヴァイオリンのお化けを持って、困り顔をしながら立っていた。そんな男の人の様子を見て、三人は「この人の事、すっかり忘れてた！」などとは言えなかったのであった。

数分後、倉庫の中にて。ふと、」クールそうな男の人がつぶやいた。
「本当は、中は意外と広い……はずなんだけどな」
しかし、ヴァイオリンのお化けが二台、さらに大太鼓や小太鼓、タンバリンやマラカスなどたくさんの打楽器がスペースを取っているため、中はかなり狭くなっている。
背の高い男の人は「悪いね～、打楽器が七割も占領しちゃって」と、大きなヴァイオリンを毛布の上に置きながら、クールそうな男の人に返した。そして、視線を女の人へと移す。
「それはともかくとして……田中ちゃん。新入生の見学の話をした途端に、いきなり楽器を押し付けて外に出たから、本当にビックリしたよ～」
背の高い男の人は笑いながら話した。
「つい興奮しちゃったもので……先輩、すいません！」
田中という人が申し訳なさそうに、顔を赤くしながら謝る。背が高い男の人は笑顔で、「いや、大丈夫だよ」と返した。
「じゃあ、僕はそろそろ練習に戻るね。原っちと田中ちゃん、後はよろしく」
「ああ、わかった」

「わかりました！」
二人はすぐに返事をした。背の高い男の人は微笑む。いい笑顔だな……と、真琴は思った。
「三人とも、またね～」
そう言って手を振った後、背の高い男の人は部室の方へ走っていった。
男の人が見えなくなった後、原っちという人が口を開く。
「……そういえば、まだ自己紹介してないよな」
「あ！　そういえば忘れてたなぁ」
田中という人が応える。
「じゃあ、オレから言うよ。オレは、原田（はらだ）　智貴（ともき）といいます。これでも一応、最上級生です」
「あたしは田中（たなか）　治美（はるみ）です！　二年生です」
二人は爽やかに軽い自己紹介をした。
「次は、キミの番だよ～。さあ、どうぞ！」
治美がいかにも楽しそうな表情をして、真琴を促した。
「わたしは……」
真琴は応えようとした。しかし口の中が渇いていて、思うように声が出ない。
「えーと、あの……相原――です」
緊張して、声がだんだん小さくなってしまった。
「えっ、何だって？　名前は……」
智貴が聞き返す。
「……マ、コ、ト、です！　漢字は、真実の真に、楽器の琴です！」
今度は大きな声で言いきった。頬が火照るのを感じる。
「そっか！　真琴ちゃん、よろしくね～」
治美が笑顔で応えた。
「よろしくな」
智貴も応える。よく見ると、口角が上がっていた。一見クールだが、どうやら感情を全く出さないタイプではないらしい。

真琴はしばらくキョトンとしていた。そして数秒後、やっと真琴の頭の中が回転し始めた。自分は、先輩達に快く迎え入れられた……そう考えた途端、真琴の肩の力がどんどん抜けていった。
「……はい！　よろしくお願いします」
それからは、三人とも和やかに自己紹介を進めた。

色々な話をしている内に、どんどん時間が過ぎていった。
「もうこんな時間か。そろそろ、忘れ去られた楽器……の紹介をしよう」
智貴が倉庫の隅を指さす。見ると「忘れ去られた楽器」が、つまらないと言わんばかりに横たわっていた。
「ああ！　ごめんね～」
治美が素早く楽器に抱きつく。
「……えー、改めて紹介します」
智貴はさりげなく治美をスルーした。そして、毛布の上に置いてあったもう一台のヴァイオリンを立てて、話を続けた。
「この楽器は……『コントラバス』です」
やっと、このヴァイオリンの名前が判明した……と、真琴は心の中で思った。
「あ、言っとくけど、これはヴァイオリンを大きくしたものではありません」
「……えっ！」
こんなに似てるのに……と思いながら、真琴は首を傾げた。
「まあ、確かに似てるんだけど」
智貴が、真琴の考えを読み取ったかのように話す。
「コントラバスはヴァイオリンと違って、なで肩なんだ」
真琴はコントラバスの肩（と言える部分）を見た。確かになで肩だ。緩やかにカーブしている。ヴァイオリンはもっと急カーブしていたような気がする。
「ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロは『ヴァイオリン属』と呼ばれ

る楽器なんだ。コントラバスも、とりあえずヴァイオリン属に入っているけど……」
そこで、いつの間にか真琴の隣に立っていた治美が、智貴を遮って説明した。
「昔使われていた、『ヴィオール』っていう、昔の楽器の特徴を引き継いでるんだよ。コントラバスの祖先は、ヴィオール属の『ヴィオローネ』っていう低弦楽器だったかな。なで肩がその名残～」
智貴は「オレの台詞が……」と一言つぶやいた。首がうなだれている。最後まで説明をしたかったらしい。治美は、そんな智貴を気にせずに話を続ける。
「じゃあ、実際に弾いてみるね！」
治美は毛布の上に置いてあったコントラバスを立てて、構えた。かなり手慣れている様子だ。
「……あっ、待って。オレも弾きたい」
智貴はもともと立てていたコントラバスを、改めて構え直した。準備が早い。
「そうですね～……。じゃあ、あれをやりましょうか」
「おう、そうしよう」
治美の提案に智貴が乗る。真琴は何も分からないので、二人の会話をただじっと聞いていた。
「真琴ちゃん、立って聴くのもあれだから、椅子にでも座って！」
治美の言葉の通りに、真琴は近くに立てかけてあった折りたたみ式の椅子を広げて、そっと座る。その間に、二人は音を合わせ始めた。さっきまでの親しみの持てる雰囲気とは打って変わり、真剣な表情だ。
しばらくして音合わせが終わり、倉庫の中が静かになった。真琴の心臓の音が、次第に大きくなっていく。
智貴と治美は、お互いに顔を見合わせる。そして、同時に首を降った後、音楽を奏で始めた。

4　惹かれる低音

二人が弾き出した瞬間、真琴は何の曲を演奏しているのか解った。
（第九だ……）
そう、今二人が弾いているのは、ベートーヴェン作曲『交響曲第九番　四楽章』の有名な部分である。
智貴が堂々とメロディーを弾く。治美は、目立ちすぎず、堅実な伴奏をする。オーケストラのような輝かしさは無い。しかし、この演奏には、オーケストラとはまた違った魅力があった。どこか牧歌的な感じのするコントラバス二重奏を聞いて、真琴は思う。
（……この音、好きかもしれない）
深く、落ち着いた低音だ。それでいて、どこか暖かい音色。今まで聴いてきた打楽器、管楽器とは、また別の響きがする。
しばらくして、演奏が終わった。その時、智貴と治美が満足そうな表情をするのを、真琴は見逃さなかった。
「どうだった？　コントラバスの音は」
智貴が真琴に尋ねる。
「……素晴らしかったです。弦の音が、本当に綺麗で。とにかく、すごかったです！」
「……ありがとう」
智貴は照れくさそうに言った。少しだけ頬を赤らめている。どうやら嬉しいようだ。
「ねぇねぇ」
二人の会話を聞いていた治美が、突然真琴に話しかけてきた。
「真琴ちゃんも、コントラバス弾いてみない？　まだ、少し時間があるし」
「ええ！？」
治美が急に提案したので、真琴は戸惑う。
「おっ、それはいいな」

智貴もその提案に賛同した。真琴は困惑する。
「そんな、わたしには無理ですよ」
「大丈夫だよ！　それに、『百聞は一見にしかず』。どうせなら弾いていこうよ～」
「そのことわざ、意味的には合ってるけど、なんとなく違う気が……。でも、確かにそうだな。聴くだけと実際に弾いてみるのとでは、全く違うし」
治美と智貴は、かなり乗り気のようだ。
（どうしようかな……）
真琴はしばらく考える。すると、暖かく落ち着いた低音と、智貴と治美の満足そうな表情が、頭の中にはっきりと浮かんできた。自然と言葉が出る。
「……わかりました。せっかくだし、弾かせてもらいます」
真琴の返事を聞いて、智貴と治美は笑顔になった。

「……よし！　持ち方はそれで大丈夫だよ。なるべく、この体型を保っててね！」
「はっ、はい」
治美に最初教えてもらった事は、コントラバスの構え方であった。
真琴は今、慣れない手つきでコントラバスを持ち、体の左側で必死に支えている。何か違和感がある。慣れるまで時間がかかりそうだ。
「じゃあ、次は弓の持ち方だな」と、智貴が提案する。
弓という言葉を、真琴は不思議に思った。弓といったら、弓道で使うものというイメージしか思い浮かばない。
「ヴァイオリン属は、少し曲がっている木の棒みたいなのを持って弾いているんだけど、それを弓と呼んでいるんだ」
智貴はそう説明した後、弓というものを持ってきた。白い毛がたくさん張られている。
「この白い毛は何だろう……とか思わなかったか？」

図星だった。
「これは、『馬の尻尾』の毛なんだ」
「うそ……馬！？」
真琴は目を丸くした。馬の尻尾で弦を弾いているとは、考えもしなかったからだ。
「まあ、最初は驚くだろうね～。じゃあ、弓の持ち方教えるよ」
治美は、まるで鉛筆を持つかのように、弓を下から支えた。
「あれ？」
治美の弓の持ち方を見て、真琴は疑問に思う。それに反応し、智貴が尋ねた。
「どうした？」
「テレビで見た事があるんですけど……ヴァイオリンって、手の甲を前にして弓を持っているんじゃ……？」
真琴は（左手にはコントラバスを持っているため）、右手だけでヴァイオリンを弾く真似をした。
「よく知っているじゃないか。確かにヴァイオリンはそういう持ち方だ。同じ持ち方をしているコントラバス奏者もいるけどな」
「でも日本では、手の甲を裏返して、弓を下から支えるようにして持つコントラバス奏者が多いんだよ！」
智貴と治美が交互に答える。真琴はその説明に納得した。
「はい、よく解りました！」
「なら、良かった」
智貴は安堵の表情を浮かべている。
「じゃあ、実際に持ってみよう！」
治美が本題に戻し、レッスンが再開された。

弓の持ち方を教わってから数分後。治美が提案した。
「うん、こんなもんかな～。そろそろ弾いてみようか」
「はっ、はい……」
ついに、コントラバスを弾く。意識した途端、真琴は緊張してき

た。
「弦と弓が垂直になるように弾くんだ」
智貴が弾いて見本を見せた。綺麗なレの音。真琴はそれを見た後、何度か治美に指摘されながら、おずおずと弦を弾いてみた。弓を先の方まで滑らせる。
――不安定な音だ。音が大きくなったり小さくなったり。だが、確かに弦は震えている。真琴はその事に感動を覚えた。
しばらく練習していたら、弾き方にもだんだん慣れてきた。今度は、思い切って今までよりも強く弾いてみる。
その瞬間、弦の振動が真琴の腹の中まで伝わった。さらに、倉庫の中に置いてあった小太鼓（多分スネアドラムという名前だろう）が一緒に振動し始めた。
（うわぁ……すごい！）
真琴は鳥肌が立つのを感じた。
レの音が、倉庫の中を隅々まで満たしていく。何故かはわからないが、何となく居心地の良さを感じた。
弓を弦から離した後、音は何秒間か響いて、少しずつ、静かに消えていった。三人は黙って音を聴く。しばらくして、真琴が誰にも聞こえないような音量で、そっとつぶやいた。
「うん……！」

十分後。一年生は見学終了の時間が迫っていたため、真琴は帰る事にした。倉庫から出る。辺りを見渡すと、暗くなり始めた空とうっすらと出ている月が目に映った。
「……今日は、ありがとうございました！」
「いや、こちらこそ……色々ありがとう」
倉庫の前で真琴と智貴が、お互いに感謝の言葉を口にする。何故智貴が「ありがとう」と言ったのか、真琴にはよく解らなかったのだが。
「真琴ちゃーん！」

治美は合奏の準備を終えたらしく、倉庫に向かって軽く走りながら真琴を呼んだ。そして、倉庫に着いて呼吸を整えた後、真琴の目を見た。
「もし良かったら、また来て欲しいな……。真琴ちゃんならいつでも大歓迎だよ」
「……オレも」
智貴もつぶやいた。二人とも、ただの勧誘のつもりで言っているようには聞こえなかった。
「そうですね……」
真琴は既に、意志を固めている。
「明日からも、ここに来ます」
真琴の言葉を聞いて、智貴と治美は「えっ？」と同時に言いながら互いに顔を見合わせた。
「あの楽器を、一回弾いただけで終わりにしたくないんです」
初めて弾いた時から、いや、初めて音を聴いた時から、コントラバスに何かを感じていた。それは、他の楽器には感じなかったものだった。
「……本当に！？」
治美は一気に喜びの表情へ変わっていった。智貴は何も言わないが、目元の表情から、治美と同じように嬉しいのだとわかる。
「はい、行きます。だから、これからもよろしくお願いします、先輩」
真琴は空を見上げた。つられて、智貴と治美も顔を上げる。
三人の目に映った三日月は優しい光を出し、辺りを照らしていた。

5　部長と楽器と初心者と

仮入部から一週間が立った月曜日の放課後。真琴は二階建ての、全体的に白い外観をした建物の前に立っていた。

「ここが、虹館（にじかん）……」

思わずつぶやく。虹館には初めて来たが、そこは真琴が思っていたよりも立派な建物だった。

虹館は多目的ホールだ。吹奏楽部の活動の他に、学年集会や会議にも使われる建物である。だから、ある程度綺麗なのかもしれない。

真琴はそんな風に考えながら、おずおずと虹館の中に入っていった。

今日は部集会の日だ。新入生はそれぞれ、自分の入りたい部の集合場所へ行き、顧問や先輩達と顔合わせをする。そして、新入生は正式に入部を許されるのだ。

吹奏楽部の集合場所は、虹館である。だから、真琴は虹館へとやって来た。

「うわっ……」

中に入って、真っ先に真琴の目に入ったのは、溢れそうなほど沢山の人であった。

真琴は、人混みの中にいると疲労してしまう。しかし、今は「疲れる」などと言っている場合ではなかった。

（いちいち疲れるなんて言ってたら、吹奏楽部には入れないもんね）

真琴は、人数が多い部だと知っててなお、吹奏楽部を志望した。何故そんなに吹奏楽部に入りたいのだろうかとも思ったが、帰宅部や、他の少人数の部に入る事は考えられなかった。

「一年生は、ここに並んでください！」

女の人の声。真琴は急いで茶色のローファーを脱ぎ、青色のスリッパに履き替える。そして、そのまま「多目的ホール」のプレートが貼ってある部屋に直行した。

中に入った後は、「1ー3」と書いてある紙を持った人の所へ並び、座った。周りを見渡す。自分以外の一年生は落ち着いて座っていた。

（皆、吹奏楽経験者なのかな……）

真琴には、誰もが吹奏楽経験者に見えた。

真琴が座ってから十分後、部集会が始まった。先程まで一年生の指導をしていた長髪の女の人が、澄んだ声で話し始める。

「一年生のみなさん、こんにちは！　私は副部長の河合（かわい）　美雪（みゆき）です。楽器は、フルートを吹いています。今日は、私が司会者を務めます。よろしくお願いしますね」

大きな拍手が起きる。真琴は拍手をしながら、美雪をじーっと見ていた。長い髪の毛だ。入学式に出会った女の人に、少し似ているような気がする。

「最初は、部長の話です。では、よろしくお願いします」

しかし、数秒待っても部長が現れない。美雪は「あれっ？」と言いながら部長を目で探す。二・三年生も「さっきまではいたのに……」などとつぶやいて周りを見渡した。一年生も、一体何が起きたのかと騒ぎ始める。

騒ぎから一分後。真琴の右側からドアを開く大きな音がした。

「すっかり遅れちゃった……ごめん！」

謝りながら美雪の所に歩いてきた男の人は、真琴の知っている人だった。

「えっ、うそ……」

真琴のつぶやきは、周りの一年生の「やけにデカいね、あの人」という話し声にかき消される。

男の人は部員達の前に歩み寄って「静かに！」と声を上げた。一瞬で話し声が聞こえなくなる。男の人は部員達を見回した後、口を開いた。

「明仁（あきひと）先生の呼び出しがあって、話し合いが予想以上に長くなっち

ゃって……本当にすみませんでした！　僕は、石田（いしだ）　和樹（かずき）といいます。打楽器担当で、これでも部長です。よろしくお願いします」
真琴は開いた口がふさがらなかった。仮入部の時、真琴を色々な楽器の所へ案内してくれた人が、まさか部長だったとは思いもしなかったからだ。

一時間後、「では、これで部集会を終わります」と、美雪の声が響きわたった。
最初はちょっとした騒ぎもあったが、部集会は無事に終了した。部長である和樹が続けて指示を出す。
「二・三年生は練習に行ってください。あと、一年生はそのまま残ってください！」
真琴は、（なんで残るんだろう？）と疑問に思った。その間にも、二・三年生達は次々に外へと出て行く。治美と智貴の姿が見えた気がした。
「……よし。上級生は出て行ったな。じゃあ、始めようか」
真琴は（何を始めるんだろう？）と思いながら和樹を見つめた。
「これから、楽器決めにおけるアンケートを行います。美雪、用紙を」
美雪は和樹から用紙を半分受け取り、一組の方から順番に配り始めた。和樹は七組の方から配り始める。
真琴は前にいる女の子から用紙を受け取り、その紙を素早く見た。用紙には「希望楽器アンケート」と、大きな字で書かれている。
「皆さんには、氏名と中学校名と今までに経験した事のある楽器、あと第一志望から第三志望までの楽器を書いてもらいます」
美雪がそう話した途端に、一年生の緊張感が一気に増した。
「時間は十分程取ります。では、始め！」
和樹が言い終わった後、一年生はカバンから筆箱を取り出しておもむろに書き始めた。
真琴はまず名前と中学校名を書いた。そして、「経験した事のあ

る楽器」の欄に、気後れしながらも「なし」と入れた。
（他の人は何かしら経験しているんだろうな……。高校から始める人って、わたしの他にいるのかな）
真琴が思いめぐらしていた時、少女の声が真琴の耳に入ってきた。
「ねぇねぇ」
頭を上げる。真琴に紙を回していた少女が、柔和な表情をしながら話しかけてきた。
「楽器、どれにするの～？　わたし、何も経験してないから、どうしようか迷ってるんだよね」
柔らかい物言い。この女の子の声は、どこか人を安心させる所がある。案の定、真琴の緊張も薄らいでいった。
そして、女の子の持っている紙をちらっと見てみる。「経験した事のある楽器」の欄には、真琴と同じく「なし」と書いてあった。
真琴は他の一年生は皆経験者だと思い、気後れしていた。だが、確かに自分と同じような人がいる。その事を知って、少しだけ安堵した。
「……わたしは、コントラバスを弾きたいんだ」
真琴は静かに微笑んだ。

アンケート用紙を回収した後は、各自好きな楽器を見学するということになった。真琴はもちろん、コントラバスの所へ行くつもりだ。
靴を履き替え、玄関から外に出ると、オレンジの光が真琴を照らした。
虹館の角を左に曲がり、そのままっすぐ歩くと倉庫に着く。真琴は早く行こうと思い、左をくるっと向いた。
「あ……」
左を向いたその先に、仮入部の日にお世話になった背の高い男の人、石田和樹がいた。和樹と目が合う。
「よっ」

和樹は優しい笑顔を真琴に向けて話しかけてきた。真琴は緊張しながらも、和樹の元まで駆け寄る。
「あっ、あの……この間は、ありがとうございました！」
顔を赤らめながらお礼を言う。仮入部のときは、満足に「ありがとう」と言えなかったからだ。
「どういたしまして」
和樹は優しい笑顔のまま応えた。そのまましばらく沈黙する。
「……君は、どの楽器を第一志望にしたの？」
ふいに和樹が聞いてきた。
「コントラバスです」
「そっか！　原っち、喜ぶだろうなぁ」
和樹は声を弾ませる。
「……でも」
「でも？」
「わたし、初心者だし、先輩達に迷惑じゃないかな……って」
真琴は、その事が気がかりだった。虹西高校の吹奏楽部は、吹奏楽経験者がほとんどだと、香奈から聞いていた。初心者が入ったとしても、演奏についていけないのではないかと、とにかく不安に思っていた。
和樹はきょとんとした表情をする。それから、真剣な表情になって真琴に語りかけた。
「迷惑なんかじゃないよ。むしろ、入ってきてくれてすごく嬉しい」
「……本当ですか？」
「本当だよ」
和樹は応えた後、笑顔になる。
「僕も、高校から吹奏楽を始めたんだ」
真琴は目をぱちくりとさせた。自分と同じ人がここにいるとは。
「そんな僕が、今は部長を任されている」
真琴は、初心者が部長をする事もあるのかと、とにかく驚いていた。

「経験者だろうと初心者だろうと、関係ないんだよ。これから頑張って、経験者に追いつけばいいんだから」
目からウロコが落ちた気分だ。そんな考えは思い付きもしなかった。今まで真琴の中にあった灰色の思い塊が、すっと消えたような気がした。
「……そうですね。わたし、頑張ります！　先輩、ありがとうございました！」
真琴に笑顔が戻った。和樹はにっと笑いながら、「どういたしまして」と返す。
「わたし、倉庫に行きます。では、さようなら！」
真琴は深々と礼をした。それから、くるりと左に曲がり、倉庫に向かって勢いよく走り出す。
和樹は、真琴を微笑みながら見送った。

6　出会い

夕方、虹館の多目的ホールにて。一年生が、横に二列で並んでいる。一列目には十六人、二列目には十五人。計三十一名。真琴は、二列目のちょうど真ん中に立っている。

一年生の後ろには二・三年生計七十人が並んでいた。一年生の前には和樹、美雪が立っている。約百名の部員が、固い表情をしていた。何故なら、これから一年生の担当楽器の発表があるからだ。

「では、これから担当楽器の発表を始めます。一組から順番に読みますね」

美雪の発言を聞いて、一年生の顔がさらに引き締まった。

本入部の次の日から三日間、一年生は全ての楽器を回り、実際に吹く体験をしていた。

真琴は、仮入部の時はただ楽器を見ているだけ（コントラバスは例外）だったので、全ての吹奏楽器や打楽器の体験が出来るという事は、単純に嬉しかった。しかし、部活が終わって帰宅する時、いつも考える事は「コントラバスをもっと弾きたいな……」だった。

月曜の本入部の日から五日目、やっと自分の担当楽器が決まる。自分の番が近づくにつれ、真琴の緊張はどんどん高まっていった。

「水野（みずの）　由紀（ゆき）……フルート」

二組の人は全員呼び終わった。次は真琴の所属する三組だ。

「高橋（たかはし）　恵（めぐみ）……クラリネット」

真琴の二つ隣にいる、希望楽器のアンケートをした時に話しかけてきた女の子が呼ばれた。恵の方をちらっと見ると、恵は嬉しそうな顔をしていた。きっと、クラリネットを第一志望にしていたのだろう。

真琴の隣の子も呼ばれた。次はいよいよ真琴の担当楽器が決まる番だ。

「相原　真琴……」

美雪に名前を呼ばれて、真琴の緊張が最高潮になった。心臓の音が大きく鳴っている。体中の熱が確実に上がっていた。頭の中が白くなる。

全員の担当楽器が決まった後、真琴はしばらく呆然としていた。

「真琴ちゃん！」

聞いた事のある声。後ろを振り返ると、治美が笑顔で立っていた。

「今日から正式に『コントラバス』担当だね～、よろしく！」

治美の言葉を聞いて、真琴はようやく、自分の担当楽器を認識した。

（わたし、コントラバス担当なんだ……）

真琴は第一志望の楽器担当になったのだ。一度下がりかけた体の熱が、再び上がっていく。そして、何ともいえない喜びが、心の底からじわじわと湧いてきた。

「先輩、これからよろしくお願いします！」

弾んだ声。真琴のテンションは、最高潮に達していた。しかし。

「うん、よろしく～。じゃあ、早速パート紹介に行こう！　『バスパート』は隅の方だよ」

（……え。バスパート……？　ああ、きっとコントラバスパートの略だよね）

真琴はそう解釈した。

「先輩。コントラバスパートの紹介は仮入部の時にしたから、もういいじゃないですか～」

「え？　……ああ～、まだ言っていなかったね、ゴメン！」

「……何ですか？」

真琴の心臓の音が、だんだん大きくなっていく。何か、嫌な予感がした。

「コントラバスは、チューバ、ユーフォニウム、ファゴットと一緒のパートなんだよね～。ほら、チューバはともかく、コンバスとかユーフォやファゴットは、最高でも三人しか奏者がいないんだよ。

三年生が引退したら二人になっちゃうし。だから、四つの楽器を集めて一つのパートにしちゃってんの！　それがバスパート……って、真琴ちゃん？」
　真琴は暗い表情をしていた。また、自己紹介やら顔合わせやらしなきゃいけないのかと、とにかくテンションが下がっていた。出来るだけ嫌いな事は避けたいというのに。

　五分後、十数人が多目的ホールの隅に集まり、輪になって座った。男子がやけに多い。
「あの……先輩」
　真琴は、左隣に座っている治美に話しかけた。
「何〜？」
「なんか、他のパートよりも男子が多いような気がするんですけど……」
「それは……低音楽器は重いからか、力のある男子が担当する事が多いんだよね〜。特に、虹西吹部のチューバ担当は、何故か必ず男子なの！」
　治美の説明を聞いて呆然とする。真琴は今まで、男子とはあまり話していなかった。無理に仲良くする必要も無いと考えていたのだ。そのツケが今になって来るとは、全く思っていなかった。
「これで全員かな……。では、これからバスパートメンバーで自己紹介をしてもらいます」
　眼鏡をかけた男の人が口を開いた。多分パートリーダーであろう。
「では、まず一年生から自己紹介してもらいます……、じゃあ、そこの女の子から」
「えっ……わたし？」
　いきなり話を振られて、真琴は困惑する。自分が真っ先に自己紹介をするなんて、考えもしなかった。
「うん。名前と担当楽器を言ってほしい」
　みんなの視線が真琴に集中する。心臓が大きく鳴りだした。緊張

したのはこれで二度目だ。
「えーと、あの……わたしは、相原……真琴、です。コントラバス担当……です。これから、よろしく、お願い、します」
緊張のあまり、文章を切ってばっかの自己紹介になってしまった。だが、みんな特に気にする様子も無く大きく拍手をするので、真琴は拍子抜けした。心臓の音がどんどん小さくなっていく。
「じゃあ、これから左回りに自己紹介してもらって……」
「それなら、次はあたしですね！」
パートリーダーの話を遮ったのは、いかにも元気そうな女の子だった。
「あたしは、浜田（はまだ）　望実（のぞみ）です！　ユーフォニウム担当になりました～。よろしくお願いします！」
真琴は望実をじっと見た。肩にかかるライトブラウンの髪は、外側にハネている。さらに、大きなつり目。その外見は、明るく気の強そうな印象を真琴に与えた。
（きっと、わたしとは気が合わないな……）
気の強いリーダータイプの女の子は、小学生時代から苦手なのだ。仲良くなれる気がしない。
「次は、そこの男の子」
パートリーダーに促された男の子は、切れ長の目で周りを見渡すと、低い声を出して自己紹介を始めた。
「俺は、永瀬（ながせ）　信二（しんじ）です。七海市から引っ越してきました。……一応、チューバ担当です。よろしくお願いします」
真琴は信二を見て、絶対この人とは仲良くなれない……と思っていた。気難しそうな雰囲気が、信二の周りから溢れ出ているのだ。ただでさえ男子と話すのは気が引けるのに、あんな雰囲気を出されると、怖い。
「次は僕だね～」
信二の隣にいた体格の良い男の子が、笑顔で話し始めた。
「僕は愛媛県出身の鈴木（すずき）　悠輔（ゆうすけ）です。これでも、中学校からずっと

チューバを吹いてます。よろしくお願いします！」
「愛媛から！？」と先輩から驚きの声が上がる中、真琴は悠輔を観察する。柔らかいテノール声に丸っこい目。望実と信二よりは話しやすそうだと感じたが……。
（この人が、女子だったら良かったのにな）
女の子だったら、きっと仲良くなれただろう。しかし、悠輔は男の子である。今まで男子生徒と仲良くしようとしなかった真琴にとっては、悠輔に話しかける事さえ難しかった。
「じゃあ最後の男の子、よろしく」
パートリーダーは、茶色のくせっ毛をした小柄な男の子を見る。男の子は黒縁眼鏡を掛け直すと、小さく口を開いた。
「……オレは、藤本（ふじもと）律（りつ）、です。ファゴット……です。……よろしくお願い、します」
真琴は、よくわからない人だな……と思いながら律を見た。ミステリアスで近寄り難い雰囲気を醸し出している。信二とは別の意味で話しかけづらい。
「これで、一年生は全員自己紹介したな……。次は二年生。田中からよろしく……」
治美から順に、先輩たちの自己紹介が始まった。しかし、真琴はこの四人と上手くやっていけるかという不安で頭がいっぱいになり、先輩の自己紹介が頭の中に入ってこなかったのであった。

7　「無理」ではない

パート紹介の後、真琴と治美は倉庫へ向かった。今日はこれから集合時間まで、パート練習をする（ただし、バスパートはそれぞれ楽器が違うため、楽器ごとに練習）という予定なのだ。

しかし、さっきから真琴はぼーっとしていた。パート紹介が終わってからずっとだ。見るに見かねたのか、治美が倉庫の前で、真琴に話しかけてきた。

「真琴ちゃん」

「……はい、何でしょう？」

表情だけでなく、声まで暗い。自分自身がそう思うのだから、治美も心の中で「暗い」と思っていることだろう。

「どうしたの～？　さっきから暗い顔しちゃって！」

ハッキリと言われた。

「うーんと……」

真琴はそれだけ言って、黙ってしまった。そして、視線を治美から空へと移す。

空全体が、灰色の雲に覆われていた。

「ふぅ……」

真琴はため息をつく。パート紹介の事で頭がいっぱいなのだ。

「……まあまあ。とにかく中に入ろうよ。話、聞くから」

治美は一生懸命真琴を取り繕う。

「……はい、わかりました」

いったん会話を切って、二人は扉を開けて倉庫の中に入った。

「……で、どうしたの？そんなにぼーっとして」

折りたたみ式のイスの上にスクールカバンを置きながら、治美は改めて聞き直す。

「……、同級生四人が、ちょっと……」

真琴は、言いづらそうにぼそぼそと応えた。
「四人って、望実ちゃん、永瀬君、鈴木君、藤本君のことだよね？」
「はい、そうです……」
「何か気になる事でもあるの？」
真琴は口を堅く閉めていた。治美も辛抱強く待つ。しばらくしてから、真琴は小さな声で話し始めた。
「……わたし、あの四人とは仲良くなれそうもありません」
真琴の言葉に、治美は首を傾げた。
「何で？」
「そもそもわたし、男子とはあまり話した事無いんです」
「じゃあ、望実ちゃんは？」
「ああいう、気の強そうな子は苦手です」
治美は数秒間黙り、おもむろに口を開いた。
「……最初から、『仲良くなれない』と決めつけちゃ駄目だよ」
「え……？」
今度は真琴が首を傾げる。
「性格が正反対の人の方が、意外と仲良くなるもんだよ！」
「そ、そんなもんですか？」
「そんなもんだよ」
ここで口を挟んだのは、智貴だった。真琴と治美は思わず硬直する。こんなタイミングで倉庫に来るとは思わなかった。
「先輩、いつ帰ってきたんですか！？　扉を開ける音しなかったのに……」
治美が智貴に尋ねる。
「ついさっき。扉は元々開いてた。外から丸見え状態で何の話をしてるかと思ったら……同級生の事か」
智貴が喋っている間、真琴と治美は顔を赤らめていた。扉を閉めていないまま話をして、しかも話の内容を智貴に聞かれていたのだから。
「……とりあえず、楽譜持ってきたぞ」

智貴は二人の雰囲気を察したのか、話題を変えてきた。治美は楽譜に飛びつく。
「これは、『オレンジ』と『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』ですね！真琴ちゃんのかな？」
「正解。……はい、これ」
智貴は真琴に二枚の楽譜を渡す。真琴は「ありがとうございます」と言い、楽譜に目を通し始めた。
一枚目は『オレンジ』。これは『ＳＭＡＰ』が歌った曲。だが、真琴はこの曲を知らないため、楽譜を見てもチンプンカンプンだ。
もう一枚の楽譜は『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』。『Ｋｉｒｏｒｏ』が歌った曲である。この曲は真琴も知っているが、見る限り楽譜には２分音符や４分音符が並んでばっかで、別の曲に見える。
「なんか、いまいち解りにくいですね……」
真琴はため息をついた。今日で二回目だ。
「最初はそうかもな。伴奏ばっかだし」
「大丈夫。じきに慣れるよ！」
智貴と治美は苦笑いをしながら言う。
「でも……わたし、やっぱり無理です」
真琴の言葉に、治美は「何が？」と返す。
「だって、まだ基礎も出来ていないのに解らない曲を弾くなんて……」
「無理とか言わない」
智貴がもう一度口を挟んだ。
「確かに、曲を完璧に弾くということは、難しいかもしれない。でも……」
智貴は一回口を閉じる。そして息を深く吸い、今までより力強い声を出した。
「まだ弾いても無いうちから『無理』って言うのは、自分の持っている力を最初から捨てている……ということになる！」
真琴は智貴の言葉に圧倒された。一見クールな智貴がこんなに熱

く語るとは、少しも思っていなかったのだ。
そして真琴は、おもむろに「自分の持っている力……」とつぶやく。自分の力なんて、考えた事も無かった。
「そうだよ、真琴ちゃん」
今度は、治美が真琴に語りかける。
「最初から『無理』って言っていたら、出来るものも出来なくなっちゃうよ？　それに、最初から弾ける人はいない。これから弾けるようにすればいいんだから！　真琴ちゃんが弾けるようになるまで、あたしと先輩がいっぱい教えるから、心配しない！　ね、先輩？」
「うん、俺も、解りやすく教えられるように、頑張るから……」
智貴は真剣な顔をしながら、真琴に言った。
治美と智貴の言葉を聞いた瞬間、真琴の心がじんと暖まった。さらに、目頭が熱くなる。この人たちの言葉は信じていい……と思った。
「……、ありがとう……ございます！」
真琴は芯の通った声で返事をした。

一通り会話が終わった。智貴は弓に茶色の松ヤニ（いわゆる『樹脂』）を付けている。治美はコントラバスをソフトケースから出していた。真琴はコントラバスの出し方を覚えようとしている。　治美を見ているうちに思い出した。数十分前に相談していた、「同級生四人」の事である。
「……そういえば！」
真琴が不意に声を上げたので、智貴と治美は目を丸くした。
「最初から『無理』だと言わない事……それって、コントラバスの練習以外にも言えますよね？」
智貴と治美はキョトンとしつつも、「もちろん」と返した。
「じゃあそれは……人付き合いにも言える」
真琴はそうつぶやいてすぐに目を閉じ、考えにふけった。
（わたしは、人付き合いに対しては『無理』だと言ってばっかだっ

た）

特に、男の子全般と気の強い女の子に関しては、「絶対に仲良くなれない」と決めつけていた。

（でも、それってただ逃げていただけだったのかも）

傷付くのを恐れて、自分から人を遠ざけていた部分があった。そのおかげで、小学、中学ともに友達は少なかった。

（仲良くなるのは無理だと決めつけるのは、もう止めよう）

現に、中学時代はあまり縁の無かった「先輩」とも、いつの間にか打ち解けている。仲良くなるのは絶対に無理ということは、無いのだ。

自分から、挨拶だけでもしてみようか。少しの勇気が、何かを変えるかもしれないのだから。真琴の考えが変わる瞬間だった。

（……よし！）

真琴はパッと目を見開いた。智貴と治美は再び目を丸くする。

「先輩、ちょっと外に出てきます！」

二人の返事を聞かないうちに扉を開け、外に出た。

息を大きく吸い、吐き出す。そして、空を見上げる。

曇り空の隙間に、青を見つけた。

登場人物紹介１（第４章現在）（前書き）

この文章には、第４章までのネタばれと第５章に関係する事柄が含まれています。読む際には十分お気を付けください。

登場人物紹介１（第４章現在）

～メイン～

相原（あいはら）　真琴（まこと）

主人公。内気だが、真面目で頑張り屋な少女。気の強い女子と取っ付きにくい人全般が苦手だが、バスパートの一年生四人は例外。肩にかかる長さのストレートヘアーは現在伸ばし中。髪の色はダークブラウン。

ある女の先輩に話しかけられた事をキッカケに、吹奏楽部に入部する。その先輩にお礼を言いたいと思っているが、ほとんど手がかりがないので（独自）捜査は難航中。

担当楽器……コントラバス　身長……１５５．８ｃｍ　一人称……わたし

浜田（はまだ）　望実（のぞみ）

大きなつり目が特徴的な、明るい少女。後ろ髪が外にハネている。髪の色はライトブラウン。気が強い所ばかりが目立つが、弱気になる面も。

高校では別の楽器を吹きたいと考えて、アルトサックスから転向する。

担当楽器……ユーフォニウム　身長……１６２ｃｍ　一人称……あたし

鈴木（すずき）　悠輔（ゆうすけ）

いつも笑顔。明るくて親しみやすい。肩幅が広くて威圧感のある体型とは逆に、優しげなテノール声を出す。
中学時代からチューバを吹いていて、中三になって急に上達した。それは愛媛にいる年下の師匠と島根にいる友人が関係している。

担当楽器……チューバ　身長……１７８．１ｃｍ　一人称……僕

永瀬（ながせ）　信二（しんじ）

切れ長の目と低めのバス声が気難しい印象を与える。頑固ではあるが、自分の言った事は絶対に曲げない。意思が強い。
中学時代はトロンボーンを吹いていたが、人数の関係でチューバに回された。最初は嫌がっていたが、神奈川県七海市にいる先輩に励まされてからは、前向きにチューバに取り組んでいる。

担当楽器……チューバ　身長……１７３．３ｃｍ　一人称……俺

藤本（ふじもと）　律（りつ）

黒縁眼鏡を掛けている。くせ毛で、髪の色は茶色。無口でミステリアスな雰囲気を漂わせているので、彼が何を考えているか分かる人は少ない。
中学ではトランペットを吹いていたが、後輩が吹いていたファゴットの独特な形、音色に興味を持つ。高校では自らファゴットを希望した。

担当楽器……ファゴット　身長……１６４．７ｃｍ　一人称……オレ

〜先輩〜

原田（はらだ）　智貴（ともき）

第一印象は「クール」な、真琴の先輩。三年生。意外と感情表現豊か。定期演奏会では目を赤くしていた。コントラバスは高校から始めている。

過去に休部をした事があるらしい。その理由は……

担当楽器……コントラバス　身長……１７２．５ｃｍ　一人称……オレ

田中（たなか）　治美（はるみ）

茶色のショートヘアーが活発な印象を与える、真琴の先輩。二年生で、新部長の理沙子とは仲が良い。親しみやすいので、真琴ともすぐに打ち解けた。

コントラバスは中学生の頃から続けている。そのため、音がしっかりしている。

担当楽器……コントラバス　身長……１６６ｃｍ　一人称……あたし

石田（いしだ）　和樹（かずき）

仮入部の時、困っている真琴に手を差し伸べてくれた、打楽器担当の親切な先輩。みんなから信頼されていた元部長。楽器は高校から始めていた。
智貴と仲が良い。また、美雪との関係について部員から噂されている。

担当楽器……パーカッション　身長……１８３．２ｃｍ　一人称……僕

河合（かわい）　美雪（みゆき）

しっかり者の副部長。和樹を優しく支える。綺麗な長髪は、真琴に「入学式で出会った先輩」を思い出させた。
虹西高校吹奏楽部の引退が早い理由を三年前に知っている。

担当楽器……フルート　身長……１６３．８ｃｍ　一人称……私

？？？

入学式の時に出会った先輩。彼女の話は、真琴が吹奏楽部に入るきっかけになった。長髪に気を取られたりうつむいていたりして顔はぼんやりとしか見ていなかったため、真琴は彼女が誰であるのか分からない。

0　夕食

「じゃあ、これからもっと忙しくなるっていうの？」
母の裕美（ひろみ）が、真琴に問いただした。土曜日の夜、リビングで夕食を食べている時のことである。
「う、うん……。だから、明日ももちろん部活だし、これからも……」
真琴は、裕美にたじっとしながら応える。同時に（もっと早く言えばよかった……）と、今更ながら後悔していた。
明日は日曜日である。休みの日だから、裕美はゆっくり寝られるはずだった。なのに、土曜日の夜、娘がいきなり「明日以降は、日曜日も一日中部活だから」などと言うのだから、困惑するのは当然だろう。明日から、日曜日も平常通りの時間に、朝食を作らなければならなくなったのだから。
本入部の日に、土日も練習がある事を和樹が伝えていた。真琴はその日のうちに、裕美に話すべきだった。だが、なかなか言い出せず……今日の夜にやっと話したという訳だ。
「吹奏楽部は体育会系文化部だし、定期演奏会が近いんじゃあ、仕方がないじゃないか」
父の真一郎（しんいちろう）が、裕美をたしなめる。裕美は「そうね」とつぶやいた。
「あ……お父さんとお母さんは、寝てていいよ？　わたし、自分で適当なの作って食べるから」
「お昼ご飯はどうするのよ」
「……コンビニで、パン買うとか……？」
真琴の声が段々小さくなっていく。裕美は萎縮している真琴を見て、苦笑いをしながらため息をついた。
「いいわ。私が朝ご飯と弁当を作るから」
「えっ、でも……」

「真琴、何も作れないでしょう？」
「う……」
確かにその通りだ。真琴は、自分一人だけで何かを作った事が無い。
「その代わり、ちゃんと時間通りに部屋から降りてきて。あと、あなたも明日から早起きしてね」
「お、俺もか？」
真一郎がたじろいだ。裕美は、さも当然と言うような目で真一郎を見る。
「朝ご飯を二度も作るのは、時間の無駄！」
裕美がビシッと言ったので、真一郎は「解った、解った」と慌てて応えた。そんな二人の会話を聞いて、真琴の胸がキリリと痛みだす。

――また、お父さん達　に迷惑をかけた――

「お父さん、お母さん……ごめんね」
真琴は小さな声でぼそりとつぶやいた。二人は会話を止め、真琴を見つめる。
真一郎は、明らかに戸惑っているようだった。一方で、裕美は再びため息をついた。そして真琴に言う。
「……こういう時は、『ありがとう』と言うのよ」
裕美は視線を夕食の方に戻す。残っていたサラダを一気に食べ、「ごちそうさま」と手を合わせた。
食器を片付けた後、真一郎と真琴に「リンゴ、食べる？」と聞く。真一郎が「もらおうかな」と応えるのを聞いて、裕美は素早くリンゴの皮をむき始めた。
「はい、どうぞ」
裕美はリンゴをテーブルの真ん中に置き、真琴に「早く食べなさいよ～」と促した。真琴は、まだご飯と味噌汁を食べ終えていなか

ったのだ。真琴は慌てて、なんとか食べきろうとする。
「あ！　お供えするの忘れてたわ……」
裕美がそう声を上げた途端、真琴は箸をぴたっと止めた。そんな真琴の様子に気付かずに、裕美はテーブルのリンゴをいくつか取って、小皿に移す。
小皿を持っていき、棚の上にある小さな仏壇に置いた。正座をし、手を合わせる。仏壇を見つめる裕美は、優しげな瞳をしていた。
真琴はそんな裕美の背中をじーっと見つめる。そして、そっと箸を置き、不意に席を立った。そのままドアの方へ向かう。
「お～い、リンゴはいらないのか？」
真一郎が呼びかけるが、真琴はその声を無視する。裕美が気づかないうちに、静かにリビングを出て行った。

冷えたご飯と味噌汁が、半分以上残っていた。

1　あの子とは……（前書き）

この章から、真琴以外のバスパート四人の視点も入ってきます。
2章1話は、望実視点です。望実から見た「あの子」は……？
望実だけでなく、信二、悠輔、律の三人にもご注目！　もちろん、主人公真琴にも……

では、次ページからどうぞ！

1　あの子とは……

日曜日。今日は一日練習の日なので、朝から部員は多目的ホールに集まっていた。多目的ホールは、部活始めの集合場所として定着しているのだ。

浜田望実も、朝早くから虹館に来ていた。望実の家は虹西高校から近いので、早めに登校するのは、比較的容易である。　いつも通り、虹館玄関で青色スリッパに履き替え、まっすぐ多目的ホールへと向かう。とその時、後ろから誰かが声をかけてきた。

「浜田さん、おはよ～」

柔らかく、優しい声。その声を聞くだけで、誰が挨拶をしてきたのか分かった。

「鈴木君、おはよ！」

後ろを振り向きながら挨拶を返す。目の前には、体格の良い鈴木悠輔が、にこにこしながら立っていた。

「今日さ、一年生はきっと、個人練ばっかじゃん？　一日中ずっと一人で練習っていうのもつまらないから、後でユーフォとチューバで基礎連やろうよ」

ユーフォとは、チューバより一回り小さい楽器、「ユーフォニウム」の略である。望実はユーフォニウム担当だ。

「うん、いいよ！　みんなで合わせた方が、悪い所とかどんどん指摘しあえるし」

応えながら、「みんな」という言葉にどこか違和感を覚えた。

「永瀬にも伝えておくよ。じゃあ、また後でね～」

望実に手を振ると、悠輔は先に多目的ホールへと入っていった。悠輔を見送ってから、望実はため息をつく。

「『みんな』、かあ……」

つぶやきながら、多目的ホールのドアを押した。

「あっ……」

思わず声を上げる。目の前に、相原真琴がいたからだ。
真琴は、目を大きく見開いて望実を見ている。思わぬ鉢合わせに驚いているのだろうか。表情が固いので、緊張しているようにも見える。
「……おっ、おはよう！」
真琴はぎこちない挨拶をした後、望実が「おはよう」と言い終わる前に多目的ホールを出ていってしまった。
望実はしばらく、真琴の後ろ姿を見つめる。そして、再度ため息をついてつぶやいた。
「……よく解んない子」

九時五分前。ほとんどの部員が集まり、学年ごとに並んでいた。
集合時間までまだ時間があるので、部員はじっと、九時になるのを待っている。二列目の左端に立っている望実は、バスパートの一年メンバーを思い出していた。
悠輔とは、すぐに打ち解けた。彼とは話しやすい。信二はいつも不機嫌そうで取っ付きづらかったが、同じ場所（ロビー）で練習しているという事もあり、何とか話は出来ている。
問題は、律と真琴の二人だった。
律は、人を遠ざけているようなオーラを出している。まだ話した事が無い。
（そして……）
望実は、一列目の左から三番目の位置に立っている真琴を、じっと見た。
（この子、よく解らないのよね）
挨拶はしてくる。だが、動作が固い。それに、どこかオドオドしている気がする。
（もしかして、あたしを怖がっているの？）
しかし、そうだったら、真琴は何故わざわざ話しかけてくるのだろうか。望実には、真琴の真意が解らない。

（ああ、もう！）
望実は真琴をもう一度見つめる。
（結局、あの子はあたしを怖がっているのよね！　挨拶するのは、一応同じパート同士だから。ただそれだけ。だってあの子、いかにも大人しそうだし、なんか暗いし……）
さらに望実は結論づけた。あの子とは、仲良くなれなさそうだと。
そこまで考えたところで、和樹が号令をかけた。

集合が始まってから数分後。連絡も大体終わり、練習に移ろうとしていた。しかし、和樹が一年生を呼び止める。
「一年生だけ残ってください！　最後に、定演のチケットについて話します」
二、三年生が練習に赴（おもむ）く中、和樹が一年生に向けて話し始めた。
「これから一年生に、定期演奏会のチケットを五枚渡します」
美雪と、チケット係かと思われる数人の先輩達が、一人ずつ丁寧に配っていく。真琴にも、そして望実にもチケットが廻ってきた。
（これって、もしかして……）
望実の予感は見事に当たる。
「一年生には、このチケットを売ってもらいます。だから、家族や親戚、友達にどんどん声を掛けてください！」
チケットを売るノルマ。定期演奏会をする中学、高校生が必ずする行為。望実は解っていながらも、面倒くさいと思った。
チケット係の先輩の話が延々と続く。

説明が終わった後、望実は色々と考えていた。
（やっぱり……五枚以上売っておきたいわね）
チケット係が言うには、五枚売るのはあくまでも目安であり、強制では無い。十枚売ってもよし、一枚でもよいらしい。
まだまだ交友関係が狭い一年生のことだ。チケット売れたのが一枚だけ……という部員が多くても、おかしくは無い。

（例えば、あの子のように……）
望実は、真琴の方をちらっと見る。とその時、偶然真琴も望実の方を見た。思いっきり目が合ってしまった。
お互い目をそらす。そして、望実がもう一度真琴を見ると、真琴の方も望実を見た。
数秒間見つめ合い、そして不意に、真琴がおずおずと望実の方へ歩いていく。
（なっ、何……？）
望実は思わず体をビクッとさせた。もしかして、自分の考えている事がバレたのかもしれない。
真琴は望実の前に立つと、ただ一言。
「あの……誰に、チケット売るの？」
望実は目を丸くした。挨拶以外で真琴が望実に話しかけたのは、これが初めての事であったのだから。
「あ、あたしは……とりあえずお父さんとお母さんと妹たちかな。あと、中学時代の友達にも」
思わぬ展開に慌てながらも、何とか答える。
「じゃあ、もう、五枚以上売れちゃうね！　いいな～」
真琴は純粋な笑顔をしていた。言葉は相変わらずぎこちない。だが、挨拶の時とは、明らかに態度が違っていた。
真琴はさらに続ける。
「わたし、親は忙しそうだし、同じ中学出身の人も全然いないから、当てに出来る人があまりいなくって」
困ったように微笑む。望実は、何故真琴がそんな話をしたかを考える前に、今一瞬で思いついた事を提案していた。
「じゃあ、あたしが相原さんの分まで、チケット売ってくるよ！」
真琴は「えっ？」と声を上げる。
「実は最近、七海市に親戚が引っ越してきたんだよね～。今週の土曜日に訪問する予定だから、ついでにチケット売りつけるよ。これで、相原さんがゼロ枚だったとしても、大丈夫！」

そこまで一気に喋ったところで、望実はハッと気づいた。最後の一言は、さすがに余計だった。望実は恐る恐る、真琴の機嫌をうかがう。

真琴は目をぱちくりさせていた。そして、とたんに笑顔になる。

「本当に？　ありがとう！　浜田さんは優しいね」

最後の発言を気にしていないばかりか、褒められた。

「あたしが、優しい……？」

「うん、優しい」

頼もしいとか、おせっかいとは言われた事があるが、「優しい」と言われたのは初めてだ。だが、悪い気はしない。むしろ、なんか嬉しい気までする。

「じゃあ、よろしくお願いね？　……わたしも、もっと頑張ってみる」

真琴はつぶやいた後、望実に向かって笑顔で「またね」と言い、多目的ホールのドアに向かって行った。

望実は、真琴の後ろ姿を見つめる。

「思ったよりも、暗い子じゃないじゃん……」

それに、望実を怖がっているようでもなかった。ただ、仲良くなるのに一生懸命になりすぎていただけかもしれない。望実は、真琴の事を色々と決めつけていた自分を恥じ、顔を赤くした。

「……考えを、変えなきゃね」

望実は、ついさっきまで抱いていた考えを、改めた。

あの子とは、仲良くなれそうだ。

2　再会、再出発（前）（前書き）

今回は少し短いですが、次の話のためのつなぎなので、ご了承を。

2　再会、再出発（前）

虹館のロビーで、永瀬信二はチューバを、眉をひそめて見つめていた。

担当楽器が決まってから一週間経つが、信二の気持ちはいまだに晴れない。理由はもちろん、第一志望の楽器では無かったからだ。

チューバ担当は、信二の他に一人いる。悠輔だ。悠輔は、信二とは違って、チューバが第一志望だった。中学でもチューバを吹いていたらしい。

望実も、ユーフォニウムが第一志望の楽器だったと、本人から直接聞かされた。ユーフォニウムを吹いている時、楽しそうな顔をする。

真琴とは話した事が無いが、集合が終わった後に真っ先に倉庫へ向かう彼女は、とても活き活きしている。多分、コントラバスが大好きなのだ。

律とは同じクラスなのだがあまり話していないため、ファゴットが第一志望だったのかどうかは判らなかった。しかし、少なくとも律は、一生懸命練習している。現に彼は上達が早く、簡単な曲をまともに吹けるようになっていた。もしファゴットが好きじゃなかったら、そんなに早く上達しないだろう。

（四人に比べると、俺はなぁ……）

ため息をつく。信二は、チューバが好きになれない。よって、練習にもあまり身が入らない。練習に集中しようとしても、「あの音」を聞くたびに、集中が切れてしまう。

「永瀬？」

ハッとして正面を向く。信二を呼んだ悠輔が、チューバからひょこっと顔を出し、心配そうに見ていた。

「どうしたの？　ぼーっとして」

「なっ、何でもねーよ」

慌てて応える。そして、練習に集中しようとし、チューバを構えなおした。
とその時。「あの音」が、虹館の玄関から聞こえてきた。
思わず耳をすます。直線的に響く中低音。……トロンボーンの音だ。
「永瀬！」
悠輔の大きな声。信二は、顔をしかめながら正面を向く。現実に引き戻された気分だ。
「もう！　さっきから何度も呼んでいるのに……」
「……悪い」
「楽器が決まってから、ずっとそうだよね。話しかけてもぼーっとしているし、音も、なんか……吹く事に迷いがあるような」
「悪いって言ってんだろ」
ぶっきらぼうに応える。自分の現在の状態を正確に言い当ててくる悠輔が、嫌だった。これ以上自分に関わって欲しくない。心の中で叫ぶ。
（もう、言うな！）
悠輔は、信二をいぶかしげに見た。いつもは丸っこい目が、今は尖っている。
「……永瀬、もしかして」
悠輔の低めな声。胸がドキリと鳴る。
「まだ、未練持ってるんだね」
気にしている事を、はっきりと言われてしまった。もう、我慢出来ない。
「うるせえ！」
思わず大声で叫んでいた。ロビー内に、沈黙が漂う。
しばらく沈黙が続いた後、はっと我に返った。辺りを見渡す。目の前にいる悠輔や、信二の後ろ側でユーフォニウムを吹いていた望実、さらにホルンの一年生が、驚いたように信二を見つめていた。
「俺……もう帰る」

視線に耐えきれない。信二は、チューバをそっと置きながらつぶやき、椅子から立ってすたすたと歩いていった。悠輔の「えっ」という声を聞き流しながら、ロビーの隅に置いていたカバンを勢いよくつかむ。
「ちょっと待って……」
「近寄るんじゃねーよ」
チューバを置いて立とうとした悠輔に、ドスの利いた声を浴びせる。悠輔の動きが止まった瞬間に急いで靴を履き替えてから、信二は思い切り走り出した。
「っ……、待ってよ！」
背後から、悠輔の悲痛な声。信二は一瞬動きを止める。だが、振り返らず、再び走っていった。

「これから、どうしようか……」
夕ご飯とお風呂を済ませた信二は、二階の自分の部屋で考えていた。
悠輔に、思わずとはいえ怒鳴ってしまった。悠輔は本当の事を指摘しただけなのに。これからは、悠輔もロビーにいた望実達も、自分を敬遠するかもしれない。
「部活……辞めるか？」
チューバは、悠輔に任せておけばいい。今なら、辞めても迷惑はかからないだろう……
「……でも」
――高校では、もう一度吹奏楽部に入ります。今度は、最後まで続けてやるから――
約半年前、自分が宣言した事を思い出した。今吹奏楽部を辞めたら、「あの約束」を破ってしまう事になる。信二は、それだけは避けたかった。
「先輩に、報告してみようか……」
正直、こんな中途半端な状態のまま連絡するのは、気が引ける。

だが、信二はとにかく、自分の中にあるくすぶった気持ちを吐き出したかった。
携帯電話をカバンから取り出し、開く。電話帳で名前を探したとき、気づいた。
「あー……ケータイの電話番号、わかんねーじゃん」
その人の電話帳には、メールアドレスと、何故か家の電話番号しか登録されていなかった。
メールで連絡するのは嫌だった。メールだと返事がいつくるか解らないし、重要な報告をメールでするのもどうかと思ったからだ。
（しょうがねーな）
出来ればケータイの方に電話したかったが、メールよりはマシだ。そう言い聞かせて、信二はその人の家に電話をかけた。

呼び出し音が五回なった後、ブチっという音がした。
「もしもし……」
懐かしい声だった。信二は、親の方が出なくて良かったと思いつつ、自分の名前を言う。
「こんばんは、永瀬です……」
「えっ！　……もしかして、信二か！？」
その人は、明らかに驚いたような声を出した。当然だろう。いままで全く連絡していなかったのだから。
「そうですよ。お久しぶりです。俺が七海市を出てから一ヶ月経ちましたね……。今まで連絡出来なくてすみません、慎也先輩」
信二が電話をかけた相手は、七海市に住んでいる時にお世話になった、川崎（かわさき）　慎也（しんや）だった。

3　再会、再出発（後）

しばらく話しているうちに、慎也のズボラさが明らかとなった。
「えっ……俺の連絡先が解らなかった？」
「いや、まじで悪かった！」
信二は一ヶ月前に七海市から引っ越した。だから、信二の今の自宅電話番号を知らないのは解る。それに、信二と慎也はメールアドレスしか交換していなかった。だから信二の携帯電話番号を知らないのも解る。
しかし、信二が一回メールアドレスの変更を知らせた時、慎也は登録するのを後回しにして、そのまましばらく、信二のメールアドレスを登録し忘れていた。しかもその数週間後、操作を間違って、アドレス変更メールを削除してしまったらしい。
こうして、昔のメールアドレスだけしか知らなかったため、今まで信二にメールしようとしても出来なかったそうだ。
「まあ……別にいいですけど。後で新しいメルアドと携帯電話番号を送りますので、今度はちゃんと登録しといてください」
何だかんだ言って、今慎也と連絡し合えているのだから、特に怒りはしなかった。慎也は申し訳なさそうに「分かった」とつぶやく。
「そういえば、ずっと気になってたんだけどさぁ……お前は結局、どこに進学したんだ？」
いきなり話題を変える慎也。信二は戸惑いながらも、ぼそぼそと答えた。
「横浜市神奈川区にある、虹西高校です……」
「虹西……？　あっ、そういえば！」
慎也は、思い出したかのように声を張り上げた。
「何ですか？」
「俺、ナナコウの定演の参考にするために、虹西の定演に行くかもしんねぇ！」

「えっ……！？」
さすがに驚いた。慎也が、虹西高校の定演に来るかもしれない。一瞬、嬉しく思った。だが、すぐに何ともいえない複雑な気分になり、口をつぐむ。
「……どうしたんだよ、すっかり黙ってさぁ。嬉しくないのかよ」
「え……と」
信二はしばらく口ごもったが、いつまでも黙ってはいけない、慎也に伝えなければと、意を決したように口を開いた。きっぱりと言い放つ。
「俺……今はトロンボーン吹きじゃないんです」
電話の向こうで「え……」という声がはっきりと聞こえた。その声を聞いて、眉間にしわが寄る。更に目頭が熱くなった。
「じゃ、じゃあ、何の楽器に？」
「俺、チューバに回されたんです。……正直、やる気なんて出ません」
最後、思わず弱音を吐いてしまった。唇を噛む。その途端、一気に涙がこぼれだした。携帯電話が濡れる。
慎也は一言、「……そうか」とつぶやいた。そして、お互い黙り込んでしまった。

時計の針が、規則的にかち、かちと音を鳴らす。もうどの位の時間が経っただろうか。
「……お前さぁ、風見台（かざみだい）高校って知ってるよな？」
慎也が不意に尋ねてきた。信二は（なんでいきなり関係ない話……）と思いながらも、答える。
「はい、知ってますけど……」
約一ヶ月前までは、七海市に住んでいた信二。全日本吹奏楽コンクール東関東大会で金賞を取った風見台高校のことは、もちろん知っていた。
「俺の友達の幼なじみが今、風見台の吹部でサックスを吹いてるん

だけど」
そう言って一回間を入れた後、慎也はゆっくり語り始めた。
「そいつ、一年生の時、打楽器に回ってたんだ」
多分、人数調整のために楽器異動させられたのだろうと、信二は考えた。中学、高校の吹奏楽部だと、よくある事なのだ。
「最初は嫌々叩いてたんだけど……叩いてるうちに、打楽器の楽しさに気付いたらしいぜ」
信二は「はあ……」と、間の抜けた声を出した。慎也が何を伝えようとしているのか、信二はまだ解らない。
「それに、打楽器をやった事でリズム感やら何やらがついたみたいで。俺の友達……翔っていうんだけど、去年のコンクールであいつのサックスを聴いたとき、一年の時よりすごく上手くなってる！とか叫んでた」
慎也は、明るい口調で話をまとめる。
「つまり、別の楽器を経験するのは、無駄にならねぇってこと！」
「……」
信二は黙り込んでいた。そういう考え方もあるのかと、ただ呆気に取られていて声を出す事が出来なかった。
信二の様子を察したのか、慎也はもう一度語りかける。
「お前さぁ、中学ん時は第一志望じゃなかったトロンボーン、一生懸命練習してたじゃん。あの時の根性、どうしたんだよ？」
慎也の言葉を聞いた瞬間、信二は忘れていた三年前の出来事を思い出した。
「本当はトランペット吹きたかったけど、僕、トロンボーンでも何でもいい。とにかく、吹奏楽をやってみたかったんです……」
ちょうど三年前の今頃。「何故トランペットを吹けないのにトロンボーンを頑張るのか」と尋ねた慎也に、当時中学一年生だった信二が言った答えだ。
そう答えた直後、慎也は大きく目を見開き、体を硬直させた。き

っと、動揺していたのだ。今思えば、慎也も過去に、自分と同じような体験をしていたのかもしれない。
信二はさらに、しゃがれた声（当時、声変わりの途中だった）を振り絞って、断言する。
「僕、すごい下手くそだけど……だからって、頑張る前に諦めるなんて、僕には出来ないんで」
慎也は、何の反応もしなかった。今の言葉は聞いていなかったかもしれない。
信二はじっと、慎也を見つめる。とその時、慎也は急に笑顔になった。
「そうか。すげぇじゃん。そのやる気」
「……！」
優しい声。慎也がそんな事を言うとは思わなかった。だからこそ、何か認められたような気がして嬉しかった。思わず、笑みがこぼれる。
「頑張れよ、一年生」
慎也はニカッと笑う。茶髪に腰パン、鋭い目つき。今まで怖いと思っていた慎也の、本来の姿を知った瞬間だった。
「はい！」
気づいたら、大きな声で返事をしていた。
この出来事があってから、信二は今までよりも練習に身が入った。そして、信二のトロンボーンの腕は、どんどん上達していったのである。

中学一年生の自分の方が、第一志望の楽器ではないにも関わらず、頑張っていた。果たして、今の自分はどうか。
「中学ん時より今の方が、その楽器の魅力に気付いているわけだから、どうしてもこだわっちゃうよな、トロンボーンに」
慎也は、再び語りかける。
「だから、トロンボーンを吹けないって解ったとき、つらかっただ

ろうな。……でも、いつまでもその事でうじうじしていたら、前に進めねぇだろ」
確かにそうだ。慎也の言うとおりである。
信二は三年前の楽器決めを思い出す。現在のトロンボーン程思い入れは無かったとはいえ、トランペット担当になれなかった時は、本当にがっかりした。
しかし、吹奏楽は辞めたくなかったから、トロンボーンを一生懸命吹いた。そのうち、トランペットが第一志望だったことは忘れていった。すっかり、トロンボーンに夢中になっていたのだ。
中学一年生の自分が、第一志望以外の楽器を一生懸命練習し、夢中になれたのだ。今の自分が、同じ事を出来ないわけがない。信二はそう考えた。
「自分への試練だと思って、チューバ頑張ってみろよ。……得られるものが必ずあるから」
三年前のあの時と同じ、優しい声だった。その言葉が身にしみた。不意に、視界がぼんやりとしてくる。
「はいっ……！」
強くはっきりと応えながら、信二は再び涙を流していた。しかしこれは、悲しくて流した涙ではなかった。
慎也の気遣いが、とても嬉しかったのだ。
「ありがとう、あの時の事を思い出させてくれて……」
電話を切る直前につぶやいたこの言葉が、慎也に聞こえたかどうかは判らない――

次の日の朝。信二はチューバを、真剣な眼差しで見つめていた。
（自分への試練だと思って、頑張ってみろよ。得られるものが、必ずあるから）
昨日慎也に言われた言葉を思い出す。その言葉はじんわりと、体中に染み込んでいった。
「……よし！」

意を決したように声を上げた。チューバに一発、息を吹き込む。
大きく、はっきりとした音であった。信二の決意がそのまま表れたように。もう、迷いが音に出る事は無い。
「……永瀬？」
毎日聞いている声。一瞬ビクッとする。素早く右を向くと、悠輔が玄関で、目を丸くして立っていた。
沈黙が続く。
「……鈴木」
声を掛ける。悠輔は黙ったままだ。
「お……おはよう！」
思わず大声になってしまった。体温が、一気に上がった気がする。
悠輔は一瞬、たじろいだ様子を見せたが、すぐに「おはよう……」と返した。
「今日も……これからも、チューバを色々と教えてくれ。俺、もっと頑張るから……」
多分、顔が紅くなった。信二は慌てて、悠輔から目線を逸らす。
「……覚悟、しといてね」
悠輔の声は普段通りの、優しいテノールだった。
「おう」
悠輔に返す。自然と口角が上がっていた。
「じゃあ、急いでチューバ出してくるね」
悠輔はカバンを置くと、急いで部室に向かっていった。
玄関をしばらく見つめる。それから、目線をチューバへと戻した。
チューバに移った自分の顔を見た後、再び息を吹き込む。
初心者らしく、ぎこちない。だが、どこか暖かい音だった。

3　再会、再出発（後）（後書き）

更新遅くなってすみませんでした！今回は「奏」から、川崎慎也君に登場していただきました。
「三年前の出来事」の慎也君視点は「奏」の２６１話、信二のある台詞は２６０話をご覧ください。

～どうでもいい報告～

今、著者はなんか多忙＆ａｍｐ；いきなりスランプに陥っているため、更新がかなり遅めになります。
とりあえず、５月中に一話は更新しますが、６月に入ってからはどうなるか……。なるべく頑張ります。

4　コミュニケーション

五月三日。ゴールデンウイークまっただ中である。
ゴールデンウイークと言えば、小学生辺りなら、休み放題、遊び放題という言葉が浮かぶ。だが、五月末に定期演奏会を迎える虹西高吹奏楽部にとっては、遊び放題などとは言えない。
実際、ゴールデンウイークのほとんどが、部活に潰れる。だが、鈴木悠輔はむしろ「嬉しい」と思っていた。
「ったく、よく鈴木は嬉しいとか言えるよな」
信二が、呆れたように口を開く。彼は、最近やっと、チューバをきちんと吹き始めたところだ。
「何で？　だって、授業も無く一日中吹ける日が続くんだよ？」
「宿題やる時間がないだろうが」
そう返しつつも、信二は照れくさそうに「嬉しいっちゃ、嬉しいんだけどな」とつぶやく。悠輔は赤い頬をした信二の顔を見て、どこか暖かな気持ちになった。
一時はどうなるかと思った。だが、一夜明けたら、信じられない程信二の練習態度が変わっていた。何があったのかは知らないが、信二がチューバを吹く気になってくれたのは、悠輔にとっては大変喜ばしい事である。ここで、悠輔はハッと気づいた。
「……って、話がずれてるよ。僕たちの目的は、あそこにいるあの子だろ？」
悠輔は、青色のトタンの屋根がついている、古い建物……楽器倉庫を指差した。
「今日こそは、相原さんと話さなきゃね～」
すたすたと、倉庫に向かって歩く。信二も慌ててついて行った。
実は、悠輔と真琴はまだまともに話した事が無い。今のところ、挨拶だけはするという関係だ。

今までにも何度か、真琴に話しかけようとはしてきた。
しかし、真琴とは楽器が違う上に、練習場所まで違う。さらに、バスパート一年の中で、唯一中学と同じ楽器担当の悠輔は、信二を付きっきりで教えていた。
部活が終わった後に話しかけようとも思った。しかし、家が遠いからなのだろうか、真琴は楽器を片付け終わると、すぐに帰ってしまう。
そんな事があって、結局、今までずっと真琴に話しかけられなかったのだ。
「これ以上は延ばせないから、何とかして仲良くならないと！」
倉庫の前に着いた悠輔は、ますます張り切っていた。
「……言いたい事は解るけどさ。何でお前の計画に、俺も関わってくるわけ？　一人では話しかけられない……というわけでは無いんだろ？」
信二は肩をすくめた。どうやら、悠輔の思惑が解っていないようだ。
「永瀬も、この計画には必要なんだよね」
首を傾げる信二の隣で、悠輔はふと、一年前の事を思い出した。

ゴールデンウィークの最終日に行われた、中学校の合同練習会での会話は、今でも悠輔の心に残っている。
「ねぇ、師匠……」
体格の割に柔らかいテノール声を出す悠輔。当時、悠輔は愛媛県松山市に住む、明台中学校の三年生だった。
「『師匠』はやめろって、さっき言っただろうが」
ムスッとした顔で、どこかぶっきらぼうに話す男の子。悠輔よりも背は低く年下なのだが、何ともいえない威圧感を出している。
「じゃあ……泰徳」
悠輔は微笑みながら、あっさりと呼び方を変えた。男の子……竹林（ばやし）泰徳（やすのり）は、照れくさそうに「……それでいい」と返す。

彼は、吹奏楽の強豪校である、松山市立常套中学校のチューバ吹きだ。二年生である。
普通なら、悠輔が先輩で泰徳が後輩という立場になるのだが、悠輔と泰徳は逆転した上下関係を続けている。……悠輔が弟子で泰徳が師匠という、奇妙な師弟関係なのだ。
「……あの、大きいヴァイオリンみたいな楽器は何て言うの？」
「知らねーのか？　あれは『コントラバス』だ」
悠輔と泰徳は、音楽室の隅でコントラバスを弾いている女の子……中井　美奈を見た。
「明台にはそういう楽器無かったから……。やっぱり、大人数の吹奏楽部っていいよね～。コントラバスとか、他にも少人数バンドじゃ見ない色んな楽器があるんだもん！」
「ああ……そういえば、明台は新しく出来た学校だったな」
「うん……」
悠輔が通っていた明台中学校は、二年前、二つの小さな中学校が統合されて出来た学校だった。
二校ともに吹奏楽部は無かったため、今の吹奏楽部顧問が、新しく「明台中学校吹奏楽部」を創ったのである。当然、部員は少なかった。楽器も、必要最低限のものしか揃っていない。だから悠輔は、コントラバスを知らなかったのだ。
「ところで、コントラバス……を弾いているあの子とししょ……泰徳は」
いつもの癖で「師匠」と言いそうになったが、すぐに呼び方を直した。泰徳が「師匠」と呼ばれるのを嫌がるからだ。
「何だ？」
「二人とも、仲良しだよね～。それに、ユーフォの……」
「谷　未来な」
二人は、明台中のユーフォニウム吹き二人と一緒に曲を吹いている、未来を見つめた。
「そう、谷さんも……三人、すごく仲良し。なんか、強い絆がある

って感じ」
「絆？　変な事を言うよな、お前は」
泰徳は一瞬、しかめっ面をした。だが、すぐに真顔に戻る。
「俺はそんなの信じてないが……まあ、あの二人とは何だかんだ言って、ずっと一緒にいるからな」
泰徳は微かに口角を上げ、ふと遠くを見つめた。過去を思い出しているのだろうか。

「そういえば、悠輔」
数分経った後、泰徳が突然悠輔に話しかけてきた。
「何？」
「お前は、どこの高校に行くとかもう決めているのか？」
悠輔は一瞬、目を泳がした。「うーん……」と唸りながら考え込む。
「まだ決まってないんだな」
悠輔は苦笑いしながら、「そうなんだよね」と返す。
「じゃあ、よく聞いておけ」
泰徳は再び、視線を悠輔から美奈へと移した。
「明台は、コントラバス無いんだよな」
「うん」
悠輔の所属する明台中学校吹奏楽部は、今年やっと、部員が２６人になったところだ。
今まで少人数バンドだったし、楽器が無いということもあって、今までコントラバスを弾く人はいなかった。
「もし、大編成の吹奏楽部がある高校に入るなら、きっとコントラバスを弾く奴もいるから……そいつともちゃんと練習して、あと最低限のコミュニケーション取っとけ」
「えっ……何で？」
泰徳は改めて悠輔の方を向いた。
「まず……コントラバスの楽譜は、チューバと同じ動きが多いんだ

よ。動きが全部同じ曲もあるくらいだ。だから、コントラバスとは合わせとく必要がある」
「なるほど」
コントラバスは、チューバとほぼ同じ低音域の楽器だ。だから必然的に、コントラバスも伴奏が主な仕事になる。チューバと同じような動きになるのも、頷ける。
「コミュニケーションを取っとかないと、音色や音形が合わない時に意見を言い合えなかったり、言っても相手に聞いてもらえなかったりするかもしれないだろ。他の楽器と合わせるのも重要だが、同じ動きが多いコントラバスは、特に重要だろう」
「……そっか！」
悠輔は目を輝かせた。
「つまり、泰徳達三人みたいに仲良くなればいいんだね？　わざわざ『最低限のコミュニケーションを取る』なんて長い表現、使わなくていいのに～。素直じゃないなあ」
泰徳は「なっ……はあ！？」と素っ頓狂な声を上げる。だが、悠輔は気にせず、ひたすらにこにことしていた。
その後、何故泰徳が苦笑いしながら「お前、やっぱ不思議な奴」とつぶやいたのか、悠輔はいまだに解っていない。

「……おい、鈴木！　聞いてるのか？」
ハッと我に返る。右を向くと、信二が呆れたように悠輔を見ていた。
「お前……何を考えていたんだ？」
「……ただ、僕たちがここへ来る理由を、思い出していただけだよ」
信二は一瞬、「訳が分からない」と言いたそうな顔をした。だが、その言葉は言わず、今度は照れくさそうな顔になる。
「まあ、俺も、相原さんと……コミュニケーションっていうか、話せる……ようになるに越したことはないからな。お前に付き合うぜ」
悠輔は目をぱちくりとさせる。そして、「ぷっ」と噴き出した。

「何がおかしいんだよ」
「だって……素直に『仲良くなる』って言えばいいのに、あいつと同じ事言うからさあ……やっぱ似てる」
話すうちに、思わず笑みがこぼれた。信二は、顔を赤らめながら、慌てたように声を上げる。
「なっ……！　あ、あいつって、誰だよ？」
「その話は、後でね～」
とびっきりの笑顔を信二に向ける。そして悠輔は、意を決したように倉庫の扉を開けた。

4　コミュニケーション（後書き）

今回は、「ブラス魂」から泰徳君達に登場していただきました！

前話でも書いたとおり、今、私は多忙＆ａｍｐ；スランプ中のため、６月からは更新周期がどうなるか解りません。意外と早かったり、またはものすごく遅くなるかも……。

とりあえず、６月中には律を出したいと思います。

5　改めて、よろしく

真琴は一人、倉庫で基礎練習を繰り返していた。
足は肩幅くらいまで広げる。体は固くならないで、気楽に。弓は弦と垂直に。手首は柔らかく。
以上の事に気をつけながら、Ｇ（ゲー、ソの音）、Ｄ（デー、レの音）、Ａ（アー、ラの音）、Ｅ（エー、ミの音）と順番に弾いていく。
真琴の弾いた音は、倉庫中に響いていった。

真琴は最近、まともに弦を弾けるようになっていた。これは、智貴と治美が一生懸命、丁寧に教えてくれたからである。
決して器用ではない真琴は、基礎を覚えるのも一苦労だった。だが今は、音をしっかり伸ばせる。
（……よし！）
基礎練習は一通り終わった。真琴は教則本を片付け、『オレンジ』と『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』の楽譜を譜面台に置く。……その時だ。
（……では……られない……という……だろ？）
（……も、この……だよね）
「……ん？」
一瞬、人の話し声が聞こえた気がした。だがすぐに、声は完全に消えた。
「……気のせい、かな？」
真琴は（さっきのは聞き違いか）と思い、すぐに練習に戻った。
基礎練習が終わった後、曲の練習に入る。
『オレンジ』と『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』を何度も弾いた。だが、弾いているうちに、だんだん手を開くのがキツくなってくる。

さらに、左手が痛くなってきた。
「ふぅ～、ちょっと休憩……」
真琴はコントラバスをそっと毛布の上に置き、近くにあった折りたたみ式の椅子に座る。そして、思考にふけった。
（……こんなんで、本当に間に合うのかな）
定演まで、あと一ヶ月も無い。それなのに、真琴が曲の練習に入ったのは、つい二日前の事であった。
今の真琴は、必死に楽譜の音を弾いている状態。音の強弱や曲想を気にする余裕など無い。
（そういえば、チューバの二人は……どうなんだろう）
まだ怖くて、なんとなく話しかけられていない悠輔と信二。正直言って、二人の音はまともに聴いた事がない。
だが、思い返してみると、悠輔は中学からの経験者だと、自己紹介の時に言っていた。悠輔は曲を簡単に吹けているに違いない。
信二は、中学時代はトロンボーンを吹いていたらしいと、望実から聞いた。いくら楽器が変わったとはいえ、前に金管楽器を経験していたのだから、完全に初心者の自分よりは吹けているだろうと、真琴は考えた。
（あの二人なら、やっぱり吹けてるよね……駄目なのはわたしだけじゃん）
真琴はため息をついた。なんとかして、チューバの二人に追い付きたいと考える。
（練習、再開するか）
椅子から立ち上がろうとした、その時。今度ははっきりと、人の話し声が聞こえてきた。
「なっ……！　あ、あいつって、誰だよ？」
「その話は、後でね～」
（……やっぱり、誰かいる！）
真琴がそう感じて扉を見つめた直後、扉が大きな音を立てて開いた。

「ひっ……！？」
一瞬ビクッとした。無意識に椅子から立ち上がり、話していた人を確認する。するとそこには、笑顔の悠輔と戸惑ったような表情を浮かべている信二が立っていた。
「おい！　いきなり開けるなよ。相原さん、驚いちゃってるじゃん……」
信二が悠輔に、ひそひそと話しかけた。真琴にもその声が聞こえてくる。
「……しまった！　興奮しちゃって、つい……」
ハッと気付いたように手を口に当てる悠輔。
真琴は、ただポカーンと、二人のやり取りを見ていた。同時に、こんな事を思う。
（この人達、何でここに来たんだろう……？）
「あ、あの～」
不意に、悠輔が話しかけてきた。
「驚かしちゃってごめんね。僕たち、改めて挨拶に来たんだ」
真琴は目を丸くした。まさか、悠輔達の方から来てくれるなんて、全く思っていなかったからだ。今まで鳴っていた心臓の音が、小さくなっていく。
「僕は、チューバを吹いている鈴木悠輔です！　……ほら、永瀬も」
悠輔が信二に促す。信二は「お、おう」と少し緊張気味に言い、一呼吸置いて話し始めた。
「俺は、永瀬信二。チューバ担当」
そして、二人は同時に声を出す。
「これからよろしく！」
二人は顔を見合わせると、また同時に「同じ事を言うなよ～！」と言い合った。
真琴は、そんな二人を交互に見て、感心したようにつぶやく。
「仲良いんだね～、二人とも……」
悠輔がすぐに「何か言った？」と尋ねてきた。

「んーん、何も」
微笑みながら答えた後、真琴も自己紹介をする。
「コントラバスを弾いている、相原です。……これから、よろしくお願いします！」
「……おう！」
「うん、よろしく～」
笑顔で応える信二と悠輔を見て、真琴は思った。男の子と話すのに、変に気負う必要は無かったのだ……と。
「そういえば……あ、あの！」
二人が「何？」と聞く中、真琴はふと思いついた事を、勇気を振り絞って口にした。
「……あの、いきなりで悪いんですけど……一緒に、曲の練習をしてくれませんか？」

晴れた空の下、倉庫の前で、三つの低音が響き渡った。一つは、柔らかな音。二つは、必死に付いていっているような、一生懸命な音。
「……ストップ！　永瀬、ここはP（ピアノ）だから、もう少し音量を落とそう」
「はい！」
信二は大きな返事をする。
「相原さん、F（エフ、ファの音）とC（ツェー、ドの音）が低くなってるから、そこの音はもっと意識して弾いてね～」
「あっ、はい！」
弾く事だけに一生懸命になりすぎていたためか、音程には全く気がついていなかった。慌てて人差し指と中指の間、薬指と小指の間を広げ、しっかり押さえる。今度は音がきちんと合った。
「うん、オーケー！　じゃあ、もう一回初めからいくよ～」
悠輔の言葉に、真琴と信二は同時に「はい！」と返事をした。
曲を弾きながら、真琴は思う。

（みんなで合わせるのって、なんかいいかも……）
数人で合わせると、自分が気付かなかった所を指摘してくれる。勇気を出してよかったと、真琴は満足したのであった。
曲を一通り合わせ終わった後、真琴の後ろから声が聞こえてきた。
「やっほー！　やってるね～」
「ん……？」
真琴が後ろを振り向くと、ユーフォニウムを抱えた望実が立っていた。
「あっ、浜田さん！」
悠輔は大きく手を振った。望実もにこやかに手を振り返す。
「トロンボーンとの合わせは、もう終わったのか？」
信二が尋ねると、望実は「うん、ついさっき」と応えた。
「そうそう……相原さん聞いてよ～、ビッグニュース！」
「なっ……何？」
真琴は、望実の勢いにたじろぎながらも、耳を傾けた。悠輔と信二も、興味津々な様子で望実を見つめている。
「聞いて驚かないでよ！　……定演のチケット、なんと五十枚以上売れちゃいました！」
その言葉を聞いて、三人は一斉に声を上げた。
「うそ！？」
そして、信二が望実を疑っているように見て、「一体、どんな怪しい手を使ったんだ？」とからかい気味に尋ねる。
「怪しい事なんかしてません！　偶然美人の先輩と出会って、気が合っただけなんだからね！」
「へー、そうか。なら、その気が合った美人さんとやらを、詳しく教えてもらおうか」
「あんた……、まだあたしの事を信用してないね」
「そりゃ、お前だからなー」
ぎゃあぎゃあと言い合う望実と信二の横で、真琴と悠輔は苦笑いをしながら二人を見ていた。真琴がおもむろに口を開く。

「……これ、ケンカに発展しないよね？」
「大丈夫だよ～。二人とも、ふざけあってるだけだから。一緒に練習する時、二人はいつもそんな感じだし」
悠輔は特に気にしていないようなので、真琴も気にしないことにしておいた。

二人が言い合いを始めてから一分後。悠輔が、青と白が半々の空を見上げながら、小さく声を出した。
「……こうやって、相原さんとも話せるようになって、本当によかった」
真琴は目を大きくして悠輔の方を見る。悠輔も、真琴と同じ事を思っていたのだ。嬉しい……と感じる。
「……うん、わたしも」
「わたしも、話せるようになってよかった」と言おうとした。だが、その時悠輔がつぶやいた独り言が、妙に真琴の耳に残ったのである。
「後は、あいつだけか……」
悠輔は、真剣な表情で虹館の二階を見つめた。真琴もそっと、虹館二階を見てみる。
ファゴットの伸ばす音が、聞こえた。

6　ついそっけなく

ゴールデンウィークが終わった後も、虹西高校吹奏楽部は練習に大忙しだ。何しろ、定期演奏会が迫っているのだから。

「定演まで、あと三週間です。気を引き締めていきましょう！」

和樹の言葉に、全員が「はい！」と気合いが入った返事をする。特に三年生は大きな声を出していた。さらに、美雪が号令をかける。

「気をつけ、礼！」

部員達はお辞儀をした後、「さようなら！」と挨拶した。そのすぐあと、思い思いに動き出す。楽器を片付ける者。再び練習を始める者。友達と話を始める者。

藤本律は、そんな部員達の様子を見つつ、ファゴットを片付けるために虹館の二階へと向かった。

中学時代、後輩が吹いているのを見ているうちに、次第に気になってきたファゴット。いつしか、聴くだけではなく吹きたいと思い、高校ではファゴットを希望した。

無事に第一希望の楽器になれたので、早く上手くなりたいと、一生懸命練習した。だからか、最近先輩から「だいぶ音が安定してきた」と言われるようになった。

あと少しで本番だということについては、あまり不安を持っていない。中学時代に多くの舞台を経験しているのだから、舞台に立つこと自体は慣れている。

ただ、一つだけ、不安に思っていることがある。

律が虹館を出ると、辺りは暗くなり始めていた。

周りには、楽しそうにお話をしている部員達。虹館の玄関が、吹奏楽部員の溜まり場になっているようだった。律は笑顔の部員達をちらっと横目に見つつ、校門へと向かう。

虹館玄関からまっすぐ歩いて校門へと近づいた、その時。

「もう！　いい加減諦めて、あたしを信じようよ！」
はっきりと通った声。思わず足を止める。目を凝らしてよく見ると、興奮している様子の望実、細長い切れ目をさらに細くして、疑い深そうに望実を見る信二、苦笑いをしながら望実をなだめる真琴と悠輔がいた。律の不安の元である。
「そもそも、何でこんな事になったの？」
優しく、透き通った声を出す真琴。
「今日こそはちゃんと話してもらうからな！」
信二の低い声が大きく響く。
「じゃあ、聞き逃さないでよね！」
望実が念を押したあと、本当に現実なのか分からないような話を始める。律はごく自然に、望実の話に耳をそばだてていた。
「まず、あたしは四月最後の土曜日、お母さんと一緒に七海市に引っ越してきた、いとこの家に行ったわけよ。チケット売ろうと思って」
三人は同時に「うんうん」と頷く。
「で、その帰りに七海市の商店街に寄ったの」
すぐに悠輔の「何で～？」と言うテノール声が聞こえてきた。
「妹達にお土産を頼まれていたのと、お母さんが『商店街にある、美味しいって評判のパン屋さんに行こう～』って言い出したから、帰りにそこへ行ったんだよ」
信二が「それがどうして、チケットが五十枚も売れたという話になるんだ？」と首を傾げた。真琴と悠輔も不思議がっている。
これには律も驚いた。どんなに顔が広い三年の部員でも、五十枚売れたなんていう話は聞かなかった。
「ここからが本番！　……その後、あたし達は道に迷ったの。お母さんの方向音痴のせいで……でも、助けてくれた人がいたの！　七海高校の吹奏楽部でサックス吹いてる先輩！」
信二が「七海高校……！？」と、驚いたような声を出した。
「うん、そう！　美人だしハスキーボイスがカッコいいし、背が高

いし……あ～、憧れるなぁ」
　言い終えたすぐ後に、望実は顔を上げ、恍惚とした表情をした。どうやら、どこかの世界へと入ってしまったらしい。悠輔が手を望実の前で振っても、全く反応しない。
　一方信二は、手を組んで何やら考え始めた。今まで望実を信用していなさそうな態度を取っていたのとは違い、「あながち、嘘では無いのか……？」などとつぶやいている。
　真琴は、急変した二人を交互に見て、「あの、二人とも……？」と声を出す。明らかに困った様子だ。当然の反応だと、律は思った。実際、律も二人の急変した様子には困惑した。どうしてこうなったのか、話が全く解らない。
　何となく足が動かず、立ちすくむ律。と真琴が、ふと気がついたように、後ろを振り向いた。律は一瞬、ビクッとする。
「……あ」
（！　やばい、気付かれた……）
　つい、望実の話に聞き入ってしまった。最初は、さっさと通り過ぎようと思っていたのに。
「あ、あの……」
　真琴が律に話しかけながら、おずおずと近づいてきた。三人もやっと律に気が付いた様子で、律の方を振り向いて「あっ！」と声を上げる。
「何……？」
　後ずさりをしながら、やっと声を出す。唇が乾く。心臓の音が大きくなる。
「今の話、聞いてた？」
「……別に、その」
　確かに聞いてはいたが、改めて問われると恥ずかしい。まるで、盗み聞きをしたような気分になる。
「今の話って、どう思う？」
「どう……って言われても」

返答に困る。真琴だけでなく、望実達三人も律をじっと見てくるので、余計に答えづらい。
「じゃ、じゃあ……藤本君は、チケット何枚売ったの？」
どうしていきなりそんな話になるのか。どうやら、真琴はかなり慌てているらしい。
「あっ！　それ、あたしも知りたい！」
あろうことか、望実も真琴の話に乗った。悠輔と信二も知りたがっているようだ。興味津々といった様子で律を見ている。
いつのまにか、四人が一列に並んで律の方に身を乗り出していた。正直、色々な意味で怖い。口の中が乾いてくる。
気付けば、声を出していた。
「何で、オレに聞くわけ？」
真琴が「え……」と声を漏らし、固まった。望実、悠輔、信二も、ただポカーンとして律を見る。律は、そんな四人の姿を見て居たたまれなくなった。
自然に足が動く。律は素早く真琴達の横を通りすぎ、校門を出てからは一気に走った。

家に帰った後、律はすぐに二階へかけ上がった。自分の部屋のドアをバタンと閉める。下にいる母が「律、静かに閉めなさい！」と怒るような声が聞こえたが、無視しておいた。
スクールカバンを置き、ベッドの上を仰向けに寝転がる。天井を見つめながら、律はさっきの出来事を思い返した。自然とため息が出る。
「……また、やっちゃったな……」
もともと、人付き合いがあまり得意ではない。人の質問に対してつい、冷たい言葉を返してしまう事がある。さっきも、思わず口にしてしまった。
目を閉じると、つい十五分前に見た真琴達の顔が思い浮かんだ。三人の呆然とした顔、そして、真琴の悲しそうな顔。

（もう、あいつらとは仲良く出来ないかもな……）
そう思った後、不意に眠気が襲った。律は、まだ眠る時間じゃないと思いながらも、目を開けられない。律の意識は少しずつ薄れていった。

暗い視界の中、遠くからトランペットの音がまっすぐ伸びていくのを感じた。目を閉じたまま、その音に耳を傾ける。
しばらくそうしていると、どこからか女の子の声が聞こえてきた。
「先……？　何して……」
聞いた事のある、懐かしい声。目を開けようと思ったが、周りが暖かいせいか、眠くなってきた。声が聞こえたのは気のせいだという事にしておいて、そのまま眠ろうとする。
「先輩！　何ボーッとしてるんですか！？」
「……う」
今度は大きな声が間近で聞こえてきた。気のせいではなかったようだ。ゆっくりと目を開けて、正面を向く。
律の目の前には、ファゴットを持っている女の子が立っていた。

7　歩み寄って

女の子は、確かに律の目の前にいた。律は女の子をもっとよく見ようとする。しかし、黒縁眼鏡は掛けているはずなのに、何故か視界がぼんやりとしていて、女の子の顔がよく見えない。

律と女の子を取り囲む風景もそうだ。どことなくぼやけている。はっきりとしているのは、太陽の光と暖かいという感覚だけ。

だが、律は何となく解っていた。自分がどこにいてどこに座っているのか、そしてこの女の子が誰なのかという事を。

「……先輩、本当にどうしたんですか！？」

はっと気づく。状況把握ばかりしていて、女の子の声は全く聞こえていなかった。

女の子は、話を聞いていなかった律に眉を潜めていたが、すぐに元に戻り、今度は心配そうな表情になって律に語りかける。

「……何か、悩んでいるんでしょう？」

まさにその通りである。律は一瞬口をつぐんだが、堪忍して「……うん」と、小さく声を出した。

「先輩の事だから、また対人関係ですよね」

女の子はきっぱりと言う。このはっきりとした口調を聞いて（相変わらずだな）と、律は思った。

「もう……何度も言ってるじゃないですか。先輩はもっと心を開くべきだって」

女の子はファゴットを持っていない左手を腰につけ、口を尖らせた。

「そんな事、言われてもな……」

律には解らなかった。「心を開く」といっても、一体どうすればいいのか。抽象的な事はどうも苦手なのだ。

女の子はしばらく黙って律を見つめる。が、いつまでも話そうとしない律にしびれを切らしたのか、話をし始めた。

「先輩って、自分から相手に近寄ろうとしないし、相手の方が近づいて来ても、なんか逃げますよね」
いきなり何の話をするのかと、律は思った。戸惑う律に対して、女の子は話を続ける。
「だってそうじゃないですか。一年前、あたしが先輩に色々質問したら、『何でそんな事聞くの？』なんて冷たく返して。これがあたしじゃなくて他の女の子だったら、絶対泣いてました」
「うっ……」
まるで耳が痛くなるようであった。そういえばこんな事もあったなと、今更になって思い出した。一気に申し訳ない気持ちになる。
「……あの時は、ごめん」
頬が紅くなるのを感じながら、女の子をまっすぐ見て謝った。女の子は驚いたようで、今まで腰に当てていた左手をゆっくり降ろそうとする……次の瞬間。女の子は左手の人差し指を律に向けて、大声を上げた。
「それですよ！」
急に出した大声に、律の心臓は跳ね上がった。素早く鳴る胸の音を聞きながら、女の子に尋ねる。
「それって、どういう……」
女の子は、今度は左手で握りこぶしを作り、力の入った声で言う。
「つまり、先輩はもっと素直になってください！」
「なっ……素直？」
「そうです！　先輩は天邪鬼だから、聞かれた事に素直に答えないじゃないですか！　まずは質問に素直に答える！」
女の子は一気にまくし立てた。律はたじたじして話を聞きながらも、一理あるなと思った。
突然自分の事について尋ねてきた者に、冷たい返しをしてしまう癖が律にはあった。それは、自分のテリトリーにいきなり足を踏み入れられた気がするからである。
しかし、女の子に言わせると「それは考えすぎ」らしい。相手は

ただ純粋に、律を知りたくて質問しているのだから、素直に答えればいいとの事だった。
「あとですね……」
律は（まだあるのか？）とあきれながらも、今までの指摘が当たっているため、真面目に聞くことにした。
「先輩はもっと、自分から相手に歩み寄ってもいいんじゃないですか？」
「オレ、から……？」
「はい！　先輩、いつも人の話を聞くばかりで、自分の事はあまり話そうとしませんよね」
確かにそうであった。相手が話すのをただ黙って聞くだけ。自分から話す事はめったに無かったのだ。
「だから、素直になって、自分の事を話してみる。そうすれば、同級生や後輩ともっと打ち解けあえるはず！」
「……そっか」
律は、全てに納得したような気がした。
今まで、相手に対して警戒心を持ちすぎていたのかもしれない。自分から心を閉ざしているのだから、相手が心を開かないのも当たり前だと思った。
次からは、自分からちょっとでも歩み寄ってみようか。意外にすんなりと仲良くなれるかもしれない。この女の子とのように。
律の納得した様子を見て、女の子は満足そうに声を出す。
「先輩、本当は優しくていい人ですから……絶対大丈夫！」
その瞬間、今までぼんやりとしていた風景と女の子の顔が、はっきりと見えた。律は驚いて立ち上がり、女の子をあらためて見る。
女の子はとびっきりの笑顔を律に向けていた。その顔が自然と、心に焼き付けられた。女の子の笑顔に、律は思わず頬をゆるませる。
「……ありがとう、ゆ……」
お礼を言う途中、視界が次第に暗くなっていった。妙な浮遊感に、律は引き戻されるのを感じたのである。

ふと目を開けると、視界がぼやけた。いつの間に眼鏡をはずしたのだろうか。さらに、寝る前には点いていた電気が消えている。そして、律の上に薄めの布団がかかっていた。
「……電気、点けなきゃ……」
布団を剥がして起き上がり、電気を点ける。今までのは夢だったのかと思いながら目を擦り、律の近くに置いてあった黒縁眼鏡を掛けた。ふと、部屋の壁に掛けてある時計を見る。
「！　嘘だろ……？」
短い針は「１０」を指していた。家に帰った時刻は八時前だったので、あれから二時間近く眠っていた事になる。
（母さん……起こしてくれなかったのか？）
こういう時、いつもなら母が起こしてくれるのだが。そんな事を思いながらベッドから降りる。とその時、ベッドの棚の上に小さな紙が置いてあるのを見つけた。二つ折りになっているその紙を取って、すぐに開く。

――あなたがあまりにも気持ちよさそうに寝ていたので、そのままにしておきました。お母さんはもう寝ます。ご飯は作ってあるので、温めて食べてね。あと、お風呂にもちゃんとはいってね。おやすみなさい――

「オレ……そんなに気持ちよさそうだったか？」
さっきの夢を思い返してみたが、あれは決して、楽しい場面ではなかった気がする。だが、何となく嬉しかった。その事は覚えている。
一瞬、嬉しいのは何故かと考えたが、すぐに答が解った。……「彼女」に会えた事だ。
（……それにしても）
まさか、一年前の出来事が夢に出るとは思わなかった。直前に、

真琴たちとのやり取りを思い出していたからだろう。そのやり取りは、一年前の状況と全く同じだった。だから、一年前と同じく「彼女」に説教されたのだ……と考えた。
これでは、自分は一年前から全然変わってないではないか。律は悔しいと感じた。唇を噛む。
「くそ……やってやる」
律はつぶやいた。同時に、女の子と同じように左手で拳を作り、ぐっと力を入れた。

次の日の、部活が終わった後。ファゴットを片付けた律は、昨日とほぼ同じ時間に虹館を後にした。真琴たちがいる事を期待しながら。
歩幅を少なく、ゆっくりと歩く。すると、また望実の大きな声が聞こえた。
「えっ！？　あんたも七海高校に知り合いがいたの？」
ぴたりと足を止める。
「そうそう！　中学校でお世話になって、今はそこの吹部でボーンを吹いてる」
「へー、そんな偶然ってあるのね～」
信二と望実が、お互いに驚いた、しかし嬉しそうな表情で話をしていた。真琴と悠輔も、楽しそうな様子で話を聞いている。
（うっ……やばい）
四人で固まっている中に入る事は、思ったよりも難しかった。部活後に話しかける作戦は失敗した……と、律は頭を抱える。しかし、四人をもう一度見てみると、あることに気が付いた。
（……一人分、空いてる？）
そう、真琴と悠輔の間に、ちょうど一人入るスペースがあるのだ。たまたまだろうかとも思ったが、それにしても不自然に空きすぎている。
これは、いったいどういうことかと考えていると、複数の視線を

感じた。正面を向くと、四人が律をじーっと見ている。びくっとした。再び怖じ気づいて後ずさりをしようとした、その時。
「やっと来たね～、まだいてよかったぁ」
悠輔が微笑みながら、律に向かって話しかけてきた。律は突然の事に目を丸くする。
「遅いよー。あたし達、ずっと待ってたんだからね！」
今度は望実が声を上げる。望実の言葉を聞いて、律は「え……？」と声を漏らした。望実の言った事が本当だとすると、四人は律を、早くから待っていたという事になる。
「皆、お前と話したかったからな。待ち伏せしてたんだよ、今日も昨日も」
信二の言葉に、律は再び目を丸くした。今日だけでなく、昨日も待っていてくれていたのかと、驚きを隠せなかった。
最後に、真琴が緊張した様子を見せつつ律に話しかけた。
「……昨日はごめんね！　いきなり変なこと聞いちゃって。それに……あんなに四人で固まってたら、和に入りにくかったよね。えーと、あとは……」
頭を下げて謝罪をする真琴に対して、悠輔が「そこまで！」と止めた。
「まあまあ。相原さんは藤本待ち伏せ作戦を提案しただけで十分だよ。四人で固まりすぎたのは、僕達も悪かった訳だし……」
律は目を大きく開け、真琴を見た。一見すると控えめそうな真琴が、自分のために一番早く行動したと言うのだから。
真琴達は彼女の言うとおり、ただ自分と仲良くしようとしていただけだった。それを、「自分のテリトリーに勝手に踏み込んできた」といった勘違いで四人を拒否したのだ。律は、自分を恥ずかしいと感じた。
今度は、自分の番だ。そう思った律は、勇気を振り絞って真琴達に歩み寄っていく。一人分空いてたスペースは埋まり、五人の輪が出来た。

「確か……チケットが何枚売れたか、の話……だったよな」
四人は驚いたように律を見る。今まで自分からは話しかけてこなかった者が口を開いているのだから、当たり前だと、律は思った。
「オレは、今のところ、母さんくらいにしか売ってない。でも……まだ行く所がある」
四人は「行く所？」と声を揃えて尋ねた。
「うん……オレの、母校に！」
気付いたら、自然と微笑んでいた。律を見て、真琴、望実、悠輔、信二も笑顔になる。
五人が初めてまとまった瞬間だった。

0　訊かないで

水曜日の昼休み。教室で弁当を食べている時に突然、友達の青木香奈が聞いてきた。

「そういえば……虹高（にじこう）の吹部って、どうして五月なのかな～」

真琴は「え？」と聞き返す。香奈は再び言い直した。

「いや、今度の虹高の吹部の定演で、三年生が引退するんでしょ？何でこんな早い時期に引退するんだろうって思って。私の出身中学の吹部は、確か八月に引退してたから……」

「……確かに」

コントラバスの練習で手一杯だったため、今までそんな事は考えていなかった。一回疑問に思うと、かなり気になってくる。

「吹奏楽コンクールの時に引退してもよさそうなのに」

真琴の言葉に、香奈も「うんうん」とうなずいた。

いくら受験があるとはいっても、夏休みから勉強すれば間に合うのではないかと、そんな事も考える。後で、その考えは甘いという事を知るのであるが。

香奈は首を傾げながら、再び疑問を口に出した。

「定演の方がいい理由とかあるのかなぁ……」

二人はしばらく考えたが、全く解らなかった。

「そうだね……わたし、先輩に聞いてみる」

解らない事は、先輩に聞くのが一番であろう。真琴はそう思った。香奈も、「それがいいね」とばかりにうなづく。

「解ったら、教えてね！」「うん！」

これで、定演の話はひとまず終わったはずだった。……しかし、すぐに香奈は何かを思い出したように、「あっ！」と声を出したのである。

「なっ、何？」

いきなり声を出すので、真琴は思わず固まった。

「今の話で思い出したんだけど……私、まだチケットもらってないよ？」
「……あっ、そういえば！　ごめんね！　今渡すから」
せっかく定演に来てくれるというのに、チケットを渡すのをすっかり忘れていた。真琴は、机の横に掛けてあるスクールカバンを取り、中をがさごそと探り始める。
香奈は真琴をじっくりと見ながら、さらに話しかけた。
「ねぇねぇ」
「何〜？」
「真琴ちゃんは、結局お父さんとお母さんにはあげないの？　前にも、親には渡せなさそうって言ってたけど」
真琴は一瞬、動きをぴたっと止めた。頭の中で、香奈の言葉を繰り返す。

――お父さんとお母さんにはあげないの？――

教室のざわめきが大きくなった気がした。
「……うーん、そういう事になるね〜」
実にあっさりと答えた真琴は、それだけ言うと再び、スクールカバンの中に手を突っ込んだ。
「……でも！　ダメ元でも誘ってみれば、もしかしたら来てくれる……」
「はい、これ」
真琴は香奈の言葉を遮り、チケットを渡した。
「渡すの、遅れちゃってごめんね？」
「あ、ありがとう。それは大丈夫だけど……」
真琴はまた香奈の声を遮り、香奈から目をそらしてこうつぶやいた。
「両親のことなら、別にいいんだ」
「え……？」

香奈は思わず、声を漏らした。真琴は改めて香奈の方を向きなおし、微笑みながら言う。
「ほら、大人料金って、五百円もするじゃん。高いでしょう？　親に千円も払わせるのは悪いから、今回は誘うの辞めたの」
「そうなんだ……」
香奈はまだ納得していなさそうだった。真琴は、さらに理由を話す。
「それに、初心者の一年は出番少ないから、値段が割に合わないでしょう？　だから今年はやめ！　来年は、ちゃんと、誘うよ」
「そっか……それならしょうがないね」
香奈はようやく納得したようであった。真琴に向かって「弁当、片付けてくるね！」と言うと、自分の席に戻っていく。
真琴は香奈を見送ってから、安心したように、静かにため息をついた。

1　一年生と三年生（前書き）

更新、遅れてすみませんでした！

1　一年生と三年生

肩までかかる髪を揺らしながら、急いで校舎南口から東へ向かい、渡り廊下を突き抜ける。部室を横切ってさらにまっすぐ行くと、ボン、ボン、と響く低音が聞こえてきた。

音は大きくなっていく。と同時に、青いトタンの屋根が見えた。もともと速めだった真琴の脚が、さらに速まる。はぁ、はぁと息を切らしながら、扉が開いている倉庫へ一直線に走っていった。

「遅れてすみません！」

声を上げながら中へと滑り込む。目の前には、弦を弾く手を止めて扉のある方を振り向く智貴。

「教室の掃除が……思ったより……遅くなって……」

胸に手を当てて苦しそうに話す真琴に、智貴は冷静に「落ち着いて、深呼吸して」と促した。真琴はすぐにスー、ハーと息を吸い始める。

「……落ち着いたか？」

しばらく経った後、智貴が改めて尋ねた。

「……もう、大丈夫です」

「なら、よかった。じゃあ、とりあえずカバンを置こうか」

真琴はすぐ近くにあった椅子に、茶色のスクールバッグをそっと置く。そして、急いでコントラバスをソフトケースから出す。その途中で、ある事に気がついた。さっそく智貴に尋ねる。

「すいません。あの、治美先輩は……？」

「あいつなら、課題曲の合奏に行ったよ」

「そうですか……って、先輩は出ないんですか？」

とっさに、新たに湧いた疑問を口にした。

「あれ、言わなかったっけな……。課題曲は二年生全員と経験者の一年、あとは足りないパートの三年だけで出るんだよ。コンバスはあいつだけで大丈夫だから」

そうだったかと、真琴は今更ながら思った。前に悠輔から聞いた気がするが、いまいち覚えていなかった。
「だから、オレは次の合奏まで自主連。君は、基礎練習と二曲の練習をお願い」
言い終わると、智貴は譜面台に掛けてあった弓を取り、楽器を構え直し、春のように穏やかな音を弾き始めた。
その音を聞いた一瞬のうちに、真琴は、智貴が弾いている曲が分かった。――吹奏楽オリジナル曲の『ヴィヴァ・ムジカ』だ。この曲を三年生全員で合奏するのを、倉庫の中で練習している時に何度か聞いていたから。
しばらくすると、智貴は一瞬で弓を小指に引っ掛けて軽く握り、人差し指と中指で弦を弾き始めた。
（すごい……！）
素早く弓を持ち替えるなんて、真琴にはまだ出来ない。智貴はそれを、いとも簡単にやったのだ。
真琴が感心している間に、曲は進んでいた。今まで春のように明るかった音が、落ち着いた響きへと変わる。
アルフレッド・リードという人が作曲した『ヴィヴァ・ムジカ』は、「音楽万才」という意味らしい。全体的に明るく、華やかに歌い上げられる。だが、この曲には所々静かな部分もあって、真琴はその部分が好きだった。
曲が終わった。智貴は「ふぅ」と、肩の力を抜くようにため息をする。とその時、智貴がふと気付いたようにして真琴の方を見る。
「あれ、練習は……」
「……あっ！　す、すいません」
智貴の音に耳をそばだてていたら、いつの間にか自分が弾くのを忘れていた。
「いや、別にいいよ。じゃあ、今度こそ練習しよう」
思ったよりも注意されなかったので、真琴はひと安心する。
「はい！」

返事した後、真琴は急いで弓に松ヤニをつけ、チューニング（音の調整）を始めた。

真琴がしばらく基礎練習をしていると、後ろの方から別の曲が聞こえてきた。

（この曲は、確か……）

どこか重厚で、古の伝説を想わせるような音色。この曲は、『ヴィヴァ・ムジカ』以上に何度も聞いた。きっと、今回の定期演奏会において重要な曲に違いない。

耳を傾けようとした時、さっき智貴が言った事を思い出した。いけない、練習に戻らなければと思い、再び集中して弦を弾く。

まだあまり弾けていない『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』の練習に移ろうとした数分後。落ち着いた音からいきなり、荒い音に変わった。真琴は後ろを素早く振り向く。

智貴は弓をふんだんに使い、同じ音（たぶんラの音）を三拍子に弾いていた。一拍目は強く、二拍、三拍は弱く。音量は全体的に大きめ。そして、攻撃的な音色。穏やかな場面ではない事はすぐに分かった。

いったん曲が止まった。しかし、智貴は大きく息を吸い、再び強く弾き始める。すると、今まで以上に重厚で、なおかつ暗い音が倉庫中に響き渡った。その音を聞いた瞬間、真琴は思わず身震いした。

暗さの中にある悲しみ、哀しみ。ここだけが、強く印象に残っていた。理由は解らないが、真琴はこの部分を聞くといつも泣きそうになる。

智貴が力強く弾く。自分との実力差を実感しながら、真琴はしばらく智貴の後ろ姿を見つめていた。

智貴が弾き終わった後も、真琴はただ茫然としていた。しばらくして、真琴の目の前に大きな手が現れる。

「大丈夫か～？」

手を振りながら、真琴をしげしげと見る智貴。真琴ははっと気付く。
「あ……」
そういえば、注意されたのにもかかわらずまた練習するのを忘れ、智貴の音を聴くのに夢中になってしまった。
「すいません……」
恐る恐る智貴の顔色を窺いながら、真琴は小さくつぶやく。
「すごく上手いから、つい聴きすぎちゃって……」
「……本当、か？」
そう尋ねる智貴の顔は、どことなく赤くなっているように見えた。
「はい！　さすが先輩だと思いました」
「……ありがとう」
真琴の返事を聞き、ますます赤くなる智貴の顔。真琴は智貴の様子を見て、ひそかに（意外と照れ屋なのかな）と感じた。
しばらく智貴の様子を見て、真琴は不意に口にする。
「先輩、あの」
智貴は「どうした？」と言わんばかりに真琴を見た。
「わたしも……先輩みたいになれますか？」
智貴は驚いたように目を丸くする。真琴はさらに続けた。
「先輩、初心者から始めたんですよね？　なのにこんなに上手くて……」
弓と指を使いこなし、いくつもの音色を出して曲を弾く後ろ姿が、非常にまぶしく感じられた。どれも、今の自分には出来ない事だから。
「わたし、すごい不器用なのに、これから大丈夫かなって……」
「はい、ここまで」
智貴は真琴の話を遮った。
「逆に訊くけど」
真琴は「何ですか？」と言いながら首を傾げる。
「……相原は、最初からコンバスを希望したんだよな。どうしてだ

？」
思わぬ質問。真琴は仮入部の時を思い出しながら、ぽつりぽつりと話し始めた。
「コントラバスが、気になったからです。もっと言うと、音に惹かれたから」
智貴は「どんな音に？」と問い直す。
「音量は小さいけど、優しい低音です。あと……」
「あと？」
「……『響き』です。周りに大きく広がるような」
ここまで言って、真琴はいきなり体温が上がった気がした。変な事を言ってないか心配になったからだ。
智貴は何か考えるように口に手を当てる。そして、ふと微笑んだ。
「そんなにコンバスが好きなら、大丈夫」
真琴は一瞬、何を言われているのか解らなかった。そして、「え……？」と声を漏らす。
「好きという気持ちがあれば、楽器を続けていられるから。技術とかはいずれ上達するから。今は、出来る限りの事をすればいい」
智貴はさらに、こんな事を言ってきた。
「一年生は、まだいっぱい、時間があるから……」
真琴ははっとし、智貴に何か言おうとする。だが、智貴がどこか寂しそうな顔をしていたので、一瞬開きかけた口を閉じた。倉庫に沈黙が流れる。
しばらくして、真琴は静かに、「ありがとうございます」と伝え、懸命にお辞儀をした。そして練習を再開する。今まで以上に気合いが入っていた。
智貴は真琴のそんな様子を見て、再び微笑んだ。

2　先輩には聞けない

「三年生全員が入り終わったら合図を出すから、音量を下げてな。分かったか？」

「はい！」

葉山（はやま）　明仁（あきひと）――虹西高校吹奏楽部顧問――の声がホール中に響いた。明仁の指示に対し、一、二年生全員が大きな返事をする。定期演奏会まで後一週間だから、皆いつも以上に気合いが入っている。

駅から徒歩十分、また、虹西高校から徒歩十五分程で行ける、「神奈川やまゆりホール」。虹西高校吹奏楽部は、定期演奏会をする場所でもあるこのホールで、全曲のリハーサルをしていた。

ホールでは、普段よりも自分の音が聴こえやすい。真琴はますます、（もっと上手く弾かなきゃ）と思い、気を引き締めた。

「じゃあ、音量の事を踏まえながら全部通すぞ」

真琴達が、真剣な目を自分に向けたのを確認してから、明仁は腕を振り上げた。

十二時ちょっと過ぎた頃に、三年生を送り出す曲『オレンジ』のリハーサルが終わった。明仁が指示を出す。

「休憩！　昼食をしっかり取れよー。前日に配られたプリントを見たら分かると思うから、午後からはプリントを見ながら各自行動するように！　後、午後から二、三年生中心の曲をやるから、一年生は自分の楽器と譜面台をロビーに持っていけよー」

明仁が話終わった後、部員達は「はい！」と返事をし、思い思いに動き始める。

真琴が急いでコントラバスを両手で持っていこうとした時、望実が声をかけてきた。

「大丈夫？　譜面台持とうか？」

真琴は目を丸くし、一呼吸置いて「いいの？」と口にした。

コントラバスは、基本的には両手で持ち運ぶため、譜面台を置いていく事が少なくない。コントラバスを片手で持ち、片手で譜面台を持つ事も出来るが、その分不安定な運び方になってしまう。下手したら落としてしまうため、コントラバスを持つ事に慣れてない人が片手で持つのは危ない。

初心者である真琴は、先にコントラバスをロビーに運び、その後に譜面台を取りに行くつもりだった。正直面倒くさいと思っていたので、望実の言葉はありがたかった。

「……じゃあ、お願いしようかな」

「まかせてよ！」

望実は真琴の譜面台をひょいっと持ち上げ、真琴の隣を歩いていく。そして、再び口を開いた。

「ねぇ、三人にはもう言ってあるけど……今日はバスパート一年で昼ごはん食べるよ！」

「え？」

「食べながら話し合いすんの！　……先輩達の引退祝いのプレゼントをどうするか」

「引退」。その言葉に、真琴の胸がどくんと鳴った。人からその事実を聞かされると、改めて動揺してしまう。

「……あの、さ」

不意に言葉が出てきた。望実もきっと分からないだろうとは思っても、聞かずにはいられなかった。

「何？」

「どうして虹西の吹部は……こんなに早く引退しちゃうんだろうね？」

望実は、元々大きい目をさらに開いた。真琴は更に続ける。

「別に引退するの、コンクールの時でもいいのに……それに、周りの高校は、もっと遅いのに……何か知ってる？」

望実は「うーん……」と唸った。そして、「ごめん、分かんないや。周りの高校より早く引退する理由」と、真琴が思った通りの答

えを口にした。
「先輩には聞かないの？　何か知ってそうじゃん」
「治美先輩には聞いたけど、『知らないなぁ』って……」
治美は、真琴にその事を聞かれるまで、特に疑問には思わなかったと言う。その事を望実に話したら、望実は「あの先輩、あまりそういう事を気にしなさそうだもんね～」と応えた。
「じゃあさ、原田先輩には聞いてないの？」
心臓が再び、どくんと鳴った。真琴は望実から目を反らす。その後、言いにくそうに声を出した。
「先輩には……聞けない」
望実はすぐに「何でよ？」と尋ねる。
「何となく……ね」

――一年生は、まだいっぱい時間があるから――

あの時の智貴の言葉を聞いて、そしてどこか憂いを含んだ微笑を見て以来、智貴には「引退」について何も尋ねられないでいる。
望実は何か言おうとした……その時。ロビーの方から低い声が聞こえた。
「おーい、中途半端な所で止まって、二人して何やってんだよ？」
低い声の主である信二は、言いながら大股で二人の方まで歩いてくる。
真琴と望実ははっとした。話に夢中になっていて、いつの間にか足が止まっていたのだ。望実がきっぱりと応える。
「ごめーん！　話してたら、あんた達の事すっかり忘れてた！」
「何だよそれ……まあいいや、早く飯食べようぜ。腹減った」
信二が再び大股でロビーの方へ歩いていく。真琴と望実は慌てて信二に着いていった。

ロビーに着くと、他の部員は既に昼食を食べ始めていた。その中

で、まだ食べていない二人の男子――悠輔と律――が隅で静かに座っていた。
「おい、連れてきたぞ」
信二が声を出すや否や、二人は同時に顔を上げる。
「やったね！　これでやっと食べられるよ～。ねっ、藤本！」
心底嬉しそうな顔をして、律に話しかける悠輔。いい笑顔をしている。
「だな……」
必要最低限の答え方をする律。だが、その言葉には、最大限の喜びの感情が溢れ出ていた。悠輔程あからさまでは無いが、黒ぶち眼鏡の奥で、小さな目が輝いている。
その様子を見て、真琴が望実にコソコソと話しかけた。
「……なんか、忘れてて申し訳ないって気分になるね」
「確かに……」
純粋に喜んでいる二人の前では、（先に食べれば良かったのに）というツッコミは出来ない……と、真琴と望実は思ったのであった。
「二人とも……早く楽器と譜面台を置いて、弁当用意しろ」
若干ひきつった顔をしながら、信二が真琴と望実に指示をする。
「そうね……真琴、早く行こ！」
「う、うん」
二人は悠輔と律のために、急いでコントラバスと譜面台を置きに行った。

二人のカバンがある所の近くで、真琴は自分よりも大きいそれを静かに置いた。直後、望実が再び話しかける。
「真琴、どうせなら男子三人にも聞いてみようよ。何か分かるかもだし！」
真琴は「うん」と頷いた。虹西高校の近くの中学校に通っていたという律あたりなら、もしかしたら知ってるかもしれない。そう考えたからだ。

「あっ、あと、さっきも聞きたかったんだけどさ！」
「ん、何？」
真琴は（もしかして……）と思いながらも、平静を装って応える。
「真琴、原田先輩に聞かない訳って」
「ただ、聞きづらいからだよ。それだけ」
真琴はあくまで当たり障りの無い答え方をした。「聞きづらい」というのは、一応本当の事である。それに「あの時」の事は、何となく言いたくなかった。
望実はまだ何か聞きたそうだったが、諦めたように「分かった」と口にした。
「二人とも、早くこっちに来なよ～！」
声のする方を振り向く。悠輔は大きく、律はさりげなく手を招いていた。
真琴と望実は二人を見て「ちょっと待ってて」と同時に言う。そして、急いで自分のカバンを持って、三人のいる所へ走っていった。

2　先輩には聞けない（後書き）

まさかの二ヶ月間更新放置……ごめんなさい！これから二ヶ月、更に忙しくなりますが、少なくともここまでの長期間放置はしないように……頑張ります。

3　進学校だから？

ロビー中に敷き詰められたワインレッドの絨毯の上で、輪になって昼食を食べ始めてから十五分後。五人とも昼食を食べ終わりそうだという時に、望実が口を開いた。

「ねぇ。あんた達にちょっと聞きたいんだけど」

悠輔、信二、律は「何？」と言いながら望実を見た。望実は一度、真琴に目配せをする。真琴が静かに頷くと、望実は改めて三人の方を向いて尋ねた。

「さっき、真琴と話してたんだけど、虹西の吹部は何でこんな中途半端な時期に引退するか、知ってる？」

三人は「うーん……」と唸り始める。その様子を見ると、三人とも知らないようだ。真琴は少しだけ残念に思った。

「……そうだよな。七海市の高校の多くは十一月に引退するって事を考えると、虹西はすごく早い」

最初に口を開いたのは信二だった。信二はさらに続ける。

「俺が最初に志望していた七海高校も、十一月に定演をやって引退するって聞いたし」

信二の言葉に、望実が「えっ！　志望校、ナナコウだったの！？」と返した。

「十二月まではな。……そういえば」

信二は眉を寄せる。

「俺の出身中学の吹部は、コンクールが終わった直後に引退だったな……確か」

そう言った後、信二は何故か苦笑いをした。真琴はそんな信二を見て、（何かあったのかな……）と思う。

すっかり黙りこんだ信二の後を引き継いで、悠輔が話し出した。

「僕達の住んでいる地域は、七、八月のコンクールで引退って所が多いらしいね～。愛媛でも、僕の住んでいた地域の中学は八月が多

かったよ」
　しかしその直後、悠輔は何かを思い出したようで、口に手を当てながら話を続けた。
「でも……あの中学はもっと遅かったような気がしたなぁ。他の中学に比べてレベル高かったし。……島根の方はどうだったっけ？今度あいつに聞いてみようかな」
　悠輔は悠輔で、愛媛や島根に交友関係があるようだった。真琴は、思った通り、悠輔は友達が多いのだなと考える。もっとも、真琴にも愛媛に友達がいるのだが。
　考えたすぐ後に、真琴は左隣に座っている律を見た。律は黙ってうつむいている。何かを考えているようだ。
　真琴は思い切って、律に尋ねてみた。
「藤本君は何か分かる？」
　律はぱっと顔を上げた。そして、恥ずかしそうにしながらおずおずと話す。
「分かるかって言ったら微妙だけど……考えはある」
　「考え」という言葉を聞いて、信二と悠輔が大きく身を乗りだし、叫んだ。
「それは本当か！？」
　周りの部員が真琴達五人の方を振り向く。真琴は（恥ずかしい……）と思って顔を赤らめたが、二人は周りが見えていないらしく、あまり気にする様子は無かった。
「その考え、詳しく聞かせてよ！」
　望実は、二人よりは小さめな声で律に話しかける。大きなつり目を輝かせ、興味津々といった様子だ。
　律は信二、悠輔、望実の視線に気圧されたように、上半身をのけぞらせる。だが数十秒後、背筋を伸ばして、真琴達の方を向き直ると、静かに話し始めた。
「オレは……理由の一つに、虹西が進学校だからっていうのがあると思うけど」

真琴は（なるほど！）と思った。
「進学校って、特に文化部なんかは、部活を引退する時期が比較的早い気がする……受験勉強忙しいだろうし」
望実、悠輔は律に同意するように、首を縦に大きく振る。
「確かにそうかもね～。勉強に集中するから早く引退するっていうのはありえそうだよ！」
悠輔はかなり納得した様子だ。望実も「絶対そうよ！」と肯定的である。
そんな中、信二だけが再び「うーん……」と唸っていた。真琴は気になって、信二に尋ねる。
「永瀬君、どうしたの？」
「いや……進学校の吹部でも、やっぱ例外はあるよな……って思ってさ」
律がすぐに「例外って？」と尋ねる。
「また、七海市の高校の話に戻っちゃうけど。風見台高校って知ってるか？」
真琴、悠輔はきょとんとした表情をして首を傾げたが、望実と律は知っているという反応を示した。
「あたし、知ってる！　確か私立高校だよね！」
「去年、吹奏楽部が関東大会で金賞取ってたっけ……」
「その通り！　……あー、二人は知らなくても無理ないよな。相原さんは中学時代吹奏楽やってなかったし、鈴木は愛媛に住んでたし」
信二は一呼吸置いて、四人に説明を始めた。
「私立風見台高校は、七海市内でトップレベルの成績。国公立大や難関私立への進学がほとんどの、バリバリの進学校」
四人が「うんうん」と同時に頷く。
「だから、勉強がかなり忙しいらしいけど……でも、吹奏楽部の引退、かなり遅かったぞ。確か、十一月末だった」
「それ、ホント！？」
望実は明らかに驚いた様子である。真琴も、今の話を聞いて、信

じられない気持ちだった。
十一月、十二月といったら、一月から始まる一般受験に向けての追い込みの時期。センター試験や二次試験を受ける者は、部活を続けるのが難しいはずだ。なのに、風見台高校の吹奏楽部は、十一月まで部活を続けていたと言うのである。吹奏楽部の忙しさは身をもって体験しているので、余計に驚きを感じた。
四人はしばらく、開いた口がふさがらなかった。周りの部員のたわいもない話し声が、真琴の耳に入ってくる。
何秒か経った後、悠輔が言いにくそうに信二に尋ねた。
「その……定期演奏会は、成功したの？　勉強と部活、どっちも中途半端になりそうだけど」
「みんな、推薦で大学合格したとか……？」
律もまた言いにくそうに、ぼそぼそと話す。
「推薦で合格した人もいるけど、一般で合格した人も普通にいるって。あと、定期演奏会は俺も聴いたけど、大成功だった」
信二の答えに、四人は絶句する。周りのざわめきが、いっそう大きくなった気がした。
部活をぎりぎりまでやるのに、一般試験で大学合格。この事実の前では、「進学校だから引退を早くする」という理由はあまり意味を持たないのではないかと、全員が思った。
結局五人は、「虹西吹部が早く引退する理由」を他に見つけられないまま、一端解散する事になったのである。

4　理由は……

解散した後。真琴はロビー端のソファーに座り、ホール練習の予定が書かれたプリントを読んでいた。初心者の一年生である真琴の午後からの予定は、昼食後、一時半から自主練習。三時からポップスの合奏……となっている。

今は一時過ぎたところだ。練習再開まで、まだ結構時間がある。真琴は、これからしばらくどうしようか……と悩んだ。

練習を始めるには早すぎる気がする。まだ昼食を終えていない、またはお話をしている部員がいるので、今から音だしをして、昼食や会話の邪魔になるのは避けたかった。だが、他にやる事も無い。

（先輩達は、どうしてるんだろう？）

真琴はソファーから立ち上がり、辺りを見渡した。智貴と治美を何とか見つけようと、目を凝らす。

治美の姿はどこにも無かった。きっと、どこかへ出かけてしまったのだろう。次に智貴を見つけ出そうとして、更に目を凝らした。しかし、どんなに探しても、智貴の姿は見えない。

（これは……諦めるしかないか～）

捜索を止め、再びソファーに座ろうとした……ちょうどその時だった。部員の喋り声の中に混じって、上の方から音が聞こえてきた。

（この音は、もしかして……）

力強い低音。それで、管楽器ではない音。……コントラバスの音だ。

治美が弾いているのではないと、真琴はすぐに判った。治美の音は、もう少し丁寧で綺麗なのである。荒々しくも豪快なこの音を弾くのは、智貴しかいない。確信した真琴は、微（かす）かな音を頼りに、座っている沢山の部員を避けながら、智貴のいる所を目指した。

耳をすまし、音を聴きながら、部員を踏まないように注意して歩く。そうしているうちに、二階へ続く横幅の広い階段の前まで来た。

（二階で弾いてる……？）
真琴はゆっくりと、ワインレッドの絨毯が敷かれた階段を上っていく。二階に近づくにつれ、音は次第に大きくなっていった。
あと少しで二階ロビーに着く……という所で、コントラバスを弾いている智貴の姿が見えた。思わず、真琴の足が止まる。
集中して、「ヴィヴァ・ムジカ！」を何度も練習している智貴。夢中になって弾いている時に話しかける事は出来ないと、真琴は思った。
後ろを振り返ってそっと階段を降り、踊り場まで戻る。階段の二段目に腰を掛け、頬杖をついた。これからどうしようかと、再び悩む。
「……それにしても」
自然と声が出た。
「何で、二階で練習してるんだろう？　ホールで練習してもいいのに」
そんな疑問に対して、男性が答える。
「多分、二階の方が自分の音を聴きやすいからじゃないかな？」
真琴は素早く、声が聞こえた左側を向く。そこには、「よっ！」と挨拶をしながら手を振る和樹と、和樹の後ろに立って控えめに微笑んでいる美雪がいた。

二人が階段に並んで座った後、和樹と美雪に一連の事情を話した。真琴の右隣に座る美雪は、納得したように頷く。
「なるほどねー、ロビーじゃ練習しにくいか～」
「部員がいっぱいいるから、弾く場所にも困るしね」
美雪の隣にいる和樹も真琴に同調するように、腕を組んで首を縦に二回振った。
「だから、先輩達は何をしているのかなって思って捜してみたんですけど……」
「田中ちゃんは行方不明、原っちは、凄まじいオーラを放っていて

話し掛けづらい……と」
和樹がとんちんかんな事を言うので、美雪が「和樹。真琴ちゃんの話、ちゃんと聞いてた？」と苦笑いしながら尋ねた。
「冗談だって！　……ところで真琴ちゃん」
真琴は「はい？」と返事をした。
「うちの部が何でこんな時期に引退するか、調べてるの？」
真琴は目を丸くした。和樹達には、この事を話していない。なのに、どうして知っているのかと、不思議に思った。
「真琴ちゃん、ごめんね？　さっきの話、つい聞いちゃったの」
申し訳なさそうな顔をする美雪。
「話って、もしかして……わたし達五人が話してた……？」
「そう。いきなり大声が聞こえた時からかな？　なんか興味深い事を話していたから、和樹と二人でそば耳だててていたの」
やはり信二と悠輔が叫んだ時だった。この調子だと、他にも自分達の話を聞いた部員がいるかもしれない……と、真琴は思った。
「で、その事について言いたいことがあるんだ」
和樹が真剣な目で、真琴を見る。真琴は心臓が高鳴っていくのを感じた。
「僕達は、うちの部がこの時期に引退する理由、知ってるよ」
「それって、本当ですか！？」
香奈に言われてからずっと疑問に思っていた、虹西吹部の引退理由。やっと知る事が出来る。真琴は胸の高まりが抑えきれず、つい叫んでいた。
「ぜひ……ぜひ、教えてください！」
和樹と美雪は微笑みながら真琴の方を向き、同時に頷いた。

「伝説のアイルランド」を弾く智貴の音が聞こえる中、美雪がおもむろに口を開いた。
「実はね……虹西は昔、吹奏楽コンクールが終わった後に、一応引退していたらしいの」

真琴は驚き、美雪を見つめた。そして、新たに浮かんだ疑問を口にする。
「定演は、いつやっていたんですか？」
「三月ね」
素早く答える美雪。和樹が更に続ける。
「つまり、三年は吹コンで仮引退して、進路が決まったらまた部活に参加する。そして、三月末の定演で本当に引退なんだ」
「そうだったんですか……」
「最初は三月で良かったんだけど、だんだんそうもいかなくなったのよね」
美雪の言葉に、真琴は「えっ！？」と叫んだ。二人は説明を始める。
昔の虹西高校の生徒は、国公立大合格者は少数で、私立大学合格者が八割を占めていたらしい。よって、三月上旬までに進路が決まる生徒が圧倒的に多かったため、三月末の定演には間に合っていたと言う。
しかし、約十数年前。国公立大を志望しても、なかなか合格出来ない生徒がいるという現状を変えるため、校長を始めとする当時の先生達が、授業カリキュラムに大改革を施した。結果、国公立大学に合格する生徒が順調に増えていった。そして今では、虹西高校は国公立大に合格する生徒の方が多い進学校になっている。
「国公立って、後期だと三月末までかかるでしょう？　だから、後期を受けていて、定演に満足に出られない部員が増えちゃったの」
「それで、定演をする時期を変えようって話になったんだよ」
美雪と和樹の説明に、真琴は「なるほど……」とつぶやいた。
この間の進路ガイダンスで聞いたが、私立大の合否は二月で決まる所が多い。それに対して、国公立は早くても三月上旬、中、後期になると下旬までかかる（私立でも、三月末までかかる所もあるが）。更に、合格手続きや下宿先探しに時間がかかるとなると、定期演奏会にあまり出られないのも納得だった。

「色々話し合いをして、五月に定演をして引退するって決まったんだ」
真琴はすぐに、「理由は何ですか？」と尋ねた。やっと、知りたい事の核心に来たので、自然と気持ちが高ぶる。
「理由は、二つ」
美雪が静かに話し始めた。
「まず一つは、カリキュラムが変わって、受験対策で忙しくなったから」
美雪によると、虹西高校は九月から、放課後に講義が入るという。三年生も本格的に受験モードになり、学校で最後まで残って勉強する生徒が増えるようだ。
「講義が入ると、満足に部活に出られないから……。推薦を受ける生徒は、準備でもっと忙しいしね。部活と勉強、どっちも中途半端になる可能性があるから、それなら後期にやるのは止めよう、って事になったのよね」
和樹は、美雪に同意するように頷き、それから口を開いた。
「一月と二月は、受験期だから論外。八月にやるのも、美雪が言ったのと同じ理由でボツになったんだよ。八月は夏期講習が所々入るからね～。吹コン終わった後の短い期間に、十数曲もの仕上げをするの、大変だし」
夏期講習中は、三年生は部活に出られないため、吹奏楽コンクールが終わった後の練習期間は実質十日程度。十日で沢山の曲を仕上げるのは、やはり難しいらしい。
それに、夏休みは受験の天王山でもある。受験生にとって、大事な時期だ。だから、八月も勉強に集中したいという意見があったという。そんな考えが多い中で無理やり定期演奏会をしても、結局は中途半端に終わってしまうだろうという事で、八月に開催するという意見も没になったらしい。
「七月に吹コンが始まるから、六、七月は吹コンの練習に集中しなきゃいけなくなっちゃう。だから、五月末に定演をするって決まっ

たの」
　かなり早い時期とはいえ、五月末が一番定期演奏会に集中出来るという意見が多く、それが決め手になった……と、美雪は説明した。
「やるからには、中途半端な気持ちで、テキトーな演奏をしたくない。来てくれたお客さんに失礼だからね！」
　そう話した和樹は、真剣でまっすぐな目をしていた。そんな和樹を、美雪は微笑ましそうに見つめる。
　しばらくして、美雪がはっと気付いたような表情をした。真琴の方をくるっと向き直し、再び説明を始める。
「二つ目の理由はね……皆、吹コンで引退するより、定演で引退したかったからなの」
　吹奏楽コンクールでは、演奏する場は厳粛な雰囲気が漂う。
　緊張感のある雰囲気も嫌いではない。だが、虹西高校吹奏楽部員は、自分達だけの舞台で、観客を巻き込みながら、沢山楽しんで引退したい……という考えを持っていた。
「やっぱり、思いっきり吹いたな～！　て言って引退したいからね。私もそう思ってるし」
　美雪がとびっきりの笑顔で話した。和樹も微笑んで「そうだね」と同意する。
「でも、八月以降は、さっき言った理由で定演が出来ないでしょう？　五月の定演で早く引退するか、他校と同じように、吹奏楽コンクールで引退するかでかなり悩んだらしいけど……」
「やっぱり定演で引退したいから、最終的には五月末で引退って事に決定したんだってさ！　ちなみに、当時の部員全員がそれに賛成したっていうから、驚きだよね～」
　美雪と和樹は説明し終わると、和やかな顔をして、満足した様子を見せた。二人を見て、真琴も穏やかな気持ちになっていく。
　虹西高校吹奏楽部の経緯を知った後は、他校の引退時期と虹西高校の引退時期の違いは、全く気にならなくなった。他校には他校の考えがあって、引退の時期を決めているのだろう。そして、虹西高

校には虹西高校の考えがあって、早く引退すると決めたのだ。真琴は、その事に今気付いた。

微笑んでいる和樹と美雪をもう一度見る。引退まで頑張ろう……という気持ちが、改めて芽生えた。

5　謎が増える

リハーサルから二日後の火曜日。青々しい空の下で、真琴が倉庫の扉を開けて中に入っていった。

「こんにちは！」

元気よく挨拶をする。治美と智貴がコントラバスを弾く手を止め、真琴の方を見た。

「真琴ちゃん、こんにちは～！」

笑顔になって手を振る治美。親しみやすい雰囲気が漂う彼女に、真琴はいつも安心感を覚える。

「こんにちは」

静かに話す智貴。言葉は短いながらも、優しげな瞳で真琴を見て小さく手を降っている。一見、クールな印象で感情を表に出さなそうな智貴だが、意外と感情表現が豊かだと、真琴は思っていた。

「真琴ちゃん。今日はあたしたち、四時半から合奏に行くから！ポップスの合奏は五時半からだから、真琴ちゃんはその頃に来てね～」

「あっ、はい！」

真琴が返事をすると、治美は笑顔で頷いた。そして、コントラバスをソフトケースの中に入れ始める。

「先輩。あたし、先に虹館に行ってますから、先輩も早く来てくださいね！」

智貴に向かって言った後、治美はいつの間にかケースに入れ終わっていたコントラバスを持ち、早足で倉庫を出て行った。

治美を見送った後、真琴は何気なく智貴を見た。智貴も真琴の視線に気付いたように、真琴の方を振り向く。

「……オレの顔に、なんか付いてる？」

真琴は慌てて「いえ、何も付いてません！」と返した。素早く智貴から視線を戻し、コントラバスをケースから取り出す。

真琴はコントラバスを出しながら、もう一度静かに智貴を見る。その瞬間、日曜日に起こった事が頭の中に思い浮かんだ。

リハーサルの日の昼休み。虹西高校吹奏楽部が早く引退する理由を聞いた後、真琴は和樹と美雪に、再び尋ねていた。

「そういえば……、先輩達は何で、そんなに詳しいんですか？」

和樹と美雪は、きょとんとした表情を見せる。

「だって、虹西高校の歴史をやけに細かく話してたし、吹奏楽部の経緯も隅々まで知っていましたよね？　どうしてそんなに分かっているんですか？」

真琴の疑問に対し、美雪が何かを思い出したように話し出した。

「確か……約三年前の事だったかな？　本当に懐かしいわね～」

「今思えば、すごい偶然だったよね」

和樹も感慨深そうに話す。真琴には、何の話か見えてこない。どこか置いてきぼりにされたような気がした。

「あの……？」

真琴がもう一度訊き直そうとする。しかしその直後、真琴達の後ろから声が聞こえてきた。

「話が盛り上がっている所、悪いんだけど」

三人は目を開き、同時に後ろを振り返る。階段の一番上に、智貴が左手にコントラバスを、右手に譜面台を持って立っていた。和樹が声を上げる。

「原っち！？　いつからそこに？」

「確か、相原が『先輩達は何でそんなに知っているのか？』って聞いたときから。まあ、コンバスを弾いている時から、和樹達三人が話しているのは聞こえていたけど」

真琴は（やっぱり、聞こえていたのか……）と思った。

「で、さっきの話の事だけど……オレも知ってたよ、うちの吹部の引退理由」

真琴は思わず、「えっ！？」と口にした。和樹と美雪も、驚いた

ようにして智貴を見つめる。
「相原、最初にオレに聞けば良かったのに」
真琴は何も言う事が出来ずに、口をつぐんだ。
「んー……まあ、いいや。ちょっとそこ通るよ」
気付けば、真琴、美雪、和樹が階段の横に並んでいて、智貴を通せんぼうしているような形になっていた。三人は急いで踊り場の隅に張り付く。
智貴は「ごめん」と謝りながら、コントラバスと譜面台を持って踊り場を通り過ぎた。その瞬間、真琴の方をちらっと振り向く。何か言いたそうにしていたが、すぐに視線を元に戻して階段を降りていった。
智貴が見えなくなった後、真琴は胸を撫で下ろして呟いた。
「はあ……緊張した～」
真琴は思わず、その場に座り込む。
「……真琴ちゃん。ちょっといい？」
美雪がしゃがんで、真琴に話しかけた。
「はい、何ですか？」
「真琴ちゃんは治美ちゃんにも、虹西吹部の引退の理由を聞いてないの？」
「……いや、治美先輩には聞きました」
「じゃあ何で、原っちには聞かなかったの？　原っちには話しかけにくいとか……？」
「そういうのじゃ、ないです」
美雪が考えた事をすぐに否定した。そして、「ただ……」と口を開く。
「もしかしたら、聞いちゃいけないかもって思ったんです」
真琴は立ち上がり、この前の智貴の様子を話した。望実は智貴とあまり接点が無いので、智貴の様子を話して良いのか迷った。だが、和樹と美雪は智貴と同級生であり、気心の知れた関係である。二人なら、あの時の智貴の事を話しても大丈夫だろう。そう考えたのだ。

「……智貴先輩のどこか哀しそうな顔を見たら、過去に何かあったんじゃないかとか、色々考えちゃって。だから、引退関係の話は出来ないなぁって。考えすぎだとは思うんですけど……」
真琴の話が終わった後、和樹が口に手を当て、何かを考えている素振りを見せた。そして、ゆっくりと口を開く。
「真琴ちゃんが感じた、『過去に何かあったのか』という部分については、当たってるよ」
思わぬ返答。真琴は目を大きく見開いて、和樹を見た。
「原っち、半年前は色々あったのよね」
美雪が意味深な事を口にする。
「そうそう。原っちは昔……って、うわ！」
和樹はいきなり驚いた様子を見せた。
「和樹、どうしたの？」
「あと十五分で、『ヴィヴァ・ムジカ！』の合奏が始まる！」
「えっ、そうなの！？　話に夢中になって、時間をすっかり忘れてた！」
慌て始める和樹と美雪を見て、真琴はただ呆然とする。
「美雪、先にホールに行って、フルートの準備をしなよ！」
「分かった！」
美雪は手を振って「真琴ちゃん、またね！」と言いながら、階段を急ぎ足で降りていった。
「僕も行く前に……真琴ちゃんに少しだけ話すよ」
和樹は、細長い体を真琴と同じ位の高さまでしゃがませて、目線を合わせた。
「原っちは昔、大きな苦労をしたんだ。それは僕達や田中ちゃんも知ってるし、聞かれれば教える事は出来るよ。時間が来ちゃったから、結局話せなかったけどね」
和樹はその後すぐ、「でも」と付け加える。
「この事は本人から聞いた方がいいかもって、今思った。だから真琴ちゃん。今度、原っちに聞いてみなよ」

真琴は視線を下ろし、小さな声で「そんなの、無理ですよ」と呟いた。その事を聞いたら、智貴を苦しめるかもしれない……と思ったからだ。
「大丈夫だよ。原っち、きっと話してくれるから！」
和樹はすくっと立ち上がって、階段を降り始める。そして、もう一度真琴を見て、こう話した。
「原っちは、真琴ちゃんが考えているほど、引退を苦に思ってないよ。むしろ、前向きに捉えてる。だから、勇気を持って話しかけてみて！」
前を振り向いて、和樹は軽快に走っていった。真琴は和樹を見つめる。
和樹が見えなくなった後も、真琴はしばらくその場に佇んだ。

「相原、大丈夫か？」
真琴ははっと気がついた。視線を落とすと、コントラバスを弾く手がすっかり止まっている。慌てて智貴を見た。
「すいません！　わたしったら、また……」
「いや、いいよ」
智貴は真琴を見つめた。（何かを言いたそうだな……）と、真琴は思う。
日曜日の時も、智貴は言いたい事があるような瞳で真琴を見つめていた。今の智貴の目も、二日前に見たそれと同じである。
「先輩。わたしに、伝えたい事がありますか？」
智貴は一瞬、目を丸くした。そして、首をゆっくり縦に振る。
「あのさ……オレ、昔……」
真琴の心臓が大きく鳴った。鼓動がどんどん速くなる。しかし。
「先輩！」
扉を開けながら智貴を呼ぶ治美。真琴と智貴は、同時に扉の方を振り向いた。
「もう、合奏始まってますよ！　早く来てください！」

真琴は、そばに置いていた、白色の携帯電話を手に取る。時間を確認すると、四時半をとうに過ぎていた。
「ごめん！　考え事をしてたら時間を忘れてた。すぐ行くから、先に戻ってて」
治美は「はい！」と返事して、倉庫を出ていった。智貴は素早くコントラバスをケースに入れる。
智貴は、倉庫を出ようとする前に真琴を見た。
「またいつか、話すから……！」
言い終わってすぐに、智貴は倉庫を出て扉を閉めた。真琴は扉の方を見つめたまま、ぼーっと立ち尽くす。
しばらく経った後。練習に戻る前に、独り言をぼそっと呟いた。
「謎、二つも増えちゃったな……」

6　音楽万才

木曜日。大きな謎が残ったまま、二日が過ぎていた。
あの後、何度か智貴、和樹、美雪に訊ねようとした。しかし、和樹と美雪はパートが違うという事もあって、なかなか話しかける機会が無かった。
智貴とも、スケジュールの関係であまり話せない。たまに訊けるような時間があっても、練習に集中している智貴の眼を見ると、練習の邪魔をしてまで訊く事ではないと思って、言い出せなかった。
「結局、このまま分かんないのかも」
真琴の呟きは、倉庫中に広がっていった。よく考えると、二つの謎は、別に急いで知るべきものでもない。なら、忙しい今の時期に尋ねるのは、止めた方がいいのではないかと、真琴は考えていた。
しかし、智貴達三年生が引退したら、ますます接点が無くなってしまうという事は分かっていた。最悪、謎が解決しないまま、智貴達が卒業してしまうという可能性もある。
「それはそれで……仕方ないのかな」
真琴は、軽くため息をついた。そして、曲の練習に戻るため、気を取り直してコントラバスを構え直す。その時だ。
「真琴！」
呼ぶ声が聞こえたと同時に、倉庫の扉が勢いよく開いた。真琴は振り向く。視界に写ったのは望実であった。
右手を胸に当てて、苦しそうに息をする望実。よっぽど急いで走ってきたのだろう。
「望実……ちゃん？　どうしたの？　そんなに急いで」
戸惑い気味の真琴の言葉を遮って、望実はまくし立てた。
「真琴、忘れたの！？　今からクラシックステージのリハーサルだよ！」
「……あ！」

真琴はすっかり、今日の予定を忘れていた。
定期演奏会まであと三日と迫っている。だから、この日からリハーサルを重ねていき、曲の完成度を高めるのだ。
今日は、第一部で演奏する『ヴィヴァ・ムジカ！』等、四曲のリハーサルをする。一年生は、経験者以外第一部には出ないが、観客役として演奏を聴く事になっていた。
「一年で虹館に来てないの、真琴だけだよ？　早く行こ！」
真琴は、冷や汗をかきつつ、首を縦に振る。焦る気持ちを抑えながらコントラバスを置き、弓を緩めた。

虹館の多目的ホールに入ると、望実の言った通り、一年生は全員揃っていた。真琴と望実は静かに歩いて、一番端の椅子にそっと腰かける。
真琴達が座ったのを見計らったかのようにタイミングよく、学生指揮者の男子が指揮棒を上げた。智貴、和樹、美雪達三年生部員が、真剣な表情で一斉に指揮者を見る。
指揮者は、棒を力強く振った。――『ヴィヴァ・ムジカ！』の始まりだ。
ティンパニの勇ましい一発と同時に、トランペットが輝かしく鳴った。その後を追うように、木管楽器の音が上昇していく。音が一番上までいった所で、トランペットと、他の金管楽器も鳴り出した。
しばらく金管と木管のきらびやかなメロディーが続いた後、曲が落ち着いていった。真琴が好きな所だ。クラリネットや、美雪が吹くフルートの音達がなだらかに流れ、その下でコントラバス、チューバなどの低音楽器が静かに支える。
真琴は木管の掛け合いを聞いて、春風を連想していた。木管の涼しく、それでいて暖かい音色は、春が来た事を伝える、優しい風のようだった。もっとも、「音楽万才」という意味の曲を吹いているのだから、この場合、音楽の喜びを伝えるそよ風と言った方が、しっくり来るかもしれない。

低音楽器は、智貴の音を中心として、木管のそよ風に呼応するように弾んでいた。心の奥底で、静かに音楽を楽しみ、また、喜んでいる……真琴には、低音の弾みがそんな風に聞こえていた。
静かな喜びの場面が終わると、今度は金管楽器によって光が加えられた。そしてホルンの、喜びを歌う朗らかなメロディーが始まる。
再び、木管によるそよ風。途中で低音が加わり、木管と共に弾みだす。そしていきなり、トロンボーンなどの金管低音が飛び出し、さらにトランペットと木琴が出て来て、やがて金管と木管が交わっていった。
全員で喜びを歌う。それから、木管に歌が移ると、曲調は太陽のような明るさから、夕暮れのような物淋しい雰囲気へと変わった。しかし、そのすぐ後に、朝日が昇るような、眩しい金管の音が響いていく。
再び鳴る金管のメロディーに、今度は和樹が叩く鉄琴が加わった。喜びが二重に歌い上げられる。和樹が嬉しそうに叩いているのを見て、真琴は気分が高揚していくのを感じた。
曲が終わりに近づくと、全員が高らかに奏で始めた。三年生全員から、音楽を楽しむ、明るい雰囲気が出る。これには、真琴を始めとした観客達が、胸の高鳴りを抑えられなかった。
最後の打ち込みがぴたっと決まった。体の動きを止める指揮者と奏者達。真琴達も思わず、息を潜める。しばらくの沈黙。
指揮者が指揮棒を動かし、奏者達に立ち上がるよう促す。奏者が立つと同時に、割れんばかりの拍手が鳴り響いた。

クラシックステージのリハーサルが終わった後。真琴は、智貴と治美を待ちながら、コントラバスの体を布で拭いていた。
楽器を弾くと、当たり前だが、指紋や汗が付く。それらを放っておくと、水分に弱いコントラバスには、大きなダメージとなる。だから真琴は、丁寧に、優しく拭く。
弦に付いた松ヤニを取り、ソフトケースに入れている途中で、智

貴と治美が倉庫に帰ってきた。
「真琴ちゃん！　ただいま～」
中に入るなり、治美が話しかけてきた。真琴は会釈しながら、治美に「お疲れ様です！」と返す。
後から入ってきた智貴は、真琴をちらっと見た。そして、小さな声で「お疲れ」と言い、何か話そうとしたのか、口を開きかけた。しかし、すぐに口を閉じ、眼を反らす。
数十秒間、倉庫の中が静かになる。治美が、その空気に耐えられなくなったのか、沈黙を破った。
「先輩～！　さっきの決意はどうしたんですか？」
「いざ話すとなると、緊張して……」
真琴は最初、智貴と治美が何について話しているのか、分からなかった。だが、すぐにある事を思い浮かべた。
「あの、先輩」
智貴と治美が、同時に真琴の方を振り向く。
「そんな……今、話さなくてもいいですよ。定演後にでも……」
「いや……」
真琴の言葉を制して、智貴が口を開いた。
「やっぱり、今話しときたい。定演後じゃ、意味ないから」
智貴は一旦話を切る。そして、意を決したように真琴を見て、少しずつ話し始めた。真琴は目をぱちぱちさせながら、智貴の意外とも思える話に耳を傾ける。
どのくらい時間が経っただろうか。話は短く感じたし、また、長く感じた気もする。
「まさか、そんな事が……」
智貴の話が一通り終わった後。しばらくしてから、真琴が思わず声を漏らした。
「驚いただろ？」
智貴が苦笑いをする。ぽかんと口を開ける真琴の横で、治美が当時の事を思い出しているかのように、腕を組んで、「うんうん」と

頷いていた。
「正直……あの時期の事、後悔してる。時間の無駄だったかなって思う」
智貴は声を落とし、憂いを含んだ表情になった。しかし、すぐに
「でも……」と、声を上げる。
「その分、今頑張ってるって言えるから。この仲間と音楽するの、楽しいと思うし」
言い終えると、智貴は口角を上げて、優しい瞳で真琴と治美を見つめた。
「……さっきの演奏を聴いて、その気持ちが、すごく伝わってきました」
真琴はそう返しながら、三年生が『ヴィヴァ・ムジカ！』を演奏した時の事を思い出した。
曲が落ち着き、木管のそよ風の下で低音が弾んでいた時。真琴は何気なく、智貴の方を見てみた……その瞬間、真琴は目を見開いた。
智貴は、今、真琴達に向けているような優しい笑顔をしていた。そして、身体をコントラバスに預け、自然に、ゆったりと体を動かしていたのだ。
そんな智貴を見て、きっと、心から演奏を楽しんでいるのだろうと、真琴は感じたのである。
「今の先輩は、まさに曲の名前通り、『音楽万才』って感じですよね！」
治美が、嬉しそうに言葉を弾ませた。さらに続ける。
「昔がどうであろうと、今が良かったら、それでいいんですよ～！分かりましたか？」
真琴と治美が智貴を見つめる中、智貴がぽつりと呟いた。
「うん……そうだな」
智貴はにっと笑う。智貴を見て、真琴と治美も頬を緩ませた。

6　音楽万才（後書き）

今回出てきた「ヴィヴァ・ムジカ！」の曲描写は、あくまで一人の素人から見た解釈であり、この解釈は絶対に合っている……というものではありません。そこの所、ご了承ください。「こんな見方もあるのか」位に思ってくれれば幸いです。

7　定演前日

土曜日、神奈川やまゆりホールのホワイエにて。輝かしく光るシャンデリアの下で、部員達が綺麗に並んでいた。

明日は、定期演奏会本番。虹西高校吹奏楽部の集大成の日であり、同時に、三年生の引退の日でもあった。だからだろうか、どの部員もいつも以上に、神妙な面持ちをしていた。

そんな部員達の前に、和樹が立つ。美雪が号令をかけ、部員が頭を下げながら「お疲れ様でした！」と挨拶した。和樹も頭を下げた後、微笑みながら話を始める。

「今日は、リハーサルお疲れ様でした。いよいよ、明日が本番です」

「本番」という言葉が出た途端、辺りに緊張感が漂った。真琴は、自然と背筋が伸びた気がした。

「明日は、今までの練習の成果を発揮出来るよう、精一杯頑張っていきましょう！」

部員達が大きな声で、「はいっ！」と返事をする。気合いの入った返事を聞いて、和樹は優しく微笑んだ。更に、和樹の話は続いていく。部員達は和樹をじっと見て、話に頷く。

しかし。真琴は和樹の話を聞いているうちに、どこか違和感を感じ始めた。話の中に、「三年生の引退」については、全く触れていないのである。

（先輩、もしかしてわざと、言ってない……？）

そう考えたものの、和樹はただ、偶然言っていないだけかもしれない。あまり疑うのは止めようと思った。そして再び、真琴は和樹の話に耳を傾けた。

解散後。望実達四人と話をし終わって、四人が離れたちょうどその時、智貴が真琴の所へとやって来た。

「お疲れ」

短いながらも、暖かみのある声で話しかける智貴。真琴は突然来た智貴に驚きながら、すぐに「お疲れ様です！」と返した。
「あれ、田中は？」
「なんか、話し合いをしてるみたいですよ」
真琴は治美のいる方を見ながら、人差し指を差した。智貴も振り向く。治美はどうやら、二年生全員と輪になって話し合っているようだった。
「そうか、わかった」
智貴はそう言って、不意に黙りこむ。真琴はどう答えればいいか分からずに、口をもごもごさせた。
数秒間の沈黙の後、智貴が静かに声を出した。
「いよいよ、明日だな……」
真琴は何も言えず、ただじっと、智貴を見つめていた。そして、何か言おうとして口を開いたその時、真琴の後ろから男性の声が聞こえてきた。
「二人とも、お疲れ～」
真琴は出かかった言葉を呑み込んだ。聞き慣れた声がした後ろを向く。声の正体は、相変わらず背が高い和樹。
和樹の隣にいた美雪も、真琴達に向かって「お疲れ様」と笑顔で言った。真琴と智貴はそれぞれ「お疲れ（様です）」と返す。
それからしばらく、四人は軽く話をした。皆、最初はどことなく、定期演奏会の話を避けているようであった。しかし、話がふと途切れて、皆静かになった時。美雪が小さく呟いた。
「明日が定演で、最後の日なんて……本当に信じられないよね」
真琴、智貴、和樹が、一斉に美雪を見た。そして、智貴がゆっくりと頷く。
「うん……そうだな」
和樹は何も言わない。ただ微笑んでいたが、どこか寂しげな表情をしていた。和樹だけではない。智貴と美雪も、同じ表情だ。
真琴は、そんな智貴達三人を見つめる。そして静かに、内心では

緊張しながら声を出した。
「あの、先輩」
三人はきょとんとした表情をしながら、同時に真琴を見た。
「三年間って……やっぱり、あっという間ですか？」
三人は一瞬、互いに顔を見合わせた。次に、再び真琴を見た後、和樹が先に口を開いた。
「……そうだね。本当に、あっという間だよ」
その言葉に、真琴の心臓がドクンと鳴った。更に、美雪、智貴と続く。
「一年生の時は、時間はまだあるって思ってたんだけどね」
「そうやってたかをくくって、後悔した事があるしな……」
一言一言が、真琴の耳に残っていく。引退間近の三年生が話す事だから、余計に現実味を帯びていた。
「だからね、真琴ちゃん」
美雪が優しく語りかけてきた。
「吹奏楽をする時間は、永遠じゃないから。引退なんてまだまだ先なんて、思わない事。そして、一瞬一瞬を大事にね。分かった？」
「……はい！」
真琴が大きく返事をすると、美雪はにっこりと笑って、「よろしい！」と言った。
和樹は美雪を見ながら、手を組んで何かを考えているようだった。しばらくして、口を開く。
「美雪。そろそろ行こうか。他にも回る所あるし」
「そうね。行こう！」
美雪が応えると、和樹は「うん」と頷き、それから真琴と智貴を見て、こう言った。
「明日は、頑張ろう！」
真琴が「はい！」と返事をし、智貴が真剣な表情で「おう」と頷く。和樹は二人を見て、とびっきりの笑顔をした。
その後、和樹と美雪は「じゃあ、またね！」と挨拶する。そして、

和樹は大きく、美雪はゆっくりと手を振って、去っていった。

二人を見送った後、真琴はそっと、智貴に訊ねた。

「原田先輩」

智貴が真琴を見る。智貴の気持ちを知るのは怖かったが、これは聞かずにはいられなかった。

「吹奏楽部に入って……どうでしたか？」

智貴がさっき言った「後悔した事がある」。それが、真琴には気がかりだった。智貴の過去を知っているので、尚更どう思っているのか、心配していた。

智貴は一瞬、きょとんとした表情をする。だが、すぐに真面目な表情になった。

「色々あったけど……結果的に、入って良かったと思っている」

そう言って、智貴は微笑んだ。真琴はその顔を見て胸を撫で下ろすと同時に、言葉にし難い暖かい感情が、身体中に湧いてきた。

「……二年生の会議が終わったらしいな。これから田中と三人で、何かするか？」

智貴は、二人に向かって小走りをする治美を見ながら、そう呟いた。真琴は何となく、智貴を見上げる。

智貴の顔から、落ち着いていながらも生き生きとした気持ちを感じた。

7　定演前日（後書き）

小説の更新がまた遅れて、本当にすみませんでした。今月は、あと一、二話更新する予定です。

8　七海高校

定期演奏会本番。ついに、この日がやって来た。天気も快晴。絶好の演奏日和である。

神奈川やまゆりホールのホワイエへ、多くの人が入っていく。親らしき人や中学生高校生、お爺ちゃんお婆ちゃんや子供等、色んな人がいて、にぎやかな雰囲気だ。

そんなホワイエの入口にて、真琴は甲斐甲斐しくパンフレットを渡していた。何故こんな事をしているかというと、単にジャンケンに負けてしまったからである。

本来なら、受付は生徒会がする仕事だった。しかし当日になって、生徒会の事情により、人数が足りなくなってしまった。だから、急きょ一年生の中から、人数を補う事にしたのだ。

（一年生はたくさんいたのに、よりによってわたしが負けちゃうなんて……運悪いなぁ）

受付の手伝いを頼まれたのは、一年生二人。そのうち、望実は自分から進んで立候補したので、実質、枠は一人。その一人を選出するためのジャンケンで、真琴が負けた。だから、真琴は今、パンフレットを配っている。

かなり不服だったが、一度決まったものは変えられない。仕方がないと、真琴は諦めた。

（望実ちゃんは……）

自分から立候補して、チケットを切る係になった望実は、今どんな感じであろうか。そう思って、真琴は望実を見ようとした……と同時に、ふと、望実がいる方から笑い声が聞こえてきた。真琴は素早く、望実を見る。

望実は少年と話していた。望実と笑いあっている見慣れない少年は、真琴より年上らしい雰囲気を醸し出している。

（望実ちゃんの知り合い？）

望実の知り合いの話は聞いた事が無いが、きっとそうなのであろう。これ以上は特に気にせずに、真琴は再び、パンフレットを渡す仕事に集中し直した。

「相原さん」
生徒会の女の人に呼ばれて、真琴は顔を右に向ける。
「来客のピークはもう過ぎたし、吹奏楽部員は一回舞台に集まるんですよね？　もう、戻って大丈夫ですよ。後は生徒会だけで足りそうですから」
真琴は、ホワイエにある壁時計を見た。時間は、一時四十分。確かに、そろそろ戻った方が良さそうだ。
「ありがとうございます。では、お先に失礼します」
礼を言って深くお辞儀をすると、生徒会の女の人は「定演、頑張ってくださいね」と、笑顔で返した。真琴も微笑み、軽く会釈をする。それから、振り返って歩き出した。
写真コーナーの近くまで来た時、真琴は足を止めた。
（そういえば、望実ちゃん……）
望実はまだ、仕事を終えていないようだった。こういう時、望実を待った方がいいのか、それとも先に行った方がいいのか。真琴は「うーん」と唸りながら考え込む。
しばらくして、やっぱり望実を待とうと結論づけた……その時だった。急に、関西弁が大声で聞こえてきたのだ。
「個性的すぎるっちゅーねんな！」
真琴はその声に思わず驚いた。そして、声の聞こえた写真コーナーの方に、素早く顔を向ける。するとそこには、先ほど望実と話していた、大笑いしている少年と背が高めの少年、更に少女が二人いた。
背が高い少年と、彼の隣にいた少女がクスクス笑う。だが、我慢が出来なくなったのか、少年少女はすぐに大笑いになった。こちらも、よく通る笑い声だ。

からかわれたのは、関西弁を話す少年の隣にいる少女のようだった。心なしか、顔を真っ赤にしているように見える。その少女は、思い切り関西弁の少年の背中を叩きながら、こう叫んだ。
「なっ、何よ！　人のことバカにしてぇ！　ムカつくー！」
「痛い痛い！　やめんか、みんな見てるわ！」
関西弁の少年の言葉にびくっとしつつも、真琴は目を離す事が出来なかった。それだけ、真琴にはインパクトが強すぎたのだ。
会話のノリと高いテンション、そしてよく通る大声、笑い声。全てが真琴とは違っていた。真琴は四人に戸惑い、こんな事を思う。
（なんだろあの人たち……。あのテンションは……うわぁ……ちょっとありえないかも）
そうして四人を見ていると、偶然、関西弁の少年と目が合ってしまった。
真琴の心臓が飛び上がる。そして気まずくなって、少年から目を逸らした。悪い事はしていないのに、何故か罪悪感にかられる思いがする。
足を動かす事が出来ずにそのまま突っ立っていると、遠くから、仕事を終えたらしい望実の声が聞こえてきた。
「まっことー！」
「あぁ、うん……」
真琴は力なく応えるが、望実は気にする様子がない。更に言葉を続けた。
「あのね、そこにいる人たち、七海高校の人たちなの！」
「ふぅん……」
「前に話した、西嶋先輩がいらっしゃる高校！　今日、全員で聴きに来てくださったんだ」
「全員なんだ」
望実が話す驚きの事実にも、真琴は心ここに非ずといった様子で返した。何となく気まずいので、早く舞台に戻りたいといった思いが強かった。

望実はその後も色々話したが、真琴はほとんど、望実の言葉が耳に入らなかった。ただ一つだけ、記憶に残った言葉がある。
「さっきチケット切ってる時に聞いたんだけど、あの関西弁を話す人、佐野（さの）　翔（かける）さんって言うんだって！」
佐野　翔。その部分は耳に入った。そして、佐野翔という人は望実の知り合いではなかったのかと、ぼんやりした頭で考えた。
（……ん？）
ふと、自分と望実以外の人の気配を感じた。恐る恐る、顔を左に向ける。すぐ近くに、関西弁の少年……もとい、佐野　翔がいた。隣には、さっき彼の背中を叩いていた少女。更に、後ろには何人かの七海高校吹奏楽部員達。
「わっ！」
思わず声を出してしまう。そして、びくびくしつつ、翔の顔を見た。
小さくはない一重の目とスッと通った鼻筋。全体的に整っていて、誰もが好感を抱きそうな顔をしていた。真琴は、そんな翔の顔を見て、少しだけ警戒心を解く。
翔はおずおずと、遠慮がちに話しかけた。
「あの～……虹西高校の人ですか？」
「はい……そうですけど」
真琴がそう答えた瞬間、翔は目を細くして笑った。
「やっぱり！　いやぁ、彼女にはホンマ感謝してるんです！」
翔がそう言った後、翔の後ろにいた七海高校吹奏楽部員達が、望実に向かって深々とお辞儀した。
翔の言葉と部員達のお辞儀に、望実が照れた様子で頭をかく。
「いやぁ、そんな大したことは……」
「もしかして……チケット五十枚の話？」
真琴が訊ねると、望実は笑顔で「うん！」と答えた。そして、望実はふと、翔の隣にいる少女を見る。真琴もつられて少女を見た。少女と真琴、望実は目が合う。

二重でクリッとした、大きな目。そして、肩まで伸ばしたさらさらの髪。形の整った鼻とふっくらした頬、薄い唇。どこかで見た事があるような顔だと、真琴は思った。
少女は二人を見つつ、笑顔で自己紹介を始めた。
「初めまして。あたし、七海高校トランペットの、朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）っていいます」
「あたしは浜田って言います！　西嶋先輩にはお世話になりました！」
望実は、はきはきと元気よく答えた。
「あ、そうだ。彼女なんですけど、ほら、名前！」
望実がいきなり、真琴を陽乃の前に引っ張っていく。真琴は、突然の事に目を丸くした。
陽乃の正面に立った後、真琴は改めて陽乃を見た。口が乾いているのを感じながら、懸命に声を絞り出す。
「あ……相原　真琴です……」
やはり声が小さくなってしまった真琴に対し、陽乃は優しく語りかけた。
「相原さん……。楽器は何やってるの？」
「コントラバスを少々……」
翔が、大きくて茶色いその低音楽器の名前に反応し、嬉しそうに言った。
「おぉー！　みーやんと貴ちゃんと同じやな」
「はぁ……」
真琴は小さな声で応えつつ、陽乃の方をちらっと見た。陽乃とは、初めて会った気がしない。そう感じていた。
真琴達のやりとりを聞きながら壁時計を見た望実が、「あっ」と声を出した。
「真琴。そろそろ行かなきゃ」
「あ、ホントだ」
時計の長い針は「４９」を指していた。皆が舞台に集まり始めて

いる頃だろう。
「それじゃあ皆さん！　是非楽しんで行って下さいね！」
「おう！　おおきに！」
望実は翔の言葉を聞いてにこっと笑い、更に「それじゃ、あたしたちは失礼します」と言った。
「行こう、真琴！」
望実が真琴を促しつつ、走り出す。
「うん……」
真琴は陽乃が気になりつつも急いで会釈し、望実の後を追おうとして足を動かした。
「あ！」
後ろから、陽乃のよく通る声。真琴は思わず立ち止まり、ちらっと後ろを振り向く。
陽乃は微笑んで、真琴に向かってこう言った。
「あの……頑張ってね！」
真琴は目をぱちぱちとさせた。それから、何故か懐かしさを感じて、心が暖かくなった。真琴は自然と微笑む。今度は大きな声で、はっきりと応えた。
「はい！　ありがとうございます！」
真琴は振り返り、再び走り出す。その足取りは、今までにないくらい軽快だった。

8　七海高校（後書き）

佐野翔君と朝倉陽乃ちゃん、初登場です。にっくんさんの「奏」の「虹西高校」の話とリンクしていますので、ぜひそちらも読んでみてください。

9　いよいよ始まる

真琴が走っていくと、ホールと楽屋を繋ぐドアの前にて、望実を見つけた。望実は真琴に気付くと、すぐに口を開く。
「真琴！　何やってたの？　いつの間にか後ろにいないんだから～」
真琴は望実の前にたどり着くと、頭を下げながら「ごめん」と謝った。
「まあ、いいや。早く行こ！」
真琴がこくんと頷くと、望実はドアに手を掛ける。すると同時に、後ろから声が聞こえた。
「あの！」
真琴と望実は後ろを振り返る。そこには、さっき翔と笑っていた、背の高い少年がいた。真琴はとっさに「はい？」と応える。
「あのさ……ちょっと聞きたいんだけど、いいかな？」
「はい」
真琴は首を傾げながら答えた。
「そちらに……永瀬　信二って子、いる？」
意外な名前が出てきたので、真琴は一瞬ぽかんと口を開けた。そして、すぐに答える。
「永瀬君ですか？　同じパートです」
真琴はさらに、疑問に思った事を訊ねた。
「いますけど……お知り合いですか？」
「まあ……」
少年の顔がほころぶ。この様子から、少年は信二と知り合いであることが見てとれた。
少年は再び、真琴に訊ねた。
「アイツ、元気にやってる？」
「えぇ。なんだかんだ言って、チューバ楽しそうに吹いてますよ」
真琴の言葉を聞いてから、少年は「そっか……」と胸を撫で下ろ

し、ホッとした様子で微笑んだ。少年は恐らく、信二が楽器の変更で悩んでいた事を知っているのだろう。真琴はそう思った。
そうこうしているうちに、真琴はふと、この少年の名前を知らない事に、今更ながら気付いた。少年に名前を訊ねようと、口を開く。
「あの……」
しかし、少年ははっと気付いたように、「あっ！」と叫んだ。
「急ぐのにゴメンな！　ちょっと、聞きたかっただけ！　それじゃ、頑張ってください！」
そういえば、早く舞台裏に行かなければいけないのだった。真琴は、少年の名前が気になりながらも、静かに「はい」と応えた。
少年は手を振りながら、駆け足でホワイエのある方に戻っていく。真琴と望実は、少年の後ろ姿をぼんやりと見つめた。
少年の姿が見えなくなったすぐ後に、突然、ホールと楽屋を繋ぐドアが開いた。真琴と望実は素早く振り返り、目を丸くする。
ドアを開けたのは、先程まで話題に上っていた信二だった。信二は、真琴達がこんなに早く見つかるとは思わなかったのだろう、一瞬、切れ長の目を見開いた。そして、すぐさま真琴達に言う。
「二人とも！　何やってんの？」
「あ……それがね永瀬」
望実が話そうとするが、信二に遮られた。
「パート点呼やってるから！」
さっき起こった出来事を話す時間は、もうない。望実はそう感じたのだろう。すぐに口を閉じた。
真琴はそんな望実を見た後、信二を見据える。走り出す信二を追って、真琴と望実は楽屋の方へ駆け込んでいった。
楽屋が並ぶ廊下を、どんどん走る。望実が、前にいる信二に訊ねた。
「ちょっと！　どこ行くの？」
「ホール上手側の舞台裏！　皆、もう集まってる」

信二が答えてから少しも経たないうちに、楽屋とホールを繋ぐドアの前に着いた。信二はそっとドアを開け、真琴と望実が先に入るよう、手招きする。
「ありがとう」
真琴は小声で礼を言い、足音をたてないように舞台裏へ入った。望実と信二も後に続く。
舞台裏には、全ての部員が集まっていた。信二は再び前に行き、バスパートが固まる所へと連れていった。
「先輩。二人を連れてきました」
信二がバスパートリーダーに伝えると、パートリーダーは頷き、前の方へ向かった。
パートリーダーのいた近くに、悠輔と律の姿が見えた。二人は真琴達に気付くと、悠輔は笑顔に、律は目を細め、手を振った。真琴、望実、信二も手を振り返す。
真琴は更に、智貴と治美を見つけた。自然と声が出る。
「あっ……先輩」
真琴は智貴達に向かって行く。治美は真琴に気付くと、微笑みながら小さく手を振った。コントラバスに寄りかかっていた智貴は、真琴に向かってぼそっとつぶやく。
「遅かったな」
「色々あったので……」
真琴が答えた後、開演五分前を知らせるブザーが鳴った。素早く智貴が前を向いたので、真琴もつられて前を向く。
前に立っていたのは和樹であった。一番前の列の端にいる美雪が、澄んだ声で、静かに号令をかける。真琴達一同が落ち着いて令をすると、和樹が話し始めた。
「……皆さん。いよいよ、第二十八回定期演奏会が始まります」
和樹は一端言葉を切って、部員全員をまっすぐな目で見渡した。
「一年生は、この虹西高校吹奏楽部での、初めての舞台です。緊張しすぎないで、リラックスしていきましょう。二年生は、僕達三年

生をサポートし、一年生を支えてください。課題曲、聴くのを楽しみにしています。そして……」
和樹は再び言葉を切り、うつむく。そして、意を決したように口を開いた。
「三年生は、これが最後の舞台です」
直後、和樹は顔を上げ、真剣な顔をしている三年生に向かって、力強く声を出した。
「あと少ししか、このメンバーと演奏する時間がありません。だから……後悔しないよう、楽しんで、全力でいきましょう！」
和樹の言葉に、三年生だけでなく一、二年生も「はい！」と応えた。和樹は皆を見て、にっこりと笑う。
「では、最後に気合いを入れます」
和樹がそう言ったとたんに、美雪、智貴、治美を始めとした部員が右手を握り、自分の顔の前に持っていった。真琴達一年生も、見よう見まねで先輩と同じようにする。
和樹は部員達を見回すと、普段の和樹からは想像出来ないほどに力強く、声を張り上げた。
「第二十八回定期演奏会、頑張っていくぞ！」
その瞬間、部員達は右手を天に向かって突きだし、大声を上げた。
「オー！」
声を出した後の部員は気合いが入り、すっきりとした表情になっていた。
「……では、二年生と三年生、課題曲に出る一年生は、上手と下手に別れて、舞台裏で待機してください。他の一年生は、楽屋で静かに待っていてください。解散します」
和樹の指示が終わった後、部員達はそれぞれの持ち場についていく。
「真琴ちゃん。あたし達の演奏、聴いててね～！」
「じゃあ、また後でな」
治美は声を弾ませ、智貴は真琴をちらっと見てから、足を進めよ

うとした。真琴も、何か言おうと思って声を上げる。
「あっ……あの！」
智貴と治美は足を止め、真琴の方を振り向く。
「あの……演奏、楽しんでください！」
目をぱちぱちさせていた智貴と治美は、真琴の言葉を聞いて、優しく微笑んだ。二人は応える。
「うん！」
「……おう！」
三人はお互いの目を見て頷くと、くるっと振り返り、歩いていった。智貴と治美はそのまま上手の舞台裏へ。そして、真琴は楽屋へ。

ドアを閉めて、二階にある一年生の楽屋へ向かい、階段を上がっていく。二階に着いた所で、開演を知らせるブザーが鳴った。
真琴は足を止める。それから、どくんと音をたてている心臓に手を当てながら、息を潜めて演奏が始まるのを待った。
数分後。近くにあったスピーカーから、「ヴィヴァ・ムジカ」が聞こえてきた。真琴はスピーカーに顔を向け、じっと見つめる。
しばらくして、智貴の低音の弾みを聞こえてきた。真琴は頬を緩ませる。楽しそうにコントラバスを弾く智貴の姿が、自然と思い浮かべられた。
その後、真琴は「ヴィヴァ・ムジカ」が終わるまで、楽屋に戻る事も忘れて、スピーカーにずっと耳を傾けた。

10　『伝説のアイルランド』

クラシックステージはすでに半分を越え、三曲目も終わりに差し掛かろうとしていた。

真琴はというと、まだ廊下のスピーカーから離れず、曲を聴いていた。智貴達が奏でる音楽に、すっかり夢中になっていたのである。

天井にあるスピーカーを見つめ、耳を傾ける。すっかり、曲を聴きこんでいた。しかし、真琴は直後に、現実に引き戻される事となる。

「真琴！」

毎日聞いている少女の大きな声が、いきなり真琴の左耳に入ってきた。真琴ははっと気付く。すぐに左を向くと、望実、信二、律が側に立っていた。

「まさか、ずっとここにいたの？」

望実の問いに、真琴は首を縦に振る。信二が苦く笑った。

「楽屋にもテレビがあったんだから、そっちで聴けばよかったのに」

「あ……そうだった！」

そもそも、楽屋に戻るという考えさえ思い浮かばなかった。真琴は手で頭をかく。同時に、三曲目の最後の音が響いた。

拍手が鳴り終わった後、律が静かに口を開く。

「……よっぽど、演奏を聴くのに集中してたんだ。……すごいな」

律は感心したように、真琴をまっすぐ見つめる。真琴は、嬉しさと恥ずかしさが入り交じって、思わず頬を赤くした。

頬を隠そうとして手を当てた。その瞬間、疑問が思い浮かぶ。

「そういえば、何で三人でここに？」

「……鈴木を迎えるため、かな。バスパートの一年で」

律の後に、信二、望実と説明が続く。

「鈴木は課題曲と自由曲に出ただろ？　三曲目も終わるから、そろそろ戻ってくる。だから、皆で迎えに行こうって」

「なのに、真琴が見当たらないなぁと思って。とりあえず廊下に出たら、すぐ近くにいるんだもん！　しかも、全然あたし達に気付かないし」
　まさか、望実達が前から真琴の近くにいたとは思わなかった。一気に、望実達に気付かなかった事に対して、申し訳ない気持ちになる。
「ずっと、スピーカーばっかり見てたから……ごめんね？」
　ぺこりと頭を下げる真琴。信二は両手を横に振って、「別に、謝んなくていいぞ。全然気にしてないからさ」と返した。
「あ……鈴木が来た」
　律の言葉に反応して、真琴達は階段に目を向ける。階段を上がりきった悠輔は、真琴達に気が付くと、優しく微笑みながら手を振ってきた。
「ただいま～。皆で迎えに来てくれたの？」
「うん、そう！　おかえり！」
　望実が笑顔で言うと、真琴、信二、律も、それぞれ「おかえり！」と口にした。
「ありがとう！　演奏は……大丈夫だった？」
　律と信二が、真琴をじっと見つめる。真琴は二人の視線にどぎまぎしつつも、自分の感じた事を言った。
「すごく良かったよ！　なんか……音、楽しそうだった」
「そうかあ。良かった～」
　悠輔は胸に手を当て、安堵したようにため息をつく。その時、スピーカーから、司会者の女性の「最後の曲、『伝説のアイルランド』、どうぞお聴きください」というアナウンスが聞こえてきた。
　悠輔はスピーカーに目配せし、さらに続けた。
「最後の曲が始まるね。どうせなら、このまま皆で聴かない？」
　悠輔の提案に、真琴、望実、信二、律は大きく頷く。そして五人は、顔を上げて天井のスピーカーを見つめ、耳を傾けた。

静かに始まった低音が、ティンパニと銅鑼を加えて、波のように押し寄せてきた。低音の波が最大になった所で、大地にぶつかったかのように音が打ち込まれ、同時にチャイムと鎖が響く。

真琴は鎖が叩きつけられる音を聞いて、智貴がいつか話していたことを思い起こした。

「ここに出てくる鎖は、奴隷が引きずっている様子を表しているらしい……」

智貴の言葉は一瞬で、真琴を曲の世界へと誘(いざな)った。

真琴は曲調の暗さからまず、夜をイメージした。星は見えなくて、暗闇である。かろうじて、月明かりがほんのりと、低音の大地を照らす。近くには荒々しい海。そして大地の上で、奴隷が、鎖につながれている足を引きずっている。真琴の中で、そのような光景が広がった。

やがて場面は変わり、タムタムが静かに鳴る。そして、オーボエが先頭に立ち、独特の枯れた音で、どこか哀しげな旋律を奏で始めた。

しばらくして、オーボエにフルートが重なる。それから、オーボエとフルートの下でファゴットが弾む。後から、金管が入って一気に音が増大し、軍隊の行進のようになった。

行進とは言っても、明るいものではない。むしろ、哀愁を帯びている。だが、この軍隊の行進には、哀愁とは裏腹に、勇ましさも感じられた。

曲は一回おとなしくなったが、再び金管が入り、行進が再開された。それから音は遠くに行き、代わりに軍隊の足音が聞こえてくる。だが、足音も次第に遠のいていった。

軍隊が遠のく姿を見ていた真琴は、今度はハミングと、おそらく美雪であろうフルートの音に導かれ、神秘の世界へと入り込んだ。

高音から低音までの伸ばしとハミング、ウインドチャイムがなびくなか、二つのフルートが、優しく、そして寂しげな音色で歌う。幻想的、女性的といった表現が似合う場面であった。

コーラスが、海岸にぶつかる波のように満ちたり引いたりし、後に全部の楽器が音を奏で、重厚な響きになった。真琴は聴いているうちに、神秘的な女性の、内にある力強さも感じたような気がした。

曲は再び落ち着き、アルトサックスのソロが始まった。こちらも女性的な雰囲気を醸し出している。しかし、さっきの幻想的なイメージではなく、宮廷にいる貴族女性を思い起こさせるようなイメージだ。

アルトサックスの貴族女性は、高貴なドレスを身にまとい、くるくると優雅に踊る。しかし、その踊りは、どこか気だるい。

一人の女性の踊りに、周りの楽器も加わる。気だるい雰囲気を残したまま、大勢での踊りは次第にゆっくりになっていった。

突然の打楽器の音に、真琴は宮廷から呼び戻される。そして、今度は戦場の場面なのだと感じた。

打楽器が戦いの始まりを告げると、クラリネットが不協和音で音をぶつけ、不穏な雰囲気を作り出した。サックスによる宣戦布告。トランペットがそれに応え、意気揚々と士気を高める。

トランペットが高らかに合図を出すと、次に低音が躍り出て、一気に攻撃的な雰囲気へと変わった。その上で、クラリネットとサックス、二つの民族が交互に仕掛ける。

さらに場面は変わる。打楽器の音が、これから起こる悲劇を予感させるように響き渡る。

多分和樹であったろう、ティンパニが沈黙を破って、再び戦いの始まりを告げる。金管と木管が交互に鳴り、やがて入り混じっていった。

木管は、戦いの激化を象徴するように踊り狂う。金管は、まるで死者を弔う鎮魂歌のように、悲しく響く。二つの旋律は、螺旋のように交わっていた。

戦いが頂点まで達すると、打楽器の力強い、息の合ったアンサンブルが展開された。そして、銅鑼の打ち込みが、戦いの終わりを示す。

銅鑼が鳴り終わるか終わらないかの頃に、再び冒頭と同じように、低音の波が押し寄せてきた。
真琴の中で、最初と同じ大地、海の風景が広がった。しかし、空模様が始めとは違う。真琴の目に映ったのは、夜の暗闇ではなく、水面から顔を出す太陽だった。夜明けの場面だ。
夜明けから、いきなり場面が変わる。大地を震わせるような音が、高音、中高音、中低音、低音と重なり、さらにチャイムやティンパニが轟いた。
一瞬だけ静まる。そこから、音が三重、四重になる。全員が勇ましく音を打ち込み、すべてが終わった。

最後の音が響き渡った後、拍手の洪水が沸き起こる。これを聞く限り、和樹達の『伝説のアイルランド』がどんな演奏だったのか、すぐに想像がついた。
真琴達は拍手の洪水を聞いて、さっきまでの緊張感が嘘のように身体から抜け落ち、何とも言えない虚脱感がした。スピーカーを見つめたまま、ぽかんと口を開けている。
拍手の洪水が収まってゆく頃に、真琴がぽつんと呟いた。
「わたし達も……こんな演奏、出来たらいいな」
望実、悠輔、信二、律が真琴の方を向く。皆、目を輝かせて、「うん！」と頷いた。

11　あっという間

望実、悠輔、信二、律と別れて数分。身の回りの準備を終えた真琴は、舞台裏へ行こうと思い、一階へと続く階段の手すりを軽くつかんだ。それから、一歩一歩階段を降りていく。

一階に近づいていくごとに、真琴は心臓の音が大きくなるのを感じた。さらに、不安も募る。

（初めての本番……大丈夫かなぁ）

初めての舞台。真琴にとっては、何があるのか分からない、未知の世界だった。あと少しで、未知へと踏み込む。考えたら、思わず身震いがした。

階段を降りきって、右から左へと廊下を見渡す。すると、左側の隅にある休憩所で、茶色い革の生地のソファーに座っている和樹を見つけた。

和樹は、ぼんやりと上を見ていた。何かを考えているのだろうか。

真琴は和樹に少しずつ近づいた。それから、和樹をそっと見つめる。気付くと、声が出ていた。

「先輩」

蚊の鳴くような声だが、和樹は気付いたようだった。視線を真琴に向け、いつものように微笑み、「よっ」と手を上げる。真琴は軽く会釈した。

頭を上げた時、和樹と目が合った。真琴は何か言おうと、口を開きかける。だが、さすがに「何を考えていたのですか？」とは言えず、すぐに口を閉じてもごもごさせた。

すっかり黙る真琴。雰囲気を察したのか、和樹から話しかけてきた。

「この二年間、あっという間に過ぎたなぁって思ってたんだ」

真琴は思わず、目を見開いた。まさか、真琴が知りたかった事を語ってくるとは思わなかったからだ。

「一年前に部長になって。引退は先だとのんびりしてたら吹コンで色々あって。原っちの退部騒動もあったなぁ」
和樹は一端顔を上げ、遠くを見つめる。過去を思い起こしているのだろう。
しばらくして、和樹は再び真琴の方を向いた。
「でも、何だかんだ言いながらも、部活は本当に楽しかった。だから……いざ引退となると、寂しくなっちゃってね」
和樹は眉を下げ、悲しげな微笑をした。昨日話した時と、全く同じ表情だった。
「昨日なんか、僕達の引退について何も話さなかったしな～」
「やっぱり、わざと言ってなかったんですね？」
「あ～、気付かれちゃってたかぁ。なるべく不自然にならないように話してたのに」
和樹は苦笑いをし、頭をかいた。そして、ふと真琴から目をそらし、うつむく。
「結局、一番引退を認めていなかったのは、僕だったんだよね。美雪や原っちはちゃんと引退に向き合ってたのに、僕は直前に変な抵抗をして……」
「でも、和樹だって今日、引退について話をしたじゃない」
後ろから聞こえる少女の声。真琴は振り向き、和樹は顔を上げて、声が聞こえた方に視線を向けた。
「美雪！」
和樹が目を丸くして見つめる。
「ごめんね、舞台に行こうとしたら、話が聞こえてきたから」
美雪は手を合わせて謝った。それから優しく微笑み、言葉を続ける。
「定演が始まる前、ちゃんと皆に向かって『あと少ししか時間が無いから、精一杯演奏しよう』って言ってたでしょう？　それだけで十分、引退に向き合ってると思うよ？」
美雪が話しているうちに、和樹の顔は赤くなっていった。赤い頬

をしたまま、しっかりと美雪を見つめる。
「ありがとう……！」
和樹は柔らかく微笑む。そんな和樹を見て、真琴と美雪は目を細めた。
何気なく、そばにある壁時計に目を向けた美雪が、「あ」と声を漏らす。
「二人とも。そろそろ行った方がよさそう」
「本当だ。じゃあ、舞台へ行こうか」
和樹は茶色のソファーから立ち上がり、伸びをした。そして、頬をぱちぱちと叩く。
「……よし、気合い入れ完了！　っと」
真琴は和樹を見上げる。和樹の表情には、さっきまでのような憂いは含んでいなかった。
「真琴ちゃん。お互い頑張ろう！」
和樹が拳を握って力強く言った。美雪が続ける。
「演奏、楽しもうね！」
二人は微笑みながら真琴に手を振ると、下手側の扉に向かっていった。真琴はお辞儀をする。顔を上げた後、自然と笑顔になった。
つい数分前まで感じていた不安は、すっかり消えていた。ただ、今日聴きに来てくれている香奈、陽乃や翔等七海高校の部員、そして引退する智貴、和樹、美雪達三年生のため、精一杯弾こうという気持ちがあった。
真琴は、和樹がしたのと同じように頬を叩く。それから、舞台上手に続く扉を開けた。
ポップスステージは、真琴にとってはあっという間だった。曲数は多いし、時間も長いはずなのに、いざ本番になると、曲は早く進んでいった。
これから演奏する曲はＳＭＡＰの『オレンジ』。三年生紹介の曲だ。これを演奏するという事は、定期演奏会が終わりに差し掛かっ

ているという事を意味していた。
顧問の明仁が、一、二年生に目配せをした。真琴は明仁を凝視する。曲が始まる瞬間を見落とさないよう、神経を明仁に集中させていた。
明仁が指揮棒を静かに降ると、『オレンジ』が優しく響きながら始まった。しばらくして、三年生が舞台上手側、下手側両方から登場する。
三年生の足音が完全に無くなった後、和樹の声が下手側の端から聞こえてきた。
「本日は、第二十八回定期演奏会へお越しいただき、そして最後までお付き合いいただきありがとうございました。……」
和樹の挨拶が続く。一、二年生が奏でる『オレンジ』が、別れを匂わすような、哀愁漂う雰囲気を醸し出していた。
「僕が部長になったのは、ちょうど一年前、去年の定期演奏会が終わった次の日でした。その時は僕、まだまだ時間はたっぷりあると思っていました。でも……」
その次の言葉が、一気に真琴の耳に入ってきた。
「あっという間に一年は終わりました」
真琴の背中が、一瞬びくっと震えた。
「今、自分がこの大きな舞台に立っているのが、いまだに信じられないです。吹奏楽コンクールや学園祭、クリスマス会……仲間達と過ごした日々が昨日の事のように感じられます」
和樹の話が、一言一言真琴の心に入っていく。休憩時間に和樹の本音を聞いていたから、余計に身に染みた。
「僕が部長として今日までやってこられたのは、二年間共に歩んできた素晴らしい仲間達がいたからです。今から、僕のすごく大事な、三十人の仲間を紹介したいと思います。……フルート、河合　美雪！」
美雪が前に出る。その瞬間、客席から大きな拍手が沸き起こった。
和樹は三年生の名前を次々と呼んでいく。曲も終盤へと入った。

後輩は、泣くのを堪(こら)えて一生懸命演奏する。三年生は、笑顔で手を振っていたり、目を赤くしていたりと、様々な様子を見せていた。

「コントラバス、原田　智貴！」

ついに、智貴の名前が呼ばれた。大きな拍手が聞こえる。真琴はどこか、胸が締め付けられるような感覚を覚えた。さらに、目頭が熱くなるのも感じる。

「せーの！」

美雪が、澄んだ声で合図を出す。それから、三年生全員の声がホール中に響いた。

「部長！　パーカッション、石田　和樹！」

これで、定期演奏会ももうすぐ終わりなのかと思った。同時に、真琴の胸が痛くなる。

ふと、温かいものが右手に当たり、濡れるのを感じた。そのすぐ後、急に視界が潤んだ。

（あれ、楽譜が見えない……）

楽譜だけではない。今弾いているコントラバスや両隣にいる治美とチューバ、前にいる木管低音、明仁、三年生、観客。周りの人皆がぼやけて見えた。

この後、真琴は『オレンジ』が終わるまで、コントラバスをほとんど弾く事が出来なかった。

12　泣いて笑って

『オレンジ』が終わった。同時に、大音量の拍手が響く。中には、三年生の名前を呼ぶ者や、「おめでとう！」と言う者までいた。

真琴は、観客の大歓声を聞きながら、ようやくはっきり見えるようになった目で、舞台下手側を見る。美雪は泣いているようだった。嗚咽を漏らしているように見える。和樹は笑っていたが、一瞬、手を目に当てていた。

観客の拍手が、やがて手拍子になる。誰かが「アンコール！」と言ったのを皮切りに、掛け声がホール中に広まった。まるで大所帯の合唱だ。

しばらく合唱が続いた後、明仁がどこからともなく現れ、マイクを口元に近付けて観客に話しかけた。

「皆さん、どうもありがとうございます」

明仁が話を始めてからしだいに、客席から掛け声と手拍子が鳴り止み、静かになった。その間に、三年生がそっと舞台裏へ退場する。自分の楽器を取りに行くのだ。

真琴は、移動する智貴達を何気なく見つめる。左隣にいた治美が、そんな真琴の顔を心配そうに覗き込んだ。

「真琴ちゃん、大丈夫！？　涙が……」

真琴は手を頬に当てる。すると、手のひらが濡れてしまった。

「あれ？　こんなに泣いてましたっけ？　わたし……」

急いで涙を拭う。今度は右腕が濡れた。それを見た治美が困ったように眉を下げる。

「ああ～、何か拭くものがあればいいんだけどなあ～」

「これならあるけど」

真琴と治美の間に、紺色無地のハンカチを持った右手が入り込む。後ろを振り向くと、智貴がいた。

「ほら、受けとれ。大丈夫か？　目が赤いぞ」

真琴は紺色無地のハンカチを手に取る。
「先輩も人の事言えませんよ〜！　あと、何でハンカチ持ってるんですか？」
「たまたまポケットの中に入ってた」
「本当にたまたまですか！？　それって」
智貴と治美が言い合っている間に、真琴は濡れた頬と右腕を拭き終えた。
「先輩、ありがとうございました」
真琴はハンカチを渡そうとして、智貴を見上げる。智貴の顔が映った瞬間、思わず目を丸くした。
智貴の目が赤かった。さらに、顔を擦ったような跡もある。初めて見る、智貴の顔だった。
「どういたしまして」
智貴はハンカチを受け取り、右側のポケットに突っ込む。そして、目を丸くしたままの真琴と視線を合わせた。
「オレの顔に何か……付いてるか」
智貴は苦笑する。真琴は、智貴を見ているうちに目頭が熱くなり、うつむいた。
「真琴ちゃん、大丈夫？」
治美が再び真琴に訊ねる。
「大丈夫、じゃないかも……」
「……どうして」
智貴が首を傾げながら聞く。
「先輩は……もう引退するんだと思ったら、なんか……」
そこまで言った所で、涙がぽろりとこぼれ落ちた。真琴は慌てて手を目に当てる。治美も我慢出来なかったのか、目を伏せた。
「田中も相原も、そんな顔するな。むしろ笑え」
智貴の言葉に、真琴と治美は目を見開いた。智貴は話を続ける。
「最後だからこそ、二人とも笑え。それで楽しく終わらせて、オレに華を持たせてくれないか？」

二人は一瞬、口をぽかんと開けた。そして、治美が「はい！」と返事をして笑顔になった。
「ほら、真琴ちゃんも！」
治美が真琴に促した。智貴もじっと真琴を見つめる。
真琴は一回うつむいた。涙をそっと拭う。それから、意を決して顔を上げ、精一杯笑って返事をした。
「……はい！」
智貴と治美は、真琴を見て目を細めた。そして、智貴が言葉をかける。
「二人とも。最後……楽しもうな！」
真琴と治美は智貴を見て、元気よく「はい！」と頷いた。前を向き直る。明仁の話が終わろうとしていた。

明仁はちらりと部員達を見る。皆の準備が終わったのを見計らってか、再び観客の方を向き、口を開いた。
「これが、最後の曲です。ｋｉｒｏｒｏの『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』、どうぞお聴きください」
言い終わると、明仁は指揮台の上に登った。部員達を微笑みながら見つめる。部員達も、泣きはらした目で明仁を見る。ホール内に、一瞬の沈黙が漂った。
明仁は、ゆっくりと腕を振り上げた。部員は一斉に息を吸う。智貴、和樹、美雪の、最後の演奏が始まった。
静かに始まった伴奏の後、優しくて綺麗な旋律が、小川のせせらぎのように流れだした。部員が旋律の小川に身を委ねて、ゆったりと動く。
真琴は弾きながら、この『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』の演奏に暖かさを感じていた。小川の流れる広々とした野原に太陽の光が降り注いで、春特有のぽかぽかした陽気が漂うような、そんな居心地の良い暖かさだった。
なぜ、この演奏に暖かさを感じるのか、真琴は分かったような気

がした。皆が一音一音に心を込めて吹き、叩き、弾いているから。そう思った。
曲がサビに入ると、智貴が、和樹が、美雪が、そして皆が思いの丈をぶつけるように、懸命に吹いた。旋律、装飾、伴奏、全ての音符が歌う。
観客も、曲に合わせて手拍子をしていた。歌っている者もいた。部員の親だろうか、涙を流している者もいる。いずれの観客も、舞台を見る眼差しは優しい。
いつの間にか、ホール全体が、暖かさに包まれていた。

皆が春の暖かさを感じているうちに、『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』が終わった。最後の音が鳴り終わると同時に、大音量の拍手がホール中に響き渡る。
明仁は部員全員に目配せをする。「立て」の合図だ。部員達は一斉に立ち上がった。元々立っているコントラバスとパーカッションは、素早く観客の方を向いた。
部員が立ち上がると、拍手の音がますます大きくなった。部員達は観客を笑顔で見つめる。緞帳（どんちょう）が下がり始めると、三年生が観客に向かって手を振った。
緞帳が完全に下がった。終わりのアナウンスが聞こえる。観客のざわめきと足音が聞こえる中、明仁が素早く指示を出した。
「三年生はすぐにホワイエへ向かえ！　ちゃんとお客さんを見送ってこいよ～」
三年生は大きな声で「はいっ！」と返事をすると、舞台裏へと移動を始めた。
「じゃあ、コンバスの片づけよろしく」
智貴はコントラバスをそっと置くと、深呼吸をした。そして、真琴と治美の方を振り向く。相変わらず赤い目を細めて、すっきりとした顔で言った。
「あー、やりきった！」

智貴は思い切り笑う。それから、背を向けてホワイエに向かっていった。

真琴は、この時の智貴の言葉と笑顔を、忘れる事が無かった。

0　春の終わり、夏の始まり

六月始めの土曜日。この日の活動は、大掃除だった。いらない物を捨て、整理整頓する。更に、楽器を磨き、綺麗にする。虹西高校吹奏楽部の恒例行事だ。

晴れ渡る空の下、青いトタンの屋根の建物から、少女の声が響いた。

「マコちゃん！　布取ってくれない？」

「はい！」

真琴は、近くに置いてあった、あじさい色の絹の布を掴んだ。声の主である治美に渡す。

「ありがとう～！　あと、これでコンバス磨いて！」

治美は絹の布を受け取ってから、黄土色の液体が付いているタオルを持った。

真琴は再び返事をして、タオルをもらった。タオルから放たれる刺激臭に、一瞬顔をしかめる。

気を取り直して、コントラバスの体を拭こうとする。その時ちょうど、真琴の視界に治美が映った。真琴は治美の方をちらりと向く。

治美は、智貴が使っていたコントラバスを、丁寧に磨いていた。楽器を見つめる目線は、どこか優しげだ。

真琴は視線をコントラバスに戻し、そっと拭き始める。自然と、撫でるように磨いていた。

しばらくして、コントラバスを磨き終わった後。真琴は何となく、倉庫全体を見渡した。

棚には、古い管楽器。床には、トライアングルやタンバリン等の小物に、バスドラやドラムセット。コントラバスも三つ。楽器倉庫の、いつも通りの光景。だが、雰囲気がどこか違っていた。

「倉庫が広く感じる……」

「……やっぱ、原っち先輩がいないからね～」
いつの間にか、智貴のコントラバスを拭き終わっていた治美が、どこか寂しげに言った。
定期演奏会前、倉庫の中で三人揃って練習していた時は、倉庫が狭いと何度も感じていた。智貴がいなくなった途端、倉庫が広くなったと感じるとは、全く思っていなかった。
「なんか、寂しいですね」
真琴は思わずつぶやく。この倉庫の中のように、心にぽっかり隙間が空いたような気がしていた。
「そうだね……。でも！」
治美は微笑み、さらに続ける。
「全く会えなくなるわけじゃないから！　先輩達、結構来てくれるし～」
真琴は「えっ？」と声を漏らす。治美は説明を始めた。
「先輩達は、受験勉強の息抜きという理由でたまに部活に来るんだよ～。後、コンクールや学園祭にも聴きに来てくれる事が多いから！」
真琴は目をぱちぱちさせた。それから、治美が言った事を思い返すと、次第に頬が緩んだ。口角を上げながら口を開く。
「じゃあ、コンクールも学園祭も頑張らないと……ですね！」
治美も「そうだね！」と返し、にっと笑った。

太陽が真上に昇った頃。真琴と治美は扉を開け、楽器倉庫から外に出た。
「うわ、眩しい……！」
真琴は目を細め、左手で日差しを造る。
「半袖でも良さそうだね～、これは」
治美も、長袖ワイシャツを捲(まく)った腕で目を覆った。
「春は終わりですね……」
「これはもう夏でしょ～。暑いし！」

真琴と治美は笑い合う。その時、虹館入口の方から、きびきびした少女の声が聞こえてきた。
「おーい、そこの二人！」
真琴、治美は一瞬びくっとした。それから前を向く。
遠方にいる少女は、柔らかそうな茶髪を一つに束ねていた。少女は続けて声を掛ける。
「あと少しで、吹コンの会議始まるよー！」
「分かった～！　りーちゃん、先行ってて！」
治美が大声で返す。りーちゃんと呼ばれた少女は頷き、一つに結んだ茶髪を揺らしながら、素早く走っていった。
「部長になってから、忙しそうだな～。……じゃあ、あたし達も走るか！」
真琴が目を丸くしているうちに、治美は駆け足をし始めた。
「ほら、マコちゃんも走る！　吹コンの会議に遅れちゃマズイし！」
「先輩、待ってくださいよ！」
陽に照らされているアスファルトの上を、真琴も走り始める。伸び始めたダークブラウンの髪が、さらりと揺れた。

夏は、まだ始まったばかり。

1　新部長、新副部長、吹奏楽コンクール

虹館の多目的ホールにて。一番奥にある黒板の前に、ポニーテールの髪型をした柔らかい茶髪の少女と、つぶらな瞳をした少年が立っている。部員達は、パートごと縦に並んで座っていた。

少年は、パートリーダーからそれぞれのパートの人数を聞き、黒板に書いた。少女は黒板を見て、満足そうな表情を浮かべる。

「皆、集まったみたいね。では、これから吹奏楽コンクールについての会議を始めます」

少女が、部員達をまっすぐ見て言った。少女の凛とした雰囲気につられ、部員達は背筋を伸ばす。

「司会を務めさせていただくのは、部長の武内（たけうち）　理沙子（りさこ）です。パートはサックス！　よろしくお願いします」

「あの、何もパートまで言わなくてもいいんじゃ……？」

理沙子と言う少女に向かって、柔和そうな少年がひそひそ声を出した。

「あー、もう言っちゃったからしょうがないの！　それより、あなたも自己紹介！」

顔を真っ赤にして弁解する理沙子。先程までの凛とした雰囲気が、すっかり消えている。少年は苦笑いをしながら頭をかいた。二人の姿に、部員達はくすくすと笑う。

真琴の後ろに座っていた治美が、「緊張してるな～、りーちゃん」とつぶやく。真琴はそうなのか……と感心し、こくんと頷いた。

少年は、改めて前を向き直り、落ち着いた様子で自己紹介を始める。

「同じく司会を務めさせていただく、柳沢（やなぎさわ）　湊太（そうた）です。副部長です。……ついでに言うと、パートはトランペットです。よろしくお願いします」

湊太は丁寧にお辞儀をする。理沙子が湊太の左肩を手のひらで軽

く叩き、「『ついでに』は要らない！」と口にした。
「この先、あの二人でちゃんとやっていけるのかな～」
再び、真琴の背後から治美がつぶやいた。後ろを振り向く。苦笑を浮かべている治美に、真琴は「でも」と声を出した。
「あの先輩達、何となく息合ってません？」
「うーん、ある意味合ってるかもね～。でこぼこコンビっぽい！」
真琴と治美は声を抑えて笑う。しかし、理沙子は気付いたようで、「そこの二人！　聞こえてる！」と真琴達の方を見て言った。二人は、慌てて口を閉じた。

約三十分後。理沙子と湊太の司会に不安を覚える者が少々居たものの、自己紹介の後は良い具合に話し合いが進んでいた。
「……では、八月までの練習予定については、これで決定します！」
理沙子がはきはきと話す中、湊太が黒板に、形の整った字で決定事項を書いていく。真琴は、黒板に書かれた練習予定をじっくり読んだ。
六月は、個人練習やパート練習、基礎合奏が中心。定期テストの一週間前に部活が休みになる。テスト明けからは分奏や合奏が中心となり、七月末に吹奏楽コンクール地区大会。そして、八月にある県大会まで、ほとんど練習が入っている。
（なんか、大変そう……）
軽くため息をつく。治美が疑問に思ったのか、真琴の肩を叩いて訊ねてきた。
「マコちゃん、どうしたの？」
後ろを向いて、治美の耳元で囁く。
「いや、ほぼ毎日練習があって、大変そうだなあって思いまして」
「吹コンは、一年間で最も重要な大会と言っていいからね～。皆、気合い入るもん」
全日本吹奏楽コンクール。全国中の多くの吹奏楽部、団体が参加する、大きな大会だ。地区大会、県大会、地方大会を勝ち抜き、全

国大会が行われる普門館を目指す。治美が言うには、野球部が甲子園を目指すのと同じような感じだそうだ。
「吹奏楽に関わる人にとっては、夏といえば吹コン。これは鉄則だよ！」
「なるほど……分かりました」
真琴は納得し、頷く。理沙子が「はい、静かに！」と口を開いたので、二人は会話を止め、前を向いた。
「次は、吹奏楽コンクールのメンバーを決めるオーディションについて話したいと思います」
（……おーでぃしょん？）
真琴は首を捻った。何故その言葉が出てくるのかが分からない。
ざわめき始める部員達。理沙子が再び「静かに！」と大声を出した。すぐにホール内が静まり返る。
「知っての通り、我が虹西高校吹奏楽部は、一、二年だけでかなりの大所帯です」
「ちなみに、七十人くらいはいますね」
交互に話す理沙子と湊太。そういえば、こんなに人数がいたのかと、真琴は今更ながら思い出した。
「当然、虹西高校は大編成のA部門に出場するのですが、出られる人数は五十人です！　つまり、全員は出られません」
皆、分かっているはずの事だった。しかし、それでも動揺してしまうようだ。息を呑む音が、どこからか聞こえた。
吹奏楽コンクールの仕組みを完全に理解しきれていない真琴は、理沙子の言葉を聞いて「あれ？」と疑問に思った。てっきり、全員で出られるものだと思っていた。
「という訳で、全パートでオーディションを行います。審査員は、明仁先生と部長のりーちゃ……じゃなくて武内さん、副部長のぼく、OBの方になります」
「概要はこれで終わりです。では、これからオーディションをする日にちと審査する曲目を話し合いたいと思います」

湊太、理沙子が淡々と話す。だが、どの声も真琴の耳には入ってこない。
全員が出られないと分かった瞬間、真琴の中で、何か重たいものがのし掛かった。同時に、胸が塞がる思いもした。
体中が重くてすぐには歩けないのに、それでも急いで進まなきゃいけないような、得体のしれない焦りを覚える。真琴の額から、汗が流れた。

会議が終わった後、青いトタンの屋根の楽器倉庫。中に入ってから、治美が真琴に話しかけてきた。
「マコちゃん、顔暗いよ～？　大丈夫？」
「え……そうですか？」
治美が水色の手鏡を真琴の前に差し出した。自分の顔をじっくり見つめる。確かに、目に光が無く、口角もすっかり下がっていた。
口角を無理やり上げて、ひきつり笑いをしている真琴に、治美は諭すように言う。
「そんなに気負わない方がいいんじゃない？」
真琴はひきつり笑いを止め、目を見張りながら治美を見上げた。
治美は、微笑んで話を続ける。
「いくらオーディションがあるからって、暗い気持ちで過ごしていたら、絶対損だって！　自分の今の実力を出しきってやろう！　って気持ちでいた方が、自分にプラスになると思うけどな～」
「確かに……」
後ろ向きの気持ちと、前向きの気持ち。どちらの気持ちでいた方が良いのか、一目瞭然だ。
治美は一瞬、真琴から目を逸らして上を向き、遠くを見つめた。それから、再び真琴に視線を向ける。
「原っち先輩の分も……頑張らないとね～」
真琴は、はっとして目線を上げる。小さく、首を縦に振った。
「そう……ですね」

ここで、会話が途切れた。真琴は、開けたままにしてある扉の方を向き、空を見上げる。

白く光る太陽の上に、陽を覆い隠す程の大きな雲が、ちょうど被さろうとしていた。

2　雨の日のオーディション

空が灰色の雲に覆われ、人が朝から傘を差している日に、オーディションは行われた。

多目的ホールの中から聞こえるファゴットの音を余所(よそ)にして、真琴は、虹館ロビーの窓から外を覗いた。雨が降り注ぐ独特の涼しい音が聞こえる。コンクリートの地面も、普段の薄い灰色から、濃い灰色に変わっていた。

（なんか、憂うつ……）

真琴はため息をつく。オーディションの順番が近づくにつれ、今見ている灰色の風景と、全く同じ気分になっていた。

「マコちゃん、大丈夫？」

真琴の背後から、治美が話しかけてきた。振り向いて、「はい、なんとか……」と答える。本当は、大丈夫ではない。

「とにかく、リラックスだよ！　肩が固くなってるから、解(ほぐ)してね！」

「は、はい」

そういえば、不安と緊張で身体が固まっている感覚があった。真琴は、ゆっくりと肩を伸ばし始める。

数分後。多目的ホールから、ファゴットの音が聞こえなくなった。

「ファゴット、終わったみたいだね～。次はあたし達だよ！」

「そうですね……」

真琴と治美は置いてあったコントラバスを立て、両手で持つ。それから、多目的ホールの扉に近づいた。

あまり待たないうちに扉が開いた。中から、ファゴットの先輩と律が出てくる。すれ違った瞬間、真琴は律と目が合った。

律は足を止め、真琴に向かって小さく口を動かす。その後再び歩きだし、近くにある階段を駆け上がった。

（頑張れ）

微かな声量だったが、確かに律はこう言った。真琴は律の言葉を胸に止めながら、治美に続いて多目的ホールの中に入る。
扉を閉めてから前を向き直すと、少し遠い所に明仁、理沙子、湊太、OBらしき人が座っていた。明仁達の真剣な表情を見て、真琴は、身体が再び固まるのを感じた。
理沙子は、真琴と治美をじっと見つめる。そして、普段以上にきびきびとした声で話し始めた。
「では、これからコントラバスパートのオーディションを始めます。まず、一番の方から弾いてもらいます。一番の方は、前に出てください」
治美が、背筋を伸ばして前に出ていく。真琴には、治美の背中が大きく見えた。
「じゃあ、最初にB♭（ベー）音階を弾いてもらおうか」
治美は明仁の言葉に頷くと、落ち着いてコントラバスを弾き始めた。
（すごいなあ、先輩は……）
治美の物怖じしない態度を見て、真琴は思わず感心する。同時に、心臓の音が大きくなっていった。何となく、苦しいと感じた。

約五分後、治美の演奏が終わった。治美は礼をすると、コントラバスを持って後ろの方に下がっていく。
「次に、二番の方、お願いします」
理沙子の言葉に、真琴の緊張が一気に高まった。
「はい」
真琴は返事をする。一生懸命声を振り絞ったつもりだったが、思ったより小さく、掠（かす）れた声になった。それから、コントラバスを持つ。コントラバスが、いつもより重くなったように感じた。
心臓の音がバクバクと鳴る。さらに、真琴を見つめる明仁達の視線。足が進まない。
（嫌だ、弾きたくないな……）

暗い思いが頭の中を駆け巡る。逃げたい気持ちを抑えて、重い足を引きずった。

何とか明仁達の前に立ち、ぎこちなく礼をした。明仁が口を開く。

「田中と同じように、B♭（ベー）音階をまず弾いてくれ」

「はい」

小さな声で答え、弓を構えた。しかし、心臓の振動がコントラバスに伝わって揺れる。手と足が震えて、体の自由が利かない。自分の身体じゃないような気がしてきた。

（早く、弾かないと）

焦れば焦る程、身体が固くなっていく。明仁達がじっと見つめる。焦る。また、身体が固くなる。悪循環の繰り返しだ。

なかなか弾けない真琴と、真琴を待つ明仁達。部屋中が静まり返っていた。地面に打ち付ける冷たい雨の音が聞こえる。

真琴は、泣きそうになるのを堪えながら、やっとの思いで弓を弦に引っかけた。シのフラットが弱々しく鳴る。次に弾いたドの音も、完全に低くなってしまった。

焦りと緊張が混ざり合って、真琴の頭の中でぐるぐると廻る。次第に、頭が真っ白になっていった。

何もかも解らないうちに、真琴の演奏は終わった。礼をする。早く帰りたいと思った。

湊太が「コントラバスパートのオーディションは終わりです。練習に戻っていいですよ」と言った瞬間、真琴はコントラバスを持って素早く歩き始めた。治美は目を丸くしながらも、真琴について行く。

扉を開けて多目的ホールから出ると、悠輔、信二と鉢合わせした。

「真琴、お疲れ～」

悠輔が手を振る。真琴は精一杯笑って手を振ると、すぐに目を逸らして、再び歩き出した。真琴の背中を、悠輔と信二が見ている気がした。

ロビーの隅に行き、悠輔達の方を見ないようにして、コントラバスを黒いソフトケースに入れた。そして、茶色のローファーに履き替え、玄関を出た。

急いで、濃紺色の屋根になっている楽器倉庫に戻る。毛布と傘でコントラバスを雨から守っていたため、真琴自身は濡れてしまっていた。コントラバスをゆっくり置くと、そのままパイプ椅子に座り込む。

真琴の後を追って、治美も楽器倉庫に入る。

「マコちゃん……？」

心配しているような治美の声を聞いて、真琴は顔を俯(うつむ)かせた。同時に、目頭が熱くなり、涙が頬を伝う。

「すみません……」

何故か、謝罪の言葉が出る。それから、雨と涙で濡れた手を、強く握り締めた。

しばらく沈黙が続いた後、治美は黙って、タオルを真琴の肩に掛けた。

「体、冷えちゃうよ？　これで吹きなよ」

言った後、治美は近くにあったパイプ椅子に腰掛け、静かに教則本を読み始めた。

しばらくして、真琴はタオルを手に取った。顔を少し上げ、はっきりと口にする。

「……ありがとう、ございます」

治美は優しく微笑み、「どういたしまして」とだけ言う。冷たい雨の音は、前より小さくなっていた。

3　灰色の帰り道にて

望実に「最近、元気無いじゃん？」と言われたのは、オーディションから数日後、部活が終わり、二人で帰っている時の事だった。
「え？　……そう？」
目を丸くしながら、望実を見る。視界の隅に映る空は灰色で、太陽は全く見えない。
「絶対元気ない！　何かあったんでしょ？」
望実は、大きなつり目をまっすぐ真琴に向けた。真琴は、思わずどきりとする。精一杯いつも通りに振る舞っているつもりだっただけに、望実に見抜かれて、驚きを隠せなかった。
目をぱちぱちさせ、口をぽかんと開ける真琴に対し、望実は苦笑いしながら「まったく」と口を開き、続けて言った。
「だって真琴、顔に気持ちが出てるんだもん！　誰でも分かっちゃうよ！」
真琴は、顔が赤く染まるのを感じた。そして、自分はやはり気持ちが顔に出てしまうのだと、改めて思い知らされた気がした。もし、「何にもないよ」と嘘をついたとしてもきっとごまかせないだろうと、真琴は考えた。
「実は……この前のオーディションの事で」
「オーディション？　……あぁ、吹コンの奴ね」
望実は眉間にしわを寄せた。
「うん。それで、わたし、大失敗しちゃって……。たぶん、今年はコンクール出られないだろうなって」
望実は腕を組み、何かを考えているかのように黙り込んだ。それから、一気に話し出す。
「まぁ、特に気にしなくてもいいじゃん？　最初は失敗なんてたくさんあるもんだし！　来年だってあるし！」
一端言葉を切った後、望実は再び眉間にしわを寄せ、ぼそりとつ

ぶやいた。
「それに、吹コンはそんなに……」
「え？　何て？」
望実の言った事がよく聞き取れなかった真琴は、もう一度聞き返す。しかし、望実は「何でもない！」と首を横に振るので、何を言おうとしていたのか、結局分からずじまいだった。
「話、変えよ！　あたし、ずっと気になってた事があるんだよね～」
真琴は、いきなり話題を変えようとする望実に違和感を感じつつも、話を蒸し返さない方が良いような気がしていた。素直に「何？」と、望実に話を合わせる。
「引退した和樹先輩と美雪先輩。何で付き合ってないんだろうって、いっつも思うんだよね！」
真琴は思わず、目を見開いた。しばらく声にならなかったが、やっとの思いで「……付き合う？」と声を絞り出す。
「そう！　二人の事は、部の間ですごい噂になってるよ。真琴、知らなかったの？」
「先輩達、仲良いなあとは思ってたけど……」
「真琴、鈍感すぎ！」
望実は笑いながら指摘した。さらに、話を続ける。
「二人なら、佐野先輩と朝倉先輩みたいに、良い感じのカップルになれると思うのになぁ」
「あの、七海高校の？　先輩達も付き合ってたんだ……」
「いやぁ、あれは誰でも分かるでしょ。真琴、どんだけ鈍いの……」
定期演奏会で出会った時の事を思い返してみると、翔と陽乃は常に隣にいた。そして、時々お互いの顔を見ては、楽しそうに笑い合っていた。
「きっと、お互いにとって、すごく大事な人なんだろうね」
真琴の言葉に望実は頷き、「先輩達、すごく幸せそうだったもん」と、微笑みながら口にした。
それからしばらく、真琴と望実は翔と陽乃達、七海高校の事を話

す。「また、会いたいね」と、翔達を思いながら二人で言い合った。
空は、暗闇に変わろうとしていた。

帰宅して、夕飯を食べた後。真琴は、自分の部屋のベッドに寝転がりながら小説を読んでいた。
物語はまさに、最高潮を迎えようとしていた。真琴は、胸が高鳴るのを感じながら、次のページを開こうとする。しかし、タイミング悪く、母の裕美が一階から真琴を呼んだ。
「真琴〜！　お風呂に入っちゃいなさい！」
真琴は裕美の声に一瞬、顔を歪める。物語が盛り上がる時に読む事を止めるのは、嫌な気分である。だから、全く風呂に入る気分では無かった。だが、今入らなければ、裕美と父の真一郎に迷惑をかける……と、真琴は考えた。
「はぁい」
ベッドから起き上がると同時に、一階に聞こえるように返事をした。重い腰を上げて立ち、本にしおりを挿んでベッドの上に置く。本の代わりに、テーブルに置いてあったお茶を持ち、部屋を出てリビングに向かう。
リビングに入ると同時に、テレビから女性キャスターの声が響いた。ちょうど、神奈川県の地元のニュースを放送している様だった。
「こんばんは。神奈川８４５です」
午後八時四十五分という事を表す数字。真琴は、もうこんな時間かと思いながらお茶を飲む。早く飲み干して、台所で洗い物している裕美にコップを渡さなきゃと考えていた。
飲み終わって、台所と浴室へ向かおうと足を動かした時、女性キャスターの言葉が真琴の耳に入ってきた。
「まず、神奈川県七海市で起きた工事現場での事故の速報です」
「七海市……」
すぐに、七海高校の吹奏楽部員を思い浮かべた。思わず、テレビの前まで戻る。普段なら、ニュースを見ずに浴室に行く所だが、今

日は、何となくニュースを見なきゃいけないような気がしていた。
「午後七時五十分ごろ、神奈川県七海市津上町の軍功橋付近の工事現場で、積み上げられていた土砂が崩落し、男子高校生1名が土砂の下敷きになったとの情報が入っております」
男子高校生。その単語を聞いて、先程望実との話で話題に上っていた、翔の顔が頭に浮かんだ。
「男子高校生はすぐにそばにいた友人や通行人に救助されましたが、心肺停止の重体ということです。年齢やお名前はまだ情報が入っておらず……」
そこまで話した所で、女性キャスターが手を止めた。
「たったいま、情報が入りました」
真琴の心臓が、突然大きな音を発した。さらに、頭の中で、黒いもやもやとした物が渦巻く。
テロップが流れると同時に、女性キャスターが、真琴がよく知っている名前を読み上げた。
「高校生のお名前は、サノ　カケルさん。十七歳です」
真琴は、頭の中が一気に白くなるのを感じた。呆然として、テレビをずっと見つめる。もしかしたら聞き間違い、人違いかもしれないとも考えたが、何度見直しても、テロップには「佐野　翔」の字が流れていた。
「真琴。まだお風呂に入ってないの？」
洗い物が終わったらしく、裕美が眉を潜めながらリビングにやって来た。そして、真琴の左手に握ってあるコップを見る。
「あっ、まだコップが残っていたの？　もう、お母さんが洗ってる時に早く渡しなさい……って、あれ。高校生が事故……？」
裕美がテレビに目を向けた瞬間、真琴はコップを裕美の手に押し付け、二階に向かって走り出した。
「真琴！　どうしたの！？」
目を丸くして叫ぶ裕美を見ずに、真琴は自分の部屋に入り、ドアを思い切り閉めた。

4　あたし達に出来る事（前書き）

今回は望実視点です。

4　あたし達に出来る事

「あー、さっぱりした！」
濡れた頭をタオルで拭きながら、望実がすっきりした表情で浴場から出てきた。母の絵里子が、リビングから顔を出す。
「望実。ついさっき、あなたのケータイが鳴ってたわよ～」
「えっ？　……うん、分かった！」
望実は絵里子に返した。誰からだろうと考えつつ、素早くリビングの方に向かう。
リビングのテーブルの上に置いてある、水色の携帯電話を手に取り、開いた。不在着信の欄には、「相原　真琴」の文字がある。
「真琴の方から連絡してくるなんて、珍しいじゃん」
望実はつぶやきながら、真琴の電話番号にかけ直す。すると、呼び出し音が一回鳴っただけで、真琴が電話に出てきた。
「もしもし、望実ちゃん！？」
明らかに切羽詰まっている様子が、声から容易に想像出来た。望実は真琴の焦った声につり目を見開きつつ、訊ねる。
「どうしたの？　そんなに慌てて」
「あの……神奈川８４５のニュース、見た？」
「いや、見てないよ。さっきまでお風呂入ってたから」
「……そう」
いきなり声が小さくなる真琴。「嫌な予感」という言葉が、望実の頭の中に浮かんだ。
「……よく、聞いてね」
真琴が暗い声で語りかける。自分の心がざわつくのを、望実は感じた。それでも落ち着いているふりをして、「何かあったの？」と返した。
「さっき帰り道で話していた、七海高校の佐野先輩が、その、事故に遭って……意識不明の重体……だって」

聞いた途端、望実の身体が大きく震える。頭に乗せてあったタオルが落ちた。

一回電話を切った後。望実は、急いで入った自室のベッドに寝転がりながら考えていた。

（なんで、よりにもよって佐野先輩が……）

望実はやり切れない思いで心が一杯になる。帰り道に話題に出た人が、「また会いたい」と思った人が、まさか事故に遭うなんて思わなかった。

翔の事を考えるうちに、ふと、翔に初めて出会った定期演奏会の時を思い出す。確か、受付で翔のチケットを切ったのが始まりだった。

――よろしくお願いします――

――……あの――

――はい？――

――七海高校の……方ですか？――

――あぁ、そうですよ――

――わぁ！　チケットをいっぱい買ってくれて、しかも、こんなにたくさん七海高校の人が来てくれるなんて、すごく嬉しいです！　ありがとうございます！――

――いっ、いえいえ！　かえって迷惑ちゃうかな。アホみたいに五十六人全員で来て――

――え！？　皆さんで来てくださったんですか！？――

――えぇ。チケットせっかく送ってくださってんから、皆で行かんとアカンやろうってことになりましてね。幸い日曜日やし、みんな都合あってＯＫやったんで――

――ますます嬉しいです！　頑張りますから、是非何か感想とかもいただけると嬉しいです！――

――オッケイ！――

――ありがとうございます！　そういえば、名前は何と言うんですか？　あたしは浜田　望実です！――
――オレは佐野　翔と言います！　浜田さん、よろしく！――

この会話の後、写真コーナーの近くで再び翔達に出会い、その時に陽乃と初めて話をした。そして、陽乃が話している時の翔の様子から、翔と陽乃は恋人同士だと薄々気付いた。それから定期演奏会の後、はるかとメールをする中で、翔と陽乃は校内公認の最強カップルだという事を聞いた。

（あんなに仲が良かったのにこんな事が起こるなんて。朝倉先輩は今、どんな気持ちでいるんだろう）

少し話をしただけの望実でさえ、ふさぎ込む程のショックを受けた。ましてや、翔と非常に近い存在である陽乃は、どれだけ傷付いたのだろう。考えたら、心臓が針で刺されたように、ちくりと痛んだ。

望実は枕を強く抱きしめ、目を閉じた。定期演奏会で出会った時の、翔の笑顔が脳裏に浮かぶ。その瞬間目頭が熱くなり、涙が敷布団の上に落ちた。

（でもあたしには……どうすることも出来ないし）

蒲団が濡れていく。望実はいたたまれなくなり、枕を益々強く抱きしめた。ふいに、望実の枕元から、携帯電話の着信音が鳴り響く。

ゆっくりと手を伸ばして携帯電話を掴む。画面を見ると、「相原真琴」の文字。望実は目を丸くしながら起き上がり、急いで電話に出た。

「もしもし、望実ちゃん？」

「……どうしたの？　また電話を掛けてきて」

「大丈夫？　元気なさそうだけど……」

なるべく普段通りに話そうとしたのだが、すぐにばれてしまった。望実は慌てて「あぁ、うん、大丈夫！」と声の調子を上げる。

「それならいいんだけど……。あの、望実ちゃんと電話した後に、

永瀬君に電話したの。それで、千羽鶴を作らないかっていう話になって」
望実は目をぱちくりさせながら、「千羽鶴？」と問い直した。真琴は「うん、千羽鶴」と答える。
「わたし達に出来る事は、これくらいしか無いけど……。それでも、やるだけやりたいなって」
真琴の言葉を聞いて、望実はただ驚くばかりだった。てっきり、翔については医者に任せるしかない、自分達は何も出来ないと思っていた。そんな望実に対し、真琴と信二は自分達が出来る事を一生懸命話し合っていたのだ。
望実は静かに、「なるほどね」とつぶやいた。治療という点では、自分等は何も出来ない。だが、翔が回復するように、気持ちを込めて祈る事なら出来るではないか。望実は、さっきまで「自分にはどうしようも出来ない」と言ってふさぎ込んでいた事を、情けなく思った。
「それでね、望実ちゃんにも千羽鶴折るの手伝って欲しいって思ってるんだけど……」
「分かった。もちろんいいよ！」
望実は、今度ははっきりと答えた。それから質問をする。
「そういえば、いつ、どこで千羽鶴折るの？　授業後の休み時間とか？」
真琴は最初、「えっと……」と言い淀んだ。数秒間沈黙した後、小さな声でつぶやく。
「出来れば……今日中に折りたい」
「今日！？」
望実は思わず大声を上げた。ベッドに置いてある目覚まし時計を見ると、九時を当に過ぎている。
「今からじゃ、時間遅くない？」
「確かにそう思うけど……。でも、千羽も折るんだよ？　折り紙も千枚必要だし。七海の方に送るのも、一日位かかりそうだし。結構

時間かかるから、今から出来る事を始めたい。永瀬君、もう折り紙を探してくれているみたいだから」
　透き通った声で、きっぱりと言う真琴。普段は控えめな真琴がここまで意見を言うとは、よほど意志が固いのだろうと、望実は考えた。なら、その強い意志を止める理由は無い。
「そっか……分かった！　じゃあ、あたしも今から手伝うよ！」
　言い終えると、真琴は安心したように「良かった……！」と口にした。
「あと、千羽鶴を折る場所なんだけど。さすがに、今からどこかの家に集まって折るのは難しいだろうから、個人個人で……」
「それならあたし、お母さんに真琴達を泊められるか聞いてみる！」
　真琴は「えっ！？」と、驚いたような声を上げた。
「いや、そんないきなり……悪いよ」
「でも、皆で集まって折った方が色々と効率良さそうじゃん？　聞いてみるだけ聞いてみるよ。真琴、お風呂入った？」
「まだ。お風呂入ろうとした時に偶然あのニュースを見てから、全然……」
「じゃあ、先にシャワーでも浴びて、出かける準備しなよ！　あたし、その間にお母さんに頼んだり永瀬に電話したりするからさ」
　望実の言う事に納得したのか、真琴は「分かった。また後でね！」と言い、電話を切った。望実は携帯電話を閉じ、ベッドから飛び降りる。
（あたしも、出来る限りの事をしよう。真琴達のように……！）
　そう決意し、力強い足取りで絵里子の元へと向かった。

5　夜の会合

出発の準備を終えた真琴は、一度望実と合流し、自転車で近くのコンビニへ向かっていた。

「望実ちゃん。本当に、泊まって良かったの？　迷惑かけるのに」

ダークブラウンの髪をなびかせながら、前を走っている望実に訊ねる。

「お母さんが良いって言ったから、いいの！　真琴、制服と明日使う教科書も持ってきたんでしょ？　今更後戻りなんて出来ないんだからね！」

望実は前を向いたまま、普段通りのよく通る声で答えた。ライトブラウンの、跳ねた後ろ髪がリズム良く揺れている。

真琴は「うん、分かった」と返す。それから、どことなく安心感を覚えた。

数十分前に電話をした時は、明らかに動揺し、元気が無さそうだった望実。しかし、再び電話をして千羽鶴の話を持ち出してからは、元気を取り戻したという事が、声の調子から分かった。

今の望実は、普段通りの姿だ。真琴には、望実の背中が大きく見えた。改めて、望実は頼りになる存在だと思う。

「あっ、そろそろ着くよ！」

望実の言葉に、真琴は視線を望実からずらす。すると前方に、煌々と辺りを照らすコンビニの看板が見えた。

そのまま自転車を走らせ、コンビニの駐車場で止める。自転車から降りると、真琴と望実はすぐに入口に向かって走った。

自動ドアが独特の音を立てて開くと同時に、男性店員が「いらっしゃいませ」とお辞儀をした。二人は軽く会釈した後、文房具が置いてある棚へ行く。

「このコンビニには、折り紙あればいいけど」

望実がつぶやきながら、文房具に視線を向ける。真琴も棚を真剣

に見る。すると、正方形の色とりどりな紙が目に入った。
「これって、折り紙じゃない？」
真琴が商品に指差しする。望実がすぐに指の先を見た。
「確かに折り紙！　えーと、これは……三十枚入りかぁ」
「三個置いてあるから、全部で九十枚だね」
「よし！　じゃあとりあえず、これを全部買おう！　」
望実は折り紙を手に取り、素早く店員の元へ行き、買っていった。
数分後。コンビニを出て自転車が置いてある所に着いた時、真琴と望実の携帯電話から着信音が鳴り響いた。望実がすぐさま、カバンから水色の携帯電話を取り出す。
「あ、永瀬からだ！」
真琴が望実の言葉に反応し、慌てて携帯電話をカバンから取り出そうとした。しかし、望実が手で制し、「いいよ。直接読むから」と言う。それから、信二のメールをすらすらと読み出した。
「『俺も泊まりの準備が終わった。今は俺ん家にいる。一度、浜田ん家の近くの公園に集まらないか？　後、折り紙何枚ある？』……だって」
「じゃあ、一回公園に戻る？」
「そうだね。あたし、永瀬にメール返しとく」
望実は慣れた手つきで文字をうち始めた。真琴も改めてカバンから携帯電話を取り出し、開いて操作をする。
「送信完了っと！　真琴、行くよ！」
「あっ、ちょっと待って。……よし、これで大丈夫」
真琴は操作をし終わると同時につぶやき、携帯電話をぱたんと閉じた。
「こっちも送信完了したよ。じゃあ、公園に行こう」
望実は一瞬首を傾げたが、直後に気付いた様子で「あぁ、なるほどね！　うん、分かった」と返した。
自転車を走らせているうちに、外灯に照らされた公園が目に入っ

た。ベンチに座っている人影も見える。
「あれは……永瀬！」
望実の声が聞こえたのか、信二が真琴達の方を見る。それから、公園の入口に向かって走ってきた。
真琴、望実と信二は、入口に同時に着く。自転車のブレーキをかけながら、望実が信二に訊ねた。
「どう！？」
「今で二百枚」
信二は折り紙を取りだし、汗を拭いながら低い声で答える。さらに、「お前達のと合わせて」と、小さな声で付け足した。
「あと八百枚いるよ……」
望実がため息を漏らす。信二も望実を見て、俯（うつむ）いた。眉間には皺が寄っている。まだ折り紙が二割しか集まっていないという事実は、精神的に二人を疲れさせていた。
真琴は二人を交互に見て、何か言わなきゃと直感的に感じた。言葉を懸命に探す。そして、頭に浮かんだ事を、不意に口にした。
「諦めちゃ駄目」
望実と信二が驚いたように、真琴の方に顔を向ける。真琴は二人をまっすぐ見て、自分の今思った事を言った。
「先輩だって、いま頑張ってるんだから！」
思わず言葉に力が入っていた。望実と信二もだが、言った本人が一番驚いた。自分がこんなにも強く声を出す事が出来るなんて、思いもしなかった。
真琴の言葉に目をぱちくりさせていた望実と信二が、気合いを入れ直すように頷いた。信二が叫ぶ。
「よっし！　別の店、行くぞ！」
「オーッ！」
真琴と望実も拳を上げ、力強く叫んだ。
気合いを入れ直し、再び出かける準備をしている頃に、自転車が

公園に向かって走る音が聞こえてきた。三人が音の聞こえる方を見ると、二人の少年が懸命に自転車を走らせている。
「あいつら、やっと来たか」
信二は口角を上げてつぶやいてから、二人に向かって手を大きく振る。そして、再び声を上げた。
「悠輔、律！」
悠輔と律は、信二の呼び掛けに答えるように手を振り、今まで以上に自転車を速く走らせて公園入口前で自転車を止める。同時に、甲高いブレーキ音が鳴り響いた。
「お、お待たせ～」
「遅くなって……ゴメン」
荒く息をしながら声を出す悠輔と律。望実が、「無理しないで、落ち着いて」と促した。
しばらくして、息を整えた悠輔が口を開く。
「すっかり遅れちゃったね。真琴にメールを返す暇も無かったよ～。ごめん！」
真琴に向かって手を合わせる悠輔。律も小さく声を出す。
「オレもメール返せなかった……。遅れた理由もオレにあるし」
真琴は慌てて「いいよ、大丈夫だから！」と、首を横に振る。悠輔と律は真琴の言葉を聞くと、安堵したような表情を見せた。
「言い訳っぽくなるけど、遅れた理由を説明すると……これ」
話しながら、律はカバンの中を探り、取り出した。
「これって、使いかけの折り紙？」
望実が、既に開けられている袋の取り出し口を見て言う。
「うん、そう。……家から持ってきた」
折り紙を見つめる真琴、望実、信二に対して答える律。悠輔が後に続く。
「律が、公園に行く前に家からあるだけ折り紙を持っていこう……って電話してきたんだよね。だから、家に折り紙があるか探してたんだ～」

「だから、家を出るのが遅くなった……。とりあえず、悠輔のと合わせて八十枚程集まったけど……」
律が申し訳なさそうにつぶやく。一方、真琴達三人は目を輝かせて聞いていた。
「お前ら、ナイスだ！」
「すごいじゃん！　あたし、こんな手思いつかなかったよ！」
「二人とも、本当にありがとう……！」
信二、望実、真琴が口々に言う。悠輔、律は目を丸くし、互いに顔を見合わせた。
「そうだよ、買うだけじゃなくて、友達に家にある折り紙持って来てもらえばいいんじゃねーか！」
「何枚集まるかは分かんないけど、いいね、それ！　あたし、友達にメールしようかな～」
「わ、わたしも！」
さらに話が盛り上がる三人。悠輔が「ちょっと！　僕達を置いて話進めないでよ～」と、その場を制した。

悠輔が三人を落ち着かせた後、何とか話し合いを始める。最初に、真琴が質問をした。
「今集まっている折り紙は、約二百八十枚だよね？」
「そうだよ～。で、後八百二十枚程集めなきゃいけないんだよね」
悠輔が真琴に続いて発言した。次に、律が口を開く。
「文房具店はもう閉まっているから、主にコンビニで折り紙を探す……と」
「折り紙を売ってないコンビニもあるだろうし、たくさん回らないとな」
信二が喋った後、真琴が訊ねる。
「何時までコンビニを回るの？」
「あっ、それなんだけど」
すぐに望実が反応した。

「出かける前にお母さんから言われたんだけど、少なくとも十二時までには帰って欲しいって」
確かに十二時位が一番良いと、真琴は思った。自分達はまだ高校生だ。今、夜遅くに外を出歩いている事を望実の母に許されているのが不思議な位なのだ。帰るのが一時、二時以降になったら望実の母は心配するだろう事が、すぐに想像出来た。
「うん、そうだね。あんまり帰るのが遅すぎても、望実ちゃんのお母さんに迷惑かけるし」
真琴は賛成する。悠輔、律、信二も特に異論は無いようだった。
「時間はそれで良いとして……集合場所は、どうする？　浜田の家？」
今度は律が訊ねた。信二が意見を出す。
「いや、一回この公園に集まって、それから皆で浜田ん家行った方が良くねーか？」
四人からは「確かに」「そっちの方がいいね」等、賛成の意見が挙がった。
「じゃあ、望実ん家に行く時間も考えて、十一時五十分に公園集合でどう～？」
悠輔の意見に、四人全員が頷いた。
この調子で話し合いはどんどん続く。友達に、家にある折り紙を持って来てもらうように頼む事。また、集める折り紙のノルマ、女子だけで歩き回るのは危険なので、男子と一緒にコンビニを回る事。そしてその組み合わせ。十分後にはこれらの議題を話し終えた。
「一緒に回る組み合わせは、僕と真琴、律と望実だね～」
「で、俺は一人かよ……。なんか虚しいな」
「しょうがないじゃん～。一人じゃんけんに負けたんだから」
悠輔と信二のやり取りを、律が「はい、そこまで」と制した。
「じゃあ、そろそろ行こうか？」
真琴が言って自転車に乗ろうとしたのを、望実が「ちょっと待って！」と止めた。真琴は首を傾げる。

「さっき三人でやっちゃったから、今度は五人で気合い入れしようよ！　それで、真琴が主導で言って！　言いだしっぺだからねぇ」
「ええ！？」
真琴は思わず声を上げた。すぐに断ろうとするが、律が遮る。
「うん……良いと思う。相原、言ってくれない？」
真琴は口をつぐむ。それから悠輔と信二の方を見ると、二人も期待するような目で、真琴を見つめていた。
仕方がないと、真琴は諦めた。それから、望実、信二、悠輔、律に歩み寄る。四人も真琴に歩み寄って、小さな輪になった。
全員が右手、右足をを前に出す。それを見てから、真琴は深く息を吸う。そして、今までに無い程力強い声を出し、叫んだ。
「折り紙集め、頑張るぞ！」
「オーッ！」
五人の声は、月が雲から顔を出した夜空に響き渡った。

6　夜中の感謝

五人で気合い入れをした後は三グループに分かれてコンビニを回り、無事に十一時五十分に集まれた。そして今、五人は望実の家の玄関にいる。

望実が真琴達四人の前に立ち、呼び鈴のボタンを押す。甲高い呼び出し音が鳴ってすぐに、家の中から「は～い」と、伸びやかな女性の声が聞こえてきた。

鍵を開ける音がした後にドアが開き、ゆるいパーマをかけた女性が姿を現した。その女性――望実の母、浜田（はまだ）　絵里子（えりこ）は微笑み、真琴達に声をかける。

「皆、いらっしゃい～！　もう遅い時間だし、どんどん上がってね！」

望実が真琴達の方を振り向いて「遠慮せず上がって！」と言い、先に靴を脱いだ。四人は顔を見合わせながらも、真琴から順に靴を脱いでいく。

絵里子がリビングに戻るのを見た後、真琴が望実に訊ねた。

「望実ちゃんのお母さん、こんな時間まで起きててくれてたの？」

「うん！　あたしは『家の鍵持ってるから、お母さんは先に寝ていいよ』って言ったんだけどねぇ。そしたら、『先に寝てあたし達をお出迎えしないのは、頑張っている皆に失礼だから』って」

自分が絵里子に迷惑をかけているというのに、それでも絵里子は怒った様子を見せず、笑顔で出迎えてくれた。ありがたいと、真琴は思う。

「望実ちゃんのお母さんって、優しいんだね。……いいなあ」

望実は「そう！？　照れるなぁ」と、まるで自分が褒められたかのように反応し、頭をかきながらも笑顔になる。そんな望実を見て、望実はよほど絵里子を大切に思っているのだろうと考えた。そして真琴は、望実が心底うらやましいと思った。

階段を上り、二階に着いてから、望実は三つあるうちの一番右のドアを開けた。後ろを振り向き、「入って！」と四人を促す。四人は中に入り、望実に誘導されるがままに、オレンジ色のカーペットの上に置かれている丸いテーブルに、輪になって座った。

カバンを置いて落ち着いた後。最初に口を開いたのは、悠輔だった。

「皆、折り紙何枚集まった～？　僕と真琴は約二百枚だよ」

「俺も二百枚だ」

「あたし達は二百十枚集まったよ！」

信二と望実が悠輔に答える。次に、律が続いた。

「今までのと合わせると、集まった折り紙は、八百九十枚。……足りない」

律は唸り、さらに「もうちょっと集まってたら、結構楽になったんだけど……」とつぶやく。

「百十枚は、友達から集めるって事だよね？　……大丈夫かなあ」

真琴は不安を口にした。真琴達が連絡した人皆が、折り紙を持っているという保証は無い。最悪の場合、五十枚も集まらない可能性もある。だから、その事を心配していた。

「まあ、集まんなかったら、また明日コンビニで買えばいいだろ。その場合、七海市に送るのが遅くなっちゃうけどな」

信二が真琴に答える。そこに、律が声を挟んだ。

「でも……相原は、明日七海市に送りたい……んだっけ？」

「うん……出来れば」

悠輔がすぐに首を傾げ、「何で～？」と訊ねる。真琴は理由を言おうとしたが、ふと、千羽鶴を作ろうと信二に提案した時の事を思い出し、顔が固くなった。返答に困り、口をもごもごさせる。

思えば、信二に電話した時、無意識のうちに「千羽鶴を、明日七海市に送りたい」と言っていた。だから、理由らしい理由は無かった。無理に後付けの理由を言葉にするなら、「何となく、早めに送った方が良いと感じた」事である。

明後日じゃ、少し遅いような気がしたのも理由にある。だから、早く送ろうと躍起になって、今まで無我夢中で行動していたが、よく考えたら、なんで明日に送ろうと考えたのか解らない。別に明日で無くてもいいではないか。どうして明後日では遅いのか。

そもそも、四人をわざわざ誘わなくても、今日の夜は、千羽鶴を一人で作っても良かったではないか。そして、明日に「千羽鶴を作ろう」と誘えば良いのだ。普通は皆そうするだろう。

だが、真琴は今日の夜に四人を誘い、しかも「明日送りたい」と無理を言って、折り紙を集め、折っている。今考えると、どうしてこんな事が出来たのか解らない。真琴は、勘と勢いだけで話を進め、四人を巻き込んだ事に、今更ながら後悔していた。

四人が不思議そうに見ている中、真琴は眉を潜め、口を閉じていた。自然と冷や汗もかく。皆怒るかもしれないから、理由を話したくなかった。

沈黙に耐えきれず、思わず目を閉じる。その直後、望実が口を開いた。

「まぁ、真琴も色々考えて明日に送ろうって思ったんだろうし、明日で折り紙が千枚集まったら問題無いんだから、明日送れる！　集まんなかったら、またその時考えればいいじゃん？」

真琴は思わず目を見開き、望実の方を向いた。違う、実はそんなに考えてない……と言いたかったが、声が出ない。

「確かにそうだね～。千羽鶴を送る事については、真琴の希望もあるし、明日を目標にしよう！　千枚集まらなかったらまた考えようか～。真琴、それでいい？」

真琴は口をぱくぱくさせていたが、悠輔に訊かれて、慌てて頸を縦に振った。

「じゃあ、明日に間に合わす為に、折り紙折るか！」

信二が切れ長の目をさらに細め、笑顔で提案する。律も頷き、「……そうだな」と口にした。

信二の言葉をきっかけに、望実、悠輔、律が折り紙を折り始める。

真琴は、完全に話す機会を逃してしまった。
黙々と折り紙を折る四人を見つめる。だがしばらくして、諦めたかのように視線を反らし、罪悪感を持ちながら折り紙を折り始めた。
折り紙を三角に折る。また三角に折る。袋になった所に手を入れ、四角に折る。裏側も同じように折る。それから、折り筋に合わせて折る。裏側も同じ。そして、ダイヤの形が出てきた所で、まぶたが重くなってきた。
まぶたを閉じた瞬間、真琴の意識が飛ぶ。右に倒れ、望実に寄りかかる寸前ではっと気が付いた。素早く体勢を立て直す。
目を擦りながら前を見ると、四人が驚いたようにして真琴を見ていた。望実が、つり目を大きく見開きながら訊ねる。
「真琴、眠い？　一回仮眠すれば？」
望実の後に、悠輔、律、信二が次々と口を開いた。
「大丈夫〜？　無理しないでよ」
「十五分位、寝れば良いと思う……。だいぶ、すっきりするから」
「今まで、俺らも仮眠したからな。相原はまだ寝てねーんだから、遠慮せず寝ろよ」
望実のベッドに置いてある時計を見ると、針は二時半を差していた。普段なら、もう寝ている時間だ。仮眠しようかなと、真琴は一瞬考える。しかし、四人への罪悪感が真琴の頭を掠めた。すぐに思い止まる。
真琴は頸を横に振った。精一杯笑顔を作って、続けて口にする。
「ううん、わたしはいいよ。大丈夫だから」
四人は目を丸くした。望実が声を上げる。
「いやいや！　大丈夫じゃないじゃん！　さっき、寝そうになってたし」
「やっぱり、休んだ方が良い、と思うけど……」
律が真琴を諭すように話す。だが、真琴は二人の言葉を振り切るかのように、再び頸を横に振った。

「一回寝たら朝まで寝ちゃいそうだし、時間がもったいないよ。わたし、頑張って起きるようにするから」
四人は、真琴の話を黙って聞く。少しの間の沈黙。それから、信二が真琴に疑問を投げ掛けた。
「相原は、何でそんなに頑張ろうとするんだ？」
悠輔も、丸っこい目を真琴に向け、寂しそうな声で話した。
「真琴、絶対無理してるよ。……もしかして、僕達は頼りにならない？」
悠輔の言葉を聞いて、望実、信二、律が寂しそうな顔をする。思わぬ展開に、今度は真琴が目を丸くした。無意識に声を上げる。
「頼りにならないわけないよ！」
固まる四人。だが、真琴の勢いはまだ止まらない。思わず立ち上がった。驚くように四人は真琴を見上げる。
言うのを止めようとは思った。しかし、望実の家に着いた時から育っていった罪悪感を、これ以上溜める事が出来なかった。さっき言いそびれた事も含めて、真琴は一気に吐き出す。
「でもわたし、ちゃんとした理由も無いのに、こんな夜遅くに皆を巻き込んだんだよ！　特に、鈴木君と藤本君は七海高校と関係無いのに、人数欲しいからって理由で巻き込んだ！　わたし、思いっきり迷惑かけたから、せめて、皆より頑張ろうって……思った、だけ……」
ここまで言いかかった所で、目頭が熱くなった。そして、目から溢れた涙が頬を伝う。その涙が足に落ちて靴下に染み込んだ直後、真琴はへなへなと座り込んだ。
戸惑うように、そして心配するように真琴を見つめる四人。沈黙が流れる。
置時計の長い針が動いた時、最初に話し始めたのは、意外にも律だった。
「オレ……相原が迷惑かけたなんて、思った覚え無いんだけど……」
真琴が、「え……？」とつぶやきながら、律の方を向いた。

「確かにオレは、七海高校とは何の関係も無い。……けど、七海の部員が虹西の定演に来てくれた事は、知ってる。七海の人が相原達の知り合いだって事も。……仲間の知り合いが重体だって言うから、じゃあ、オレも出来る事を手伝おう……って思った。それだけ」
律は、黒ぶち眼鏡の奥にあるまっすぐな瞳で真琴を見据えて、一言一言、噛み締めるように言った。真琴は、無口気味の律が普段より多く話した事に驚いたが、それ以上に、律の言葉が真琴の身体に染み渡っていた。
「僕も、律と同じ気持ちだよ」
今度は、悠輔が静かに話し出す。
「真琴達の知り合いが事故に遭ったと聞いて、自分の事のように感じたんだよね。友達の知り合いだからかな～。で、千羽鶴作りを手伝って欲しいって真琴に頼まれた時、なんか頼られているみたいで、すごく嬉しかったんだ～」
微笑みながら話す悠輔を見て、真琴の心が暖まったような気がした。
「相原。俺に電話した時の事、覚えてねーのか？」
信二がいきなり訊ねる。真琴は意味がよく分からず、きょとんと首を傾げた。
「千羽鶴を作ろう、明日七海市に送ろうって言い出したのはお前だけど。俺が『浜田にも頼んで今から折り紙集めよう』って言った。それに、三人じゃ間に合わないから悠輔と律にも頼むかって聞かれた時、俺は真っ先に賛成したんだ。だから、お前一人が巻き込んだ訳じゃねーよ」
淡々と話す信二。だが、その言葉に優しさが含まれている事に、真琴はすぐに気付いた。
「巻き込んだのは、真琴と永瀬だけじゃないんだからね！」
最後に、望実が声を上げる。
「皆で集まって折ろうって言ったのはあたしだもん。それに、お母さんは真琴の事、『行動力があって素晴らしい』って褒めてたよ。

だから、真琴は皆に迷惑かけたなんて思わなくていいの！　後は、えーと……」
望実は一回言葉を切り、言い淀む。皆が望実に注目する中、意を決したように、大きなつり目で真琴を見つめ、再び口を開いた。
「真琴が千羽鶴を作ろうって言ってくれなかったら……あたし、ずっと落ち込んで、ただ先輩が回復するのを待つ事しか出来なかったと思う。だから、真琴には感謝してるの！」
話し終わった後、望実はとびっきりの笑顔を見せた。その瞬間、真琴の目から涙が流れる。嬉し涙だ。
先程までは、本当に罪悪感を感じていた。しかし、絵里子や律、悠輔、信二、そして望実は、真琴の勢いだけの行動を迷惑だとは言わなかった。むしろ嬉しいとさえ思ってくれている。五人には、感謝してもしきれないと思った。
笑顔で真琴を見つめる四人を見渡す。真琴は涙を拭き、笑顔になって感謝の言葉を口にした。
「皆。……ありがとう！」

あれから、しばらく折り紙を折り続けて、八百九十枚全てを折り終わった後。悠輔と律はオレンジのカーペットに寝転がり、真琴、望実、信二は自然とテーブルに顔をうつぶせ、眠っていた。
暗かった空が、次第に明るくなる。陽の光が、真琴達を包み込んだ。その直後、微風が真琴達の頭の上に吹き込まれる。
（……うーん？）
真琴は何かの気配を感じて、目を覚ます。寝ぼけ眼で辺りを見渡すが、眠り込んでいる望実達以外、誰もいない。
「……気のせい？」
窓も閉まっているため、風が吹くはずも無い。やはり、自分が間違えているのだろうかと、真琴は考える。
（でも）
心の中で反論する。確かに感じたのだ。暖かい存在を。

そう思い直してすぐ、望実が「先輩……」と口にした。真琴は突然の事に驚き、のけ反る。心臓も大きな音を立てた。
数秒して落ち着いてから、真琴は体勢を立て直し、望実の顔をじっと覗いた。どうやら寝ているようだ。さっきのは寝言だろう。そんな事を思った直後、再び望実が言った。
「良かった、元気になって……」
真琴は目をぱちぱちさせながら、望実を見る。望実は、優しく微笑んでいた。幸せそうな笑顔だと、真琴は思う。そして、望実が寝言を言い出したのは、あの微風が通った後だった事を思い出した。
（さっきの風はもしかしたら、佐野先輩なのかも）
そう考えたら、真琴も自然と頬を緩ませ、微笑んでいた。

7　友人、回想、そして……

月曜日の朝。真琴が三組の教室に入ると、窓側の一番前の席に座っている、二つにくくった黒髪の少女が目に写った。
その少女、青木香奈は真琴に気が付くと、にこりと微笑んで手を振ってきた。真琴は、急いで香奈の元に駆け寄る。
「まこちゃん、おはよう！」
笑顔で挨拶をする香奈。真琴もすぐに「おはよう！」と返す。その後、香奈が「あの……」と言いかけ、黙った。
「何？」
真琴は不思議に思いながら訊ねる。香奈は、「えっとね」と言い淀んだ。数秒間が空いた後、言いにくそうに話し始める。
「今、訊いてもいいのかな～って思ったけど……結局、あの先輩の件は……どうなったの？」
真琴は一瞬きょとんと首を傾げたが、すぐに「佐野翔」の事を訊いているのだと解った。
「佐野先輩の事なら、もう大丈夫だって！」
目を大きく見開く香奈。真琴は、微笑みながら話を続ける。
「わたし達が千羽鶴を送った次の日の夕方に、先輩は目を覚ましたって、知り合いの人から聞いたんだ」
「……そっか！　良かった～！」
香奈は目を輝かせ、本当に嬉しそうな顔をした。そんな香奈を見て、真琴も頬を緩ませる。
「香奈……ちゃん。あの時は、折り紙を持ってきてくれてありがとうね。本当に感謝してる」
真琴は、香奈に向かってお辞儀をした。香奈は「そんな、大した事はしてないよ～」と返す。言葉の調子から、照れているのだと分かった。
真琴が顔を上げた時、ちょうど、柔らかい雰囲気を持った少女―

―真琴と同じ吹奏楽部員でクラリネット吹きの、高橋恵が教室に入って来た。恵は真琴達に気付き、すぐに「おはよ～」と言いながら駆け寄る。真琴と香奈も、手を振りながら挨拶を返した。
「めぐちゃん。佐野さん……っていうまこちゃんの知り合い、金曜日に回復したんだって！」
嬉しさがにじみ出ている香奈の言葉を聞き、恵が目を丸くした。
「それって、本当～？」
柔らかい、ふわふわとした声で訊ねる恵。真琴は大きく頸を縦に振る。それを見て、恵は柔和な笑みを浮かべた。
「回復して、本当に良かった～。夜遅くにまこちゃんが切羽詰まったメールを送ってきてから、ずっと気になってたんだよね」
「そうそう。でも、無事折り紙が集まって、千羽鶴を送れたし、まこちゃんの知り合いの人も回復したし。これで、一件落着かな～？」
恵、香奈が声を弾ませる。真琴はそんな二人を見て、改めて感謝の気持ちが湧いてきた。
翔が事故に遭った日の夜、真琴は香奈と恵にメールを出していた。内容は、「知り合いが事故に遭って意識不明の重体だから、千羽鶴を贈りたい。もし、家に折り紙があったら明日持ってきて欲しい」というもの。夜遅くにも関わらず、二人は折り紙を探し出し、次の日、真っ先に真琴に渡してくれたのだ。
真琴は、まっすぐな瞳で二人を捉え、再び感謝の言葉を口にする。
「二人とも。折り紙集めに協力してくれて、本当にありがとう！」
香奈と恵は微笑んで、「どういたしまして～」と返した。そして、香奈が「それにしても」と口を開く。
「まこちゃんはいざという時、すごく積極的に行動するよね」
香奈が、話題を真琴に移した。真琴は、突然自分の事を言われ、目を大きく見開いて香奈の方を向く。
「わたしもそう思う～！　まこちゃんが最初に千羽鶴折ろうって言って、バスパートの人を集めてその日のうちに鶴を折り始めたんでしょう？　望実から聞いたよ～」

「うわぁ……望実ちゃん、話しちゃったんだ」
恵の言葉を聞いて、真琴は気恥ずかしくなる。同時に、翔が事故に遭った日の行動が脳裏に浮かんできた。

ニュースを見てから、急いで自分の部屋に閉じ籠った後。とりあえず、翔と交流があった望実に電話をかけた。しかし、望実は電話に出ず。数分後、望実から電話がかかってきたのですぐに出た。
翔が意識不明の重体だと話すと、望実は明らかに動揺した様子だった。しばらく時間を置いて落ち着かせる為、一回電話を切る。次に、七海高校吹奏楽部の人と交流があると思われる信二に電話をかける。
翔の事を話すと、信二は驚いたような声を出す。その後確か、「慎也先輩の友人が……」と言っていた気がした。
何も話せずに、黙る二人。自分から電話をかけた手前、話題を出さなければと焦る。そして、とっさに思った事を言う。
――永瀬君。……あの、佐野先輩に何か贈れないかな……？――
――えっ、贈り物……か？――
――うん、そう。例えば――
意識不明、重体の患者に贈る物を、一生懸命考える。いつ目覚めるか分からないから、果物はまず駄目だろう。食べ物以外がいい。
食べ物以外と考えた時、頭に浮かんだのは鶴であった。ニュースを見る前に読んでいた小説に、鶴が出てきていたからだ。
――例えば、鶴……そうだ、千羽鶴！――
鶴から連想した「千羽鶴」は、すぐに信二に受け入れられた。それから、信二が真琴に訊ねる。
――明日鶴を折って、明後日七海市に送るのか？――
――いや、出来れば明日送って、明後日七海に届くようにしたいんだけど――
信二は真琴の言葉を聞いて、驚いたような声を上げた。「そんなに急がなくてもいいんじゃねーか？」と指摘する。

確かに、信二の言う通り、明日一日を使って鶴を折り、明後日送った方が時間に余裕がある。しかし真琴は、明明後日に七海市に届くのでは、遅いかもしれないと感じていた。

――わたし、なるべく早く送った方が良い気がしたんだ。何となく、だけど――

言葉を切った後に訪れる沈黙。信二が何も言わない事に、真琴は慌てた。

――でも、さすがに明日に送るのは無理あるよね！　明日送るなら、今からやらないといけないし。じゃあ、やっぱり――

――ん……いや。どうせなら、今から行動するか？――

真琴は、信二の言葉を聞いて「えっ」と声を漏らした。まさか、本当に真琴の主張に乗ってくれるとは思わなかったからだ。

――鶴を折るなら、まずは折り紙を集めなきゃいけねー。そーすると、明日からじゃすげー時間かかるだろうからな。なら、今から折り紙をなるべく集めて、出来るだけ折れば……明日に送れるかもしんねーだろ？――

信二の会話を、目をぱちぱちさせながら聞いていた真琴。聞くうちに、嬉しいという気持ちを感じる。「何となく」という理由での主張に乗ってきてくれた信二には、感謝の気持ちで一杯だった。

その後、二人はこれからの行動について話し合った。真琴は望実に電話をかけ、千羽鶴作りの手伝いを頼む。信二はその間、先にコンビニを回り、折り紙を出来るだけ集める。結果、話はそんな感じに決まった。

――そうだ。ちょっと思ったんだけど――

信二が、「何だ？」と訊ねた。

――望実ちゃんが手伝ってくれたとしても、三人じゃあ折るの大変そうだから……鈴木君とか藤本君とかに手伝ってもらえる事は出来ないかな？――

――お、それいいんじゃね？　じゃあ、二人にも連絡しておいてくれねーか？　三人に連絡したら、また俺に電話してくれ――

信二との電話を切った後、真琴は望実に再び電話をかける。望実が、家に泊まって一緒に折ろう、といった事を言った。その次は悠輔と律に電話をかける。

――わたしと望実ちゃんの知り合いが、事故で意識不明の重体ってニュースで聞いて……。それで、その人に千羽鶴を贈ろうとしてるんだけど、人手が足りない。出来れば、手伝って欲しい――

そんなような事を二人に話すと、どちらも「手伝う」と答えてくれた。そして、出来れば早めに送りたいと言ったら、夜の折り紙集めに合流してくれる事になったのである。

（その後に、望実ちゃんから電話がかかってきて、望実ちゃんの家で折り紙を折って良いって言われて。また、三人に電話して、それから……）

「まこちゃん！」

香奈の声に呼び戻され、はっと気づいたように顔を上げる。目の前には、真琴をじっと見つめている香奈と恵がいた。さらに辺りを見渡すと、いつの間にクラスメイトが増えたのか、教室が話し声でにぎわっている。

「もう、何度呼んでも全然気づかないんだもん～。まこちゃん、いきなりどうしたの～？」

恵が真琴に訊ねる。香奈も同じ事を聞きたかった様で、恵の言う事にうんうんと頷いていた。

「あ、ちょっとあの時の事を思い出していて……ごめんね？」

真琴は両手を合わせて、頭を下げて謝った。

「あの時って、夜に折り紙を集めて千羽鶴を折った時の事？」

香奈の質問に、真琴は頸を縦に振る。

「思い出してみると……わたし、かなり無茶な提案したなあって。ただのカンで、千羽鶴を一日で折って七海市に送ろうなんて言ったんだもん。しかも、関係ない人まで巻き込んでるし……。今考えると、あんな行動はありえないなあって思う」

相槌を打ちながら聞く二人。真琴の話が終わると、香奈が口を開いた。
「確かに……普通は、もうちょっと時間に余裕を持たせて鶴を折って、送ろうとするよね」
真琴は委縮しながら「はい……」と返す。自分の行動は変だったのかも、と思い、体が縮こまった。
だが、香奈の話はこれで終わらなかった。
「でも、早く送った方が良いかもって、まこちゃんは思ったんだよね？　そのカンは当たっていたんでしょ？」
真琴は目を見開いた。恵が「そうだよね～」と、香奈に続いて話す。
「佐野さんって言う人、金曜日に目を覚ましたんだよね？　もし、まこちゃん達が木曜日に送らなかったら、千羽鶴間に合わなかったじゃん～」
確かにそうだ、と真琴は思った。
「だから、今回は逆に早く行動して良かったんじゃない？」
「それに、『終わり良ければすべて良し』って言うしね～。望実達も特に気にしている様子無かったし、気に病む必要無いと思うよ～」
香奈、恵が、笑顔で真琴を諭す。真琴は、二人の話を聞いて、心が軽くなった気がした。
千羽鶴を送った後も、四人は真琴を責めなかったとはいえ、やはり自分のわがままに付き合わせた事を気にしていた。また、何となくのカンで行動した事を恥ずかしいとまで思った。しかし、香奈と恵の言葉を聞いて、そんなに気にする事は無いのだと思えるようになった。
真琴は二人を見つめて微笑む。そして、「ありがとう」とつぶやいた。
千羽鶴の話が一通り終わった後、しばらく雑談をしていた三人。しかし、香奈が何かを思い出したかのように「あっ」と声を上げ、

鞄の中を探し始めた。
「どうしたの？」
真琴は不思議に思い、香奈の顔を覗き込んだ。恵も、首を傾げながら香奈を見ている。
「今日の五校時の理科Ａ、自主学習になったじゃん？　でも、その時間にやる予定だったドリル、家に置いてきちゃったかもって思って……。案の定、忘れてきちゃったよ～」
「そうか～。これはどんまいだね……。教科書使って勉強するしかないんじゃないかな～？」
恵が、心底残念そうに言う。一方、真琴は話がいまいち分からず、きょとんとしていた。
「あの、さ」
香奈と恵が、真琴の方を一斉に向く。
「今日の理科Ａって、自学だったっけ？　授業無くなるのは嬉しいけど」
今度は、香奈と恵がきょとんとした表情になった。それから、恵が口を開く。
「真琴ちゃん。先週の木曜の授業で、先生言ってたじゃん～。来週月曜の授業は自学だって。ちなみに、木曜日も自学って言ってたけど～」
「えっ、そうだったの？　全然聞いてなかった……」
心の中で（授業中、ずっと鶴折ってたからなあ）と付け足す。思わず、冷や汗が出てきた。
「あと、真琴ちゃん！　『授業無くなって嬉しい』なんて言ってる暇はないよ～！」
気迫のある香奈の言葉にたじたじとしながらも、「何で？」と訊ねる。すると、香奈が叫んだ。
「だって、来週定期テストがあるじゃん～！」
香奈の言葉に、真琴は固まった。先程より、さらに冷や汗が流れる。教室のざわめきも、一瞬聞こえなくなった気がした。

恵が、引きつっている真琴の顔を見ながら、恐る恐る訊ねた。
「真琴ちゃん……。もしかして、定期テストの事を……」
恵が言い終わる前に、真琴はロボットのように硬く、頷いた。

8　落ち込んで、乗り越えて（前）

七月。蒸し暑さがさらに増す頃に、定期テストは行われた。
鉛筆で書く際に起こる摩擦音が、教室に響く。一見静寂しているようだが、しかし、よく周りを見渡すと、壁時計をちらちら見て、落ち着かない様子の者が何人かいた。
時計の長針が「１０」を指した。すぐに、テストの終わりを示すチャイムが鳴る。吹奏楽部の顧問である葉山　明仁が「回答、止め！」と言った瞬間に、教室内はざわめきで溢れた。
「じゃあ、一番後ろの席の人、答案用紙を集めて前に持ってこいー」
明仁の言葉を聞いて、後ろの席の人が立ち上がった。素早く答案用紙を集めていく。
答案用紙を生徒からもらうと、明仁は「そしたら、先生が帰ってくるまで、待機してくれ」と命じた。それから、ゆったりとした様子で教室を出ていく。一気に、教室中が賑やかになった。
「まこちゃん！」
後ろから声が聞こえたので振り向くと、香奈が手を振りながら、真琴の席に近づいてきていた。真琴も手を振り返す。
「私、テストあんまり出来なかったかもしれないよー。まこちゃんはテスト、どうだった？」
答える前に思わず、顔がひきつってしまう。そして、一瞬では言葉が思い浮かばずに、口をもごもごさせた。香奈は、そんな真琴の様子に、きょとんとした表情をした。
真琴が、何を言おうかと思考を巡らしている所に、恵がふんわりとした雰囲気を出しながら、真琴の席へとやって来た。
「二人とも～、テストお疲れ～」
「めぐちゃん、お疲れ。テストはどうだった？」
香奈が恵に訊ねると、恵は困ったように微笑んだ。
「う～ん、あんまり自信ないな～。二人は？」

「私もそんなに出来なかったなー。暗い表情をしているから多分、まこちゃんも……だよね？」
いきなり話を振られて、真琴は一瞬胸が飛び上がるのを感じた。慌てて、こくこくと頷く。
「そうか～。……でも、これからまた部活し放題って思ったら、なんか嬉しくならない～？」
真琴は顔を上げた。恵の、心底嬉しそうな笑顔が目に写る。
「確かに、部活が出来るのは嬉しいね。そう思ったら、なんか解放感が出てきたかも……！」
視線を移すと、目を輝かせ始めた香奈が見えた。さらに、恵が楽しそうに話す。
「今日からまた、クラリネットが吹ける～」
「私も、歌い放題出来る！　ああ、早く放課後にならないかな」
真琴はたじたじしながら、二人を交互に見る。と、ちょうどその時、担任の女の先生が教室に入ってきた。今まで友達との話で盛り上がっていた生徒が、次々に自分の席へと戻っていく。
（じゃあ、また後で）
香奈と恵は真琴の耳元で囁き、手を小さく振りながら戻っていった。
しばらくして、先生の話が始まった。しかし、真琴は上の空で、話が全く耳に入らない。頬杖を突きながら、先程の香奈、恵の会話を思い返す。
（解放感……。わたしは感じないなあ）
普通なら香奈のように、テストが終わった後の気持ちは解放感で一杯のはずだ。しかし、真琴はそうは感じなかった。逆に、重たい塊が胸につっかえているような気がしていた。
さらに真琴は、部活に出られるのを、二人が嬉しそうに話していた事を思い出す。
（部活……。もうすぐ、吹奏楽コンクール……）
思わず、ため息をついた。

9　落ち込んで、乗り越えて（後）

放課後。昼飯を三人で食べた後、香奈は「途中まで一緒に行こう」、恵は「部活行こうよ」と、真琴を誘った。真琴は、「用事があるから」と断る。教室で真琴達は別れ、香奈と恵は先に行った。

二人の姿が見えなくなったのを確認した後、真琴もゆっくりと歩き出した。南館四階から一階へと続く階段を降りていく。

本当は、予定など何も入っていなかった。嘘をついていた。真琴は階段を降りながら、（二人とも、ごめん）と、心の中で呟く。自分の顔の眉が下がっている事を感じた。

二階まで降りた時、外から、一際大きい数十人の返事が聞こえてきた。聞き慣れた声に、心が引き摺られるような、後ろめたい気持ちになる。それでもつい気になってしまい、自然と、北館と南館を結ぶ渡り廊下の窓へと向かった。

窓から外を覗くと、相変わらず古びた吹奏楽部の部室が見える。更に、視線を下に移した。何故あるのか分からないと評判の庭園が目に写る。庭園の側には、大きい返事の元である、吹奏楽部員が大勢集まっていた。綺麗に並んでいる部員達の前には、部長の理沙子が立っていて、話をしているようだ。真琴が居る所からは、理沙子が何を話しているか分からない。

真琴は部員達を見て、もう、部活が始まる時間なのかと、おぼろ気に思う。いつの間にか、足がその場に留まっていた。

部長である理沙子の話が終わったのだろう。副部長の湊太がどこからか号令を掛ける。部員達は気合いを入れるように返事をした後、それぞれ別々の方向へと歩き出した。その光景を見て、真琴は一層、憂鬱な気分になった。

（部活、どうしよう）

漠然と考える。本来なら、恵と一緒に行き、部活に出るべきだったという事は分かっていた。だが、恵に誘われた時、考えるより先

に口が動き、誘いを断っていた。
今は、鉛が背中に乗っているように身体が重いと感じている。何となく、出たくない。こんな思いが、真琴の頭を掠めた。遅れてでも部活に行くとは考えられず、だからといって帰る気にもなれず、ただ、その場に佇んでいた。

どの位時間が経ったか分からない。目に写っているもののどれにも焦点を合わさずに、外をぼんやりと見ていると、男性の野太い声が耳に入ってきた。
「相原、か？　どうした、こんな所でぼーっとして」
真琴は、声が聞こえた左後ろの方へと振り向く。するとそこには、吹奏楽部の顧問である、明仁が立っていた。
「あ……メイジン……」
「そのニックネーム、相原から聞くのは初めてだな」
明仁は目を丸くしている。真琴は、一瞬きょとんと首を傾げたが、すぐ後に、ニックネームで明仁を呼んでいた事に気付いた。しまった、と心の中で叫ぶ。
「すみません、つい……」
和樹や智貴、治美等の先輩部員は、明仁を「メイジン」と呼んでいた。先輩部員を見てきた真琴も、次第に心の中でメイジンと呼ぶようになっていた。それが今回、本人の前で口に出てしまった。
「いや、いい。今まで沢山呼ばれてきて、いい加減慣れたからな」
満更でもなさそうな明仁の照れ顔に、真琴は安心したようなため息をついた。明仁は真琴をもう一度見て、「話は変わるが」と、話題を変えてきた。
「なんですか？」
「相原、何かあったのか？」
心臓が飛び上がった気がした。何か言おうとしたが声が出ず、口をもごもごさせる。
明仁が、続けて言った。

「いや、いつも真面目に部活に出ている相原が、こんな時間になってもまだここにいるのが、珍しいと思ってな。それに相原、テストが終わった後も、なんか神妙な顔をしていたからなー」
真琴は明仁の話を聞いて、意外な所で人に見られているものなのかと、目を見張った。
「そうです……ね。確かに、ちょっと、あります」
「……もし良かったら、俺に話してくれないか？　話す事で楽になれる事もあるぞ」
真琴は何も言えず、唇を噛んだ。自分の胸の内を話すのは勇気がいるし、抵抗も感じる。一方で、自分の気持ちを吐き出したら気が楽になると言うことも、前回の経験で分かっていた。話すか話さないか、頭を悩ませる。
真琴が黙り込んでからしばらくして、明仁が「嫌だったら、無理に話さなくていいぞ」と諭した。真琴は、直ぐ様明仁を見る。明仁の真摯な態度を感じ取ると、意を決して、「いえ」と返した。
「やっぱり……話し、ます。本当に、下らない事ですけど……」
「何を話してもいいんだ。後、焦って話さなくていいからな。ゆっくりでいいぞ」
明仁の言葉を受けて、真琴は言葉を選びながら、少しずつ話し始めた。
「実は……今回のテスト、失敗したんです」
黙って頷く明仁。さらに、真琴は話す。
「わたし、何故か定期テストの事を忘れてて。気付いたの、一週間前だったんです。それから、慌ててテスト勉強を始めたんですけど……上手く、いかなくて」
明仁は、真琴の話を聞きながら、相槌を打つ。別々の音を吹いている楽器の、混沌とした音が、真琴が立っている所にまで届いた。
「何とか頑張って勉強しようとしたんですけど、思ったより範囲広くて、とてもやりきれなくて……。苦手教科はお手上げでした」
「なるほどな」

「中学の頃は、苦手科目もそれなりに出来てたんですけど、今回は全く解らなくて、頭真っ白になって……絶対、中学より成績悪くなったから……なんか、ショック受けちゃって」
「で、衝撃の余り部活まで休んでしまったと」
真琴は、明仁から目を逸らし、小さく頷いた。
「そうか……」
明仁は手を口に当て、考える素振りを見せる。それから、真琴に視線を向けて、口を開いた。
「俺の勝手な考えだが……相原が部活を休んだのは、テストが上手くいかなかったという理由だけではないんじゃないか？」
真琴の心臓が、再び音を立てた。
「相原は、いつも楽しそうに部活に出ているからな。普段の相原なら、テストがちょっと出来なかったからと言って、部活まで休むような事はしないと、俺は思うんだ」
心臓の音が大きくなっていく。冷や汗まで出てきた。
「もしかして、相原は部活についても、何か悩みを抱えているんじゃないかと思ったんだが……どうだ？」
真琴は何も言えず、また、明仁と目を合わせられなかった。今、明仁の目を見たら、真琴の考えている事の全てを見透かされそうな気がしたからだ。
明仁は、真琴の不自然な態度から、自分の言った事が合っていると分かったのだろう。再び「そうか」と言った。だが、それ以上は真琴に何も訊ねようとしなかった。
真琴はてっきり、色々訊かれると思っていたので、明仁がそのまま黙りこんだのを「あれ？」と感じた。びくびくしながらも、明仁に目をやる。明仁は優しい瞳で、ただ窓の向こうの景色を眺めていた。
何となく安心感を感じて、真琴も外を見ようとする。その時、不意に聞こえてきた弦の響きで、真琴の動きが止まった。
「この音は……先輩？」

「田中だな。倉庫の中が暑いから、日影のある場所に移動したんだろう」
真琴の呟きに、明仁が外を見たまま答えた。
治美は、しばらくチューニングをしているようだった。それが終わると、次に音階の練習を始めたようで、シのフラット、ド、レ……とまっすぐ音を伸ばしていく。
（オーディションの時、音階を弾くのも上手くいかなかったなあ）
思わずため息をついてしまう。一方、明仁も治美の音を聞いて、何か思う事があるかのように唸った。
治美は、いつもよりも早く音階練習を終えると、今度はコンクールの自由曲を練習し始めた。真琴はいち速く曲に反応し、口を開く。
「わたしもこの曲、弾きたかったな……」
声に出した後で、はっと気が付いた。つい、本音を口にしてしまった。恐る恐る、明仁の方を向く。明仁は目をぱちぱちさせながら、真琴を見つめていた。
「いや……！　あの、何でもないです！　吹コンメンバーじゃないのに、こんな事言うなんて、その」
慌てて弁解しようとするが、頭が混乱しているせいで、言葉がしどろもどろになる。
「そもそも、わたし下手ですし！　どっちにしろ、弾けないし……」
ここまで言った所で、真琴の目から涙が流れ出た。
「あ、あれ」
何で涙が出るのだろう。そう考えている真琴の前に、ポケットティッシュが出てきた。
「ほら、これで涙を吹け」
明仁が、ティッシュを真琴に渡してきた。その瞬間、定期演奏会で智貴が、泣いている真琴にハンカチを渡した事を思い出す。涙が、余計に出た。
ティッシュで涙を吹いて、気持ちが落ち着くと、真琴はやっと、

話を聞いてもらいたいと思った。覚悟を決めて、話を始める。
「多分わたし……悔しいんだと、思います」
明仁は、静かに相づちを打つ。真琴はそれを見て、さらに続けた。
「オーディション、緊張して、全く上手く弾けなくて。いや、ちゃんと弾いてたとしても、今の実力じゃあメンバーになれないとは思ってましたけど」
言いながら苦笑いをする。実際に口に出すと、改めて悲しさと悔しさを感じた。
「テストも、思ったより出来なかった事もあって、気分が落ち込んじゃって……。部活に行ってもどうせ練習する曲ないしって思ったら行く気が起きなくて……サボっちゃいました」
無理やり笑おうとしてみたが、あまりにも元気のない笑い声になってしまった。真琴はそのまま黙り込む。すると、今まで真琴の話を聞いていた明仁が、口を開いた。
「前々から思っていたけど、相原は一生懸命、部活や勉強に取り組んでるんだな」
「え……？」
真琴は、思ってもみなかった明仁の言葉に驚いた。
「だって今、相原はすごく悔しいと思っているだろう？　テキトーに物事に取り組んでいる奴は、そんなに悔しいとは思わない」
「……そうですか？」
「そうだ」
明仁は、真琴の目をしっかり見て肯定する。
「真剣にやっていたから、オーディションや今回のテストで結果が出せなかった事に対して悔しいんだろう。そう思うのは、良い事なんだぞ？　悔しいから、次はもっとこうしてみよう、とか思えるんじゃないか」
明仁の前向きな発言には、まさに目から鱗が落ちる思いをした。
「俺が思うにな……相原は、物事を悪い方に考え過ぎなんじゃないか？　で、そのせいで落ち込む」

何となく、耳が痛い気がした。自分も、心の中では分かっているのだ。
「落ち込む事自体は悪い事じゃない。失敗をして落ち込んで、それを乗り越えるから人は成長する。でも、事態を悪い方に考えると、負の感情のスパイラルからどんどん抜け出せなくなる」
「確かに……そうですね」
心当たりならいくつもある。特に、オーディションの日からは、気分が良かった時が数える程しか無かった。
「何かで上手くいかなかった時、落ち込むのは仕方ない。そんな時はちょっと休め。明日からまた頑張ればいいってな。で、次の日には失敗した事で落ち込むのは止めて、前に進めばいいんだ」
歯を見せながら笑顔で語る明仁。めったに見ない顔だった。その笑顔につられて、真琴も思わず口角を上げる。今まで感じていた、霧のようなもやもやが晴れた気がした。
「そうだ、ついでに言っておくぞ。何か勘違いしているようだが、吹コンメンバーじゃない奴らだって、練習する曲が無い訳じゃないぞー」
「え？」
「確か今日、楽譜が配られているはずだが……。まあ、相原は、今日はゆっくり休んでいった方がいい」
真琴は少しだけ考える。結論はすぐに出た。
「今からでも、部活に出ます」
明仁は、明らかに驚いたような顔をした。
「いいのか、休まなくて」
「先生の話を聞いたら、なんかすっきりしました！　だから、わたしはもう大丈夫です」
言い終わった後に、自分が自然に笑う事が出来ているのに気付いた。
「それに、先輩の音や練習の仕方がいつもと違うので、いい加減行かないと」

「ああ……きっと相原の事を心配しているんだろう。それなら、行ってこい」
真琴は張りのある声で返事をする。それから、明仁に向かってお辞儀をした。
「忙しいのに、わたしに付き合ってくれてありがとうございました。じゃあ、失礼します」
明仁は「ああ、頑張れよ」と、真琴の背中を押す。真琴は嬉しくなり、もう一度お辞儀をした。
カバンを持って階段の方を振り向き、駆け足で走り出す。明仁が優しく見つめているのを背中で感じながら、弾むように階段を降りていった。

登場人物紹介２（第４章現在）（前書き）

この文章には、第４章までのネタばれと第５章に関係する事柄が含まれています。読む際には十分お気を付けください。

登場人物紹介２（第４章現在）

～真琴の友達～

青木（あおき）　香奈（かな）

真琴が虹西高校にて最初に出会った友達。二つにくくった黒髪が特徴。優しくて棘のない性格。ちなみに、香奈から真琴に話しかけた事で仲良くなった。
合唱部に所属している。部での担当パートはソプラノ。

身長……１５５．１ｃｍ　一人称……私

高橋（たかはし）　恵（めぐみ）

仮入部の日、担当楽器の希望を書く時に初めて真琴と話し、段々と仲良くなる（香奈とは真琴の紹介で仲良くなった）。柔らかい雰囲気の少女で、話し方もどこかふんわりとしている。
吹奏楽部に所属している。担当はクラリネット。第一志望の楽器だったようだ。

身長……１５８．４ｃｍ　一人称……わたし

～先輩、顧問～

武内（たけうち）　理沙子（りさこ）

柔らかい茶髪をポニーテールにしている少女。二年生で、新部長。治美とは仲が良い。
凛とした雰囲気を持っている。基本的にしっかり者だが、たまにドジをする。

担当楽器……サックス　身長……１６３．７ｃｍ　一人称……私

柳沢（やなぎさわ）　湊太（そうた）

つぶらな瞳を持つ新副部長。理沙子とは対称的に、柔和な雰囲気を持つ。治美曰く、理沙子とは「良いコンビっぽい」。
トランペットの腕前はかなりのもの。だが、彼にはトランペットよりも得意な楽器があるらしい。

担当楽器……トランペット　身長……１７０．５ｃｍ　一人称……ぼく

葉山（はやま）　明仁（あきひと）

虹西高校吹奏楽部の顧問。短髪に野太い声が特徴。年は４０代らしいが、はっきりとした年齢は部員の誰もが分かっていない。担当教科は現代文。生徒の悩みには真摯な態度を取り、的確なアドバイスをする。
明仁を音読みすると「メイジン」になるため、部員からは公共の場以外メイジンと呼ばれている。本人は満更でもないらしい。

～親～

相原（あいはら）　裕美（ひろみ）

真琴の母親。少し神経質な面があるが、真面目で優しい。真琴との仲は……

相原（あいはら）　真一郎（しんいちろう）

真琴の父親。母の裕美よりもおおらかで寛大な面がある。

浜田（はまだ）　絵里子（えりこ）

望実の母親。天然ボケで、地図が読めない節がある。千羽鶴を短い時間で作ろうとする真琴達を暖かく見守った。

0　夕焼け空の下で

「最近、空が明るくなったよね～」
　口を開いたのは、悠輔だった。そう言われてみれば、と真琴は思って、顔を上げる。オレンジと青が鮮やかな対照をなしている空と、ほのかに赤く染まった雲が視界に移った。どうして夕焼け空は、こんなに綺麗なのだろうと思う。
「もう、こんなに遅い時間なのにな……」
　真琴が考えている間に、律が悠輔に返した。校門の壁に寄り掛かっている信二が、「何お前ら、しみじみしてんだよ？」と突っ込みを入れる。
「だって、ついこの間まで定期演奏会だと思ったら、次は吹コンにオープンスクールだよ？　時間が過ぎるのは早いなって思ってさ～。そう思わない？」
「まぁ、確かにそう思うわね……」
　悠輔の問いに、望実が答えた。
「だって……吹コンまであと少ししか無いじゃん！　ありえない！」
　言い終わった後、頭を抱える望実。律が「落ち着け」と口にする。
「ま、A部門に出るお前らは頑張れよ。変なプレッシャー感じない分、俺らはある意味気楽だな。なっ、相原」
　信二が真琴に話を振るが、真琴からは何の返事も無い。四人は、真琴のいる方をゆっくりと振り向く。
　真琴は、相変わらず空を見ていた。その様子からは、今までの話を聞いていないという事が、誰の目にも明らかだった。真琴の隣にいた望実が、いきなり真琴の柔らかい頬をつねる。
「イタッ！　……もう、何すんの？」
　涙目気味な真琴に対し、望実は「あ、ごめん！　体が勝手に」と慌てて詫びた。律が冷静に、これまでの会話の経緯を説明する。
「……確かに、プレッシャーを感じないのはいいかも。でも、あの

自由曲を演奏出来るのはいいなあって思う」
真琴が言い終わる前に、望実が食いついて来た。
「真琴！　あたしと立場を交換してよー！　あたし、メンバーじゃない組が良かった！」
「それは、さすがに無理だって」
真琴は、望実の勢いに押されそうになりながらも、冷静に答えた。同時に、望実がここまで言う事に疑問を感じた。
悠輔が、望実を宥めようとする。
「望実。そんなに嫌がらないで、吹コン頑張ろう～？　僕や律もいるし！」
「……うん。じゃあ、何とか頑張る」
望実はまだ憂うつそうな顔をしていたが、諦めたかのように悠輔に返した。信二は、真琴の方を向いて話を振る。
「俺らは吹コンに出ない同士、あの曲を仲良く練習しようぜ」
「うん、そうだね」
笑顔で頷きながらも、心の内では複雑な気持ちを抱えていた。プレッシャーを感じなくて良いという安心。一方で、吹奏楽コンクールに出られなくて残念だという、相反する思いもあった。
静かに話を聞いていた律は、眉間にしわを寄せて考え込んでいた。真琴はそれに気付いて、律に声をかける。
「ねえ、どうしたの？」
「ん、ああ……。さっきから、信二達の会話がおかしいと思って」
信二が、寄りかかっていた校門の壁から身を離し、「何がおかしいんだよ？」と律に問う。
「だって……二人も出るはずだろ？　コンクール」
律以外の四人は一瞬、固まった。それから、真琴が小さな声で律に訊ねる。
「それって……どういう事？」
「オレはメイジンから、聞いた。オーディションに漏れた人は、Ｂ部門に出るって……」

「おい！　俺は聞いてねーぞ！？　マジかよそれ！」
突如、慌てた様子を見せる信二。望実がしてやったりと言わんばかりの顔で、信二に近づく。
「ふっふーん。これで、あんたもあたしと同じ運命だね！　まっ、せいぜい頑張れ！」
「何つー腹黒い顔して言ってんだよ！？　性格悪（せいかくわり）い女だな」
「誰が性格悪いって！？　むっきー！」
「ちょっと、校門で言い合いはやめようよ～！」
悠輔が、信二と望実の間に入っていった。律は三人を見つつ、ふと思い出したかのように「メイジンは明日、言うつもりだったのか……？」とつぶやいた。真琴はそんな四人を、苦笑いしながら見つめる。と同時に、真琴の視界に小さな光が映った。
無意識の内に、空を見上げる。目に映った瞬間、自然と口が開いた。
「あ、一番星」
いつのまにか青の比率が多くなっていた空に、一粒の星。小さくても輝いている姿を見ていると、吹奏楽コンクールに出る事への不安は消えていった。代わりに、コンクールに出る事が出来て嬉しいという気持ちが湧いてきた。なんとなく、右手を小さな光に向かって伸ばしてみる。
手が、光に届きそうな気がした。

1　秘密の会話と静かな告白

コンクリートの楽器倉庫の中、真琴は、コントラバスの太い弦を上の空で弾いていた。練習に全く集中出来ない。理由は、「蒸し暑い」の一言で事足りる。

倉庫の中は、何もしなくてもすぐに汗をかく程だった。そんな環境で、コントラバスという大型楽器を弾くので、体中が汗でべとべとになる。いったん練習を止めて、額から浮き出ている汗を右腕で拭いながら、真琴は思った。

ああ、喉が渇いた。

「あ～、これはもう無理！」

真琴の後ろで練習をしていた治美が、突如声を張り上げた。その声に肩をびくりと震わせながら、真琴は治美のいる方を向く。

「今日はいくらなんでも暑すぎ！　練習出来ない！　マコちゃん、外に避難しよう？」

治美が汗を拭いながら言う。真琴は首を縦に大きく振った。このまま倉庫の中にいるのは耐えられなかった。

「じゃあ、今から出ようか。マコちゃん、コントラバスを片付けよう」

「あ、その前に、先輩」

治美は、コントラバスケースを掴もうとする姿勢のまま振り向いた。

「飲み物を買ってきてもいいですか？　わたし、水筒のお茶を切らしちゃって」

治美は姿勢を直しながら、オーケーだと言わんばかりに頷く。

「その代わり、あたしの分も買ってきてくれない？　マコちゃんのコントラバスも運んで置くからさ～」

「大丈夫ですよ。何を買えばいいですか？」

「お茶がいいな～。無かったら、ポカリ系でいいよ」

真琴は了承する。治美からお金を受け取ると、素早く倉庫を出た。太陽が真琴を照り付ける。だが、湿度が低いのか、楽器倉庫よりもずっと涼しく感じた。

どことなく上を見上げる。透き通った青だな。そんな事を思いながら、駆け足で自動販売機へと向かっていった。

校舎北館と南館を繋ぐ渡り廊下。そこに置いてある自動販売機の前に到着するとお金を入れ、お茶を買おうかと、真琴は目を走らせた。

緑色のパッケージが見えて、これを買うと決める。ボタンを押そうと手を伸ばした所で、「売切」の文字が目に入った。

残念に思いながらおつりを出すバーに手をかけ、お金を出した。他の自販機のお茶を探すが、どれも売り切れの状態になっている。

「やっぱり、売り切れかあ」

落胆のあまり、声が漏れてしまった。今の時期、皆考えている事は一緒だ。

（しょうがない、ポカリの方にしよう）

幸い、ポカリの下のボタンには赤丸が点いている。そのボタンを二回押して、白濁色のペットボトルが落ちてきた。手に取った瞬間、掌にひんやりとした感触が伝わった。

先輩の所に戻ろう、と考えて、庭園と部室がある方へ足を踏み出す。可愛らしいソプラノ声が聞こえたのは、ちょうどその時だった。

「のぞみん、本当に大丈夫なの？」

つい、足が止まった。何事かと思って、自販機から部室への道を覗き込む。部室の前に、三人の部員が座っているのが見えた。真琴がよく知る人物だ。

「由紀。あたしなら大丈夫だって！」

由紀というソプラノ声の少女に返事をしたのは、望実だった。真琴はその場に止まったまま、首を傾げる。

（望実ちゃん、具合悪いのかな。一緒にいる二人は、確か望実ちゃ

んと同じ中学の……）
由紀が、首を横に振って否定し、口を開いた。真琴は思わず聞き耳を立てる。
「絶対嘘だよぉ。せーなだってそう思うでしょ？」
由紀の言葉に、落ち着いた色の髪を黒いバレッタで留めた少女が、静かに頷いた。更に、クールなアルト声で意見を言う。
「アタシもそう思う。望実、休んだ方がいいんじゃね？」
「瀬菜までそういう事言うんだから。二人共、心配しすぎ！」
望実が大声を出すので、真琴を含めた三人はのけ反った。さらに、望実は諭すように言う。
「もう一年経つし、今年は頼りになる先輩がいるから。今日はちょっと、疲れただけだから、ね？」
由紀は、大きな二重の目をぱちぱちさせていた。瀬菜は、腑に落ちないといった表情をしながらも、「望実がそう言うなら」と返した。
望実達の会話に意識を向けていた真琴は、不意に感じた掌の痛みで、はっと我に返った。ペットボトルに付いていた水滴で濡れ、赤くなっている掌を見る。痛みを感じたのは、冷たいものをずっと握っていたせいだと理解出来た。
部室のある方に向いていた爪先を、渡り廊下から校舎北館に続く方へ向ける。今、部室前は通り辛い。そう思いながら進んで、茶色のローファーを脱ぎ、北館へと入っていった。

北館の玄関から虹館に続く道を逸れ、治美を探して走る。しっかりとしたコントラバスの音が、次第に大きくなっていく。
虹館と倉庫の間にある小さな庭の、日陰が出来ている所に、治美はいた。真琴は走るのを止め、治美を呼ぶ。
治美はコントラバスごと振り向き、真琴に声を掛けた。
「お疲れ様！　意外と遅かったね～」
「すみません。ちょっと寄り道して……」

治美は首を傾げた。が、すぐに縦に戻して「うん、了解」とだけ返し、楽器を椅子の上に置いた。真琴はもう一度謝りながら、青いパッケージのペットボトルを渡す。
「お～、助かった！　ありがと～！」
治美は笑顔で受け取ると、すぐにペットボトルの蓋を開けた。
「マコちゃんも飲みなよ」
そのままごくごくと飲み始める。それを見てから、真琴もペットボトルの蓋を開け、口に含んだ。独特の酸味と甘味を感じた。
「あ～、生き返る～！　部活の後のポカリは最高だね」
「先輩、まだ部活中ですよ？」
真琴は静かに微笑む。治美は「そうだったね」と、笑顔で返した。
「倉庫にいた時は、気分最悪、もう練習嫌だって気持ちになってたけどね～」
「あの環境じゃ、誰だってそう思います！」
「そうだよね～。ついでにあの倉庫、冬はめっちゃ寒くなるし！」
今、とんでもない事を聞いた気がした。真琴は思わず苦笑いをする。
「ついさっきまでのように、もう練習したくない！　とか思う事、しょっちゅうあるけどさ。何だかんだ言って、毎日練習しちゃうんだよね～」
「それは、何でですか？」
「うーん、そうだな～」
真琴の質問に、治美は気恥ずかしそうに笑う。それから、真琴の目をまっすぐ見て、答えた。
「吹奏楽が、楽しい！　からかな」
聞いた瞬間、真琴の心臓が音を立てた。さらに、頭に衝撃が走った。一瞬で、過去に言われた事を思い出す。
――吹奏楽部は、楽しいよ！　――
「マコちゃん、どうした？」
治美が、真琴の顔を覗き込む。いきなりの事だったので、真琴は

びくりと肩を震わせた。
「あ、ごめんね！　驚かせちゃって」
手を合わせて謝る治美。真琴は「大丈夫です」と答え、さらに続けた。
「ちょっと、ある人の事を思い出して……」
「それって、どんな人なの？」
「入学式の時に出会った先輩です」
治美は、興味があるという風に相槌を打った。真琴は話す。入学式の日、一人の少女に出会った事。少女は、自分に吹奏楽部勧誘のチラシを渡した事。それから、「吹奏楽部は楽しい」と語った事。
「なるほどね～」
治美は口に手を当て、頷いた。
「わたし、いつかその先輩を見つけて、お礼を言いたいって思ってるんです」
「へ？　どうして？」
「あの先輩は、わたしが吹奏楽部に入るきっかけをくれたので。ただ、髪の毛だけしか見てなくて顔が分からないし、声もうろ覚えで。調べても、あの先輩を見つけられていないんですけどね……」
治美は言葉にならない声を出して、考えるようなそぶりを見せる。一分程経った所で、真琴に声を掛けた。
「あたし、疑問に思ってる事があるんだけどさ～。何でマコちゃんは、そんなにその人にお礼を言いたいの？」
真琴は、どうしてこんな事を聞くのかと思いながら、治美を見つめた。
「だって、もう四ヶ月経った後だよ～？　相手の方は、もう入学式の時の事を忘れているかもしれない。それに、相手はただ、勧誘しに来ただけって思っているかも」
「確かに、先輩はただ、勧誘しに来ただけかもしれません」
真琴は、治美の言葉を遮った。
「でも、それでも、わたしは先輩に感謝しているんです」

治美はじっと、真琴を見つめている。真琴は下を向いて語った。
「わたし、高校では部活に入らないって決めてたんです。でも、入学式であの演奏を聴いて、吹奏楽に興味を持って。あの輪に加わってみたいと思ったけど、この部は、入っても本当に大丈夫なのかなっていう不安もあって……」
真琴は一回、言葉を切る。それから真琴は、先程治美が真琴にしたように治美の目をまっすぐ見て、微笑んだ。
「そしたらあの先輩が、吹奏楽部は楽しいって、言ってくれたんです。その言葉でわたし、後押しされた気がして。それに、あの先輩がいるなら吹奏楽部、入っても大丈夫って思って。だからわたし、吹奏楽部に入ったんです」
治美は目を見開きながら、ただ静かに聞いていた。
「あの先輩がいなかったら、たぶんわたし、興味を持っただけで、部活には入らなかったと思います。だから……吹奏楽部に入るきっかけをくれた先輩に、お礼を言いたいんです！」
言い切った瞬間、そよ風が吹いてきた。二人は思わず、風が吹いた方を向く。肩の下まで伸びたダークブラウンの髪と、茶色くて柔らかいショートヘアの髪が、かすかに揺れた。
二人はしばらく、そよ風に吹かれた。日陰にいる事もあって、風が涼しいと思えた。いつの間にか、汗が引いていた。
「マコちゃん」
不意に、治美が真琴を呼んだ。真琴は治美の方を向き直す。
「さっきは、試すような事を言ってごめんね？　そこまで強い気持ちがあるなんて知らなかった」
治美は穏やかな笑顔をしている。真琴は何だか照れくさくなった。頬が紅くなっているのも感じた。
「先輩探し、頑張んなよ。応援してるし、あたしも、出来る事は手伝うからさ！」
真琴は目を丸くした。同時に、心が弾むような気持ちになった。
「……はい！」

真琴の元気な返事が、周りに良く響いた。

2　B部門の指揮者

虹館の二階には、和室がある。真琴達は和室の隅で、畳の上に弁当を広げ、食べていた。

「それにしても、よりにもよって『カンタベリー・コラール』やんのかよ。ありえねー」

信二がため息をつき、おにぎりを口に入れる。真琴は（あれっ？）と疑問に感じて箸を止め、右隣にいる信二の顔を見た。

「この前バスパートの皆と話した時、永瀬……君、あんまり嫌がってなかったよね？」

「あー。あの時は、ただの練習曲だと思ってたからな。まさか、吹コンで吹く事になるなんて思わなかったぜ」

信二はいかにも憂鬱そうな、曇った声を出した。信二の隣で卵焼きを摘まんでいた落合（おちあい）　航（わたる）が、からかうような目で信二を見る。

「もしかして信二、先輩や悠輔がいねぇから、びびっちゃってる系？」

「おい、うるせーぞ寝癖頭。別にそんなんじゃねーよ。ただ……」

「ただ〜？」

真琴の正面にいた恵が、きょとんとして信二を見つめる。信二は二回目のため息を吐くと、切れ長の目を伏せて話した。

「吹コンは俺にとって、良い思い出も悪い思い出も両方あるから、複雑な気分なんだよ。やるのが苦手な曲だから、余計に気分晴れねー」

以前、吹奏楽部の引退時期の話をした時。信二が、出身中学の引退はコンクール後だと話しながら、嫌な顔をしていた事を、真琴は思い出した。あれは確か、定期演奏会のリハーサルをした日だったように思う。

真琴の左隣にいるショートボブの髪型をした少女、渡辺（わたなべ）　美穂子（みほこ）が信二を宥（なだ）める。

「まーまー。もう決まっちゃったものはしょうがないじゃん？　こうなったら一生懸命頑張ろーよ」
美穂子が微笑むと、頬にえくぼが出来た。赤色基調の眼鏡をかけた少女、桐ヶ谷（きりがやいずみ）泉が続けて口を開く。
「美穂子の言う通りだと、私は思う。どうせなら、金賞を取る勢いでやるしかないよ」
確かにそうだけどよ、と信二が返す。
「B部門に出るのって、一年生だと初心者か、高校に入って楽器が変わった奴が多いだろ？　ほぼ初心者集団の俺達が今からこんな難しい曲練習して、金賞取れんのか？」
信二の言葉に、真琴達五人は唸った。その中でも、特に違う雰囲気を出している者がいるのを、真琴は感じ取る。
美穂子だった。人一倍重い気を放っていた。何故いきなり空気が重くなったのかは分からなかったが、この話題を続けるのは止めた方が良い気がした。真琴は咄嗟に質問をする。
「そういえば、B部門の指揮をする人って誰か、知ってる？」
恵が訊き返してきた。
「え～、メイジン先生じゃないの～？」
「いや、それは無いな」
泉が否定した。赤色眼鏡をかけ直しながら説明を加える。
「基本、同じ指揮者が違う部門の指揮をするのは禁止されているよ」
「それって、まじ！？」
航が目を見開いた。恵も呆気に取られた様子だ。真琴は、思わず声を呑んだ。
一方で、信二と美穂子は驚いた様子を全く見せなかった。信二が、落ち着いた様子で言った。
「指揮者はやっぱり、副顧問になるのか？　可能性は一番高いだろうしな」
「んーん。違うよ」
美穂子が首を横に振る。先程までの重い雰囲気は無くなっていた。

「多分、指揮者はねー……冬馬先輩だと思う」
（先生じゃなくて……先輩？）
真琴は耳を疑った。他の四人も同様だ。
「確かに冬馬先輩、金管のセクション練習では仕切ってたけど……指揮までやんの？　信じらんねぇなぁ」
「そもそも、先輩は何でB部門にいるんだ？　A部門のメンバーじゃねーのか？」
航と信二が、眉間にしわを寄せながら疑問を口にした。恵は冬馬が分からない様で、皆に訊ねる。
「えっと～……。冬馬先輩って？」
「フルネームは、坂井（さかい）　冬馬（とうま）。ホルン担当。実力は高いそうだけど」
泉が的確に答える。食べ終わった弁当箱を片付けながら話を聞いていた真琴は、ふと、一つの疑問が思い浮かんだ。
「あの……学生がコンクールで指揮するのって、大丈夫なの？」
「確かにそうだよなぁ。それって良いのかよ？」
航が真琴の言葉を受け、首を傾げた。
「多分、心配ねーよ」
信二がすぐさま返答した。泉が続けて説明する。
「吹奏楽コンクールの規定では、『指揮者の資格は問わない』とある。必ずしも、大人が振らなきゃいけないって事は無いみたい」
「大学だと、学指揮が振ってる所も結構あるよー。……中、高ではめったに見ないけど」
苦笑いをする美穂子。真琴は「へえ」と声を漏らす。驚きと納得が入り雑じった声だった。航と恵も、真琴と同じ様に声を漏らした。
その光景を見ていた信二は、思い出したかのように切れ長の目を見開く。美穂子に向かって声を掛けた。
「渡辺。冬馬先輩が何でB部門の指揮をする事になったか、知ってるか？」
「それ、おれも気になってた。まさか、副顧問が指揮出来ないからって、冬馬先輩に押し付けたんじゃ」

航の言葉に、美穂子は呆れ顔だ。
「もう、先生に失礼な人だなー。先輩の方から、B部門の指揮をしたいって言ったんだって」
これには、五人全員が驚いた。
「何で自分から？」
真琴が訊くと、美穂子は知らないと言った風に首を横に振った。
「それは、ウチもよく分かんないけど。よっぽど、指揮をしたかったんじゃないかなー」
「何つーか……」
言葉が詰まった航の後を、恵が引き取る。
「その先輩って、変わり者なんだね～」
真琴達は、恵に同意するように頷いた。

昼食の後は、B部門チームの初めての合奏だった。
合奏体形に並んだ皆は、音だしをしながら指揮者を待っていた。
指揮者から見て右側の一番端に、真琴はコントラバスを抱えて立っている。一生懸命弦を弾くが、弦を擦る音が微かに聞こえるだけだ。
（あんまり、聞こえないな）
二十近くある管楽器が、別々の音を一斉に吹いている。たった一つの弦楽器の音が埋もれるのも、無理はなかった。コントラバスだけ、練習場所が楽器倉庫である理由が、改めて解った気がした。
弓で弾きながら左耳を指盤に近付けて、もう一度、小さな弦の音を聞こうとする。和室の襖を開けた音がしたのは、ちょうどその時だった。
真琴は真っ先に弓を止める。襖の方を向くと、肩幅が広い少年が目に入った。
見た瞬間、ほかの部員には無い、特別な雰囲気を感じた。
少年に気付いた部員が、次々と吹くのを止める。今まで騒がしかった音が、次第に静まっていく。

少年は堂々と歩く。指揮台に上がると、白い歯が見える程の笑顔を見せて、元気ではっきりとした声を上げた。
「こんにちは！」
あまりの元気良さに、一瞬ぽかんとする真琴達。すぐに気を取り直すと、挨拶を返した。少年につられ、大きな声になっていた。
「おう、元気良いな」
少年は、相変わらずの笑顔で部員を見回すと、自己紹介を始めた。
「今回B部門の指揮をする事になった、坂井冬馬だ。よろしくな！」
白い歯が一瞬光った気がしたのは気のせいかと、真琴は思った。
「もう、チューニングはやったか？」
「はい！」
部員全員が、真顔で返事をする。冬馬は「皆、顔が固(かた)えぞ～」と、苦笑いしながら言った。
「早速、合奏に入ろう。まずは一回通すぞ」
部員が再び返事をすると、冬馬は指揮棒を上げる。その瞬間、冬馬の目付きが真剣になった。
真琴達部員が冬馬をじっと見つめる中、指揮棒が静かに振り上げられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1316i/

ブルーの低音

2011年11月11日03時22分発行